Bible. N.T. Japanese. 1877.
Shin'yaku seisho v.3

耶穌降生千八百七十九年

新約聖書

以弗所腓立比書

明治十二年

翻譯委員社中

米國聖書會社

日本横濱上梓

使徒パウロ エペソ人へおくれる書

第一章

神旨よりえらびたまひし耶蘇キリストの使徒となれるパウロ エペソにある聖徒およびイエスキリストにあつく信ぜるものへふみ状おくる二 神がはくいわれらのちゝなる神および主イエスキリストより恩寵と平康とうけよ 三 神をよび我らの主イエスキリストの父いほむべきかな。かれキリストによりてもろもろの霊のめぐみ状を天のところにてわれら状をでよめぐみたり 四 それ神わたくし状しくそのまへにきよく疵おうちなきものとなさんとて創生のさきよりわれら状キリストのうちにえらび 五 そのおこゝろのまゝに耶蘇

キリストよりわれら我おのれの子とふさんこと我愛をもてあらかじめ定たり 六そのめぐみの榮我ほめたゝめんためあり。もかをもちあいしるものよあるわれらよたゞみところの恩あを七そのめぐみのゆたかあるよをもて彼よあるわれらその血よより贖もふはち罪のゆるし我うるあり八神さぬぐ純智慧と聰明我たまへくこのめぐみ我われらよ充しめ九われらよそのむねの奥儀我こゝろのまゝよたゝめせり十これみづからさだめたまひしところあり。もふはち期のみつるときよいたるまでにあるひは天よあをあるひは地よあるよろづのもの我キリストよ歸せしめんがためふ

さづくるひとところあり十一そのことばその意のまゝよおこなふものおのれ社むねよりさづひ預われら救さざめキリストによりて嗣とあることばえせしむ十二これ前キリスト救たのめるわれら我こうれのさかえの讃美らるゝことばあさしめんとめあり十三あんぢらも眞のことばをきゝもちあんぢら救をくふ福音救きゝしのちキリスト救信トわれらが業救つぐの質あるやくそくの聖靈救もて印せらる十四神せいれい救もてりんをうけたまふその買うけしものの救をくひうつおのれの榮救あらはさんとめあり十五このゆゑよ我もあんぢらが主いこと救ゐんぼることをきゝ

くのせいとを愛まることゝ成きゝそ其あんぢらのこゝろに感
謝ーそやまびつねよわゞの祈禱のときあんぢら成おもふ
われらは主いゑすキリストの神さゝえれちゝ智慧と黙示
のみづね成あんぢらよたゞひあんぢら成ーく神をあらー
め玉まさあんぢらのあゝろの目成あきらかよーその名成
ううむりくたもつところの望と聖徒よさゞみこころの業
のさうえの富と尤まさ信ぜるなんぢらよ對ーそおこなひ
たまふ神のちからは極そおゝいあること成もらーめたま
ちんこと成願あんぢらの信ぜるい神のおゝいあるちからら
のはたらきによるあを主をおはもキリストよおこなひー

ところよりおこりてこれを死人のうちよりよみがへらせもろ〳〵の政と權威と能力と宰治まりこの世ばかりあらんとするよりも凡ところにふるところの名のうへよりおき天のところにてのみならずこれの右にざせしめおもちうらるをまきてのもの〻をこれの足下におきまた彼をまきてのもの〻をけうくわいに首とおこれを教會にたまひそのこれらところせり三けうくわいはこれの身躰なりよろづのものにて萬物にみたるものを充滿ところなり

第二章

神はそのと罪によりてところのおんぢらをもいうしなひてり二おんぢらうつそこの世のおくりもとづ

ひうの愆とつみ我おこあひく日我おくまと空中まある
諸權我もべつっさどるもの。まふいち信じもてづはざるも
のゝうちま今もてらくところの靈まもさづくり三われら
もみふ曾てそのなうまをを肉のようくまもさづひく日我お
くり肉とこゝろのおもふまゝ我ふー他人のごとくうまれ
おづらまーて怒の子ありき四もうるま矜恤まとめる神わ
れら我あのにるところのおおいある愛まより五つみま死ー
ときまにらわれら我キリストとやもまいうー（ろんぢら恩
まようりてもくそれーあり）六まと耶穌キリストまあるわれ
ら我彼とやもまよみがくらせともま天のところま坐せー

やうに、これ今より汝ちの世々キリストいエスの中
にてわれらにあたへたまひしところの仁慈をもてその恩のもつぐ
れてゆたかなることを後あらはさんためなり。ハあんぢらは
ぐみによりてもちひ得たるなり。かうによりてあり自己
によるにあらず神のたまものなり。九行によるにあらざれば
くのごとくなるは誇ものなからんためなり。十われらは神
のつくりたまへるものにして我儕はキリスト耶穌のうちに造られ
こは善事をおこなはんために、神のわざわれらにおこなはせんとて預そなへたまひし
ところなり。○十一この故にあんぢら昔は

至て異邦人なるあんぢら手柄もてにくよおとろへうろ
ぢんのものよ不割禮とやらへられしものあれば十三そのと
きハ爾儕キリストおくイスラエルの籍よあらざるハそうじんよーてこのやくそくよつんくむもびうひー契約よ
あづうりふく望ふくまと世よありて神あきのあをき十三
ちうれども今ハキリストい西よりあれバさきよやほざかりし爾儕い西よの血よりてちうづけを十五これらわれらの和ありふうろのもの我ひとつとふー怨とあるへぞその
離我おぼち律法のうちよめいぶるところの我そのにくさいまて廢せり。そハ二者をおのれよつうねこれを一の

あくらしきひとよつくりてやくくぶしめ夫まく十字架に
もてうらみ滅あろぶしぽまこれ滅もてふくうのもの滅一
躰とおして神とやはらぐ右めんくあり又まく彼きくを
くふくゐん滅つくく爾儕とねざこうりしものおよびちこのき
ものまも和平滅ねべくり大それこれまよりてわれらふく
つのもの一の靈まありて父まちつづくこく滅うるあり十九
こ社ゆゑまあんちらいまより賓旅まあらびぽまく寄寓もの
まあらく聖徒とおふど邦まく神のゐくまぞくにるものま
り二十まくあんぢく使徒とよぐんおやの基のうへまくてら
る耶穌キリストみづからそのもみの首石とあれく三全屋

みおくみたてゝ彼のうちよあり。やゝよ増きよきみや主のうちよ成あり三あんぢらもともこれのうちよ建られたり。これ靈よりて神のきみところとあるべきためあり

第三章

こゝゆゑよ爾僧いもうとんのためよキリスト耶蘇のめーうどゝあれら我パウロあんぢらゝ為よいふる二あんぢらのつめよ神のわざよさまひゝ恩ハあんぢらよきゝゝーおらん三もみたち黙示ゝ依るておくぎ依我よ志免せるあり。われ畧まくよあるせるごとゝ四あんぢらこれゝ依讀べあれよりてわがキリストの奥儀ゝ依さとれること依

ゐるべし　五　さきの代にられ我ひとにあらはれしこと
いま靈
我もてきよき使徒と豫言者とにさとしたまひがごとくあら
りき　六　そのおくぎはもろもろ異邦人ふくいんによりキリスト
耶蘇によりてともに嗣子となり同じ一躰となりて
やくそくに與ることを我うることありとわれ神のさまもて
卽そのちからのはたらきにより我もてわれに賜ひたぐみによりて此ふくいんの役者となれりハ　七　ぐてのせいとのうちに
最微ものよりもちひさき我にこのめぐみ我さきひく測る
ことたえざるキリストの富をいきうじんにつたへんこと
つ耶蘇キリスト我もて萬物をつくりし神のうちに世のはじ

じめよりあれこうこのくをそこる奥義いこん伝をべくの人ま
さそらもむ十これ教會伝もて天のところまある政伝それ
るものと權威伝もそるものま神おさぬぐのちを伝もらー
をんためあり十一こい神よくのさきよりさぐわうひー旨
まもさぐくるあり。このむねいわれら伝主キリストい必ま
まようをて成就せり十二われらキリスト耶蘇まありくもれを
もんぎるにより臆せざることを伝得まさはぐうることなく
ーく神まちうづくことを伝えそり十三このゆえまわれあんぢら
ま求わづあんぢらのためまうくる患難まより怯るをあく
れ。これあんぢらのおまれあり十四これまよりてわれらの主

い四 イキリストの父 ちゝ なる天 てん と地 ち にある諸族 ぞく のうれよ
より 名 な 被 こうむ りて一 ひと つの族 ぞく もひざまづき 十六 ねがわくは
その榮 さかえ の富 とみ よりさづけその靈 みたま をもてあんぢらの裏 うち のひ
と被 こうむ つよくちからやうまし 十七 またキリスト被 こうむ りて信仰 しんこう によ
りてあんぢらの心 こゝろ をらしめ 十八 またあんぢら被 こうむ りて愛 あい よ
ねざしたゐ被 こうむ もるをうまべての聖徒 せいと とともにさとるを
べからざるキリストのあい被 こうむ もを 十九 その濶 ひろ さ長 なが さ深 ふか さ高
さ被 こうむ をさとらしめまたをべて神 かみ よりてるもの被 こうむ をあんぢらに
滿 みた ちんことあり 二十 ねがわくはわれらのうちにおこなわるゝ
ところの能力 ちから によりてわれらのもとむるところ

ところよりも いづくまでもきれることなくあーうるまのよ 二キリスト耶蘇ようをけうくわいのうちにおく世々うぎりおくさうえ我歸せんこと我アーメン

第四章

さればぐ 主よありて四人とあれるわれあんぢらに勸なんぢらめされし召にふさはしくおこなんことを我二おとごとく謙遜と柔和と寛容なるおもひ我もてをこなひ愛我もてたがひにおのび三平和とのふ繋のうちにつとめて靈のたゞひとところの一ある我まもるぐし 四ひとらだ一みこゝろなハ一ありあんぢらのめされたるところの望のひとつあるがごとし 五主ひとつ信仰ひとつバプテスマひとつ 六

神をあはもちまべてなるひとの父ひとりあり彼はまべての
との上にありまべてのうちにまべてのひとの中にまた
ありとわれらかのくるキリストのうちふところうるの量にまた
さづけを恩賜たまふあり　ここのゆゑによりてくることあり。この
れ上にのぼりしとき擄にまるものを放ちこと賜ひと
にまくりと云ふこと何ぞ地の
さきにくだりしことをいふべきや　降りしものはまたもち諸天のう
へにのぼりしものあり彼よろづのものを滿んとて土そのの
たまひしところの使徒あるひは預言者あるひは傳道者あり牧師あ
り教師あるひは聖徒を整へて服役のことをおこなひ

キリストのうらごと徳我そ十三われら我しそみちおおく神の子我ちんーこれ我しを全人をもちキリストの満足るおどそあるまでにいまより乳嬰兒あらび人のいたりの術とまどいーの巧よごよはさることをおくさ匂ぐの教の風よりごこうされば十五あんをまて眞理我おこあひそごもちてまべてそおこと首あるキリストまならもちめんうあり十六彼我もちてー全體ひべて社百節のたばりよよまく聯絡かしまをそその肢體おのく分量よちさごひそそらきくそのうちだ我育みごうう愛によりて徳我さうるありて十七このゆえよ我こと我いひ主よありてちんおら我いなま

ーむ。あんぢらいまよりのち異邦人のごとくその意のよこしまなるまゝのせうもこゝろめぐらすべからず十八うれらこゝろ昏きものなり。まこと知ることあきよりて遠あるまよりて神の生よりおざうれを十九うれらハ恥知らずこのみてよこしまの汚穢おこなふためおのれ放蕩にわたせり二十されどあんぢらハこのごとくおしへをキリストに学ばざるまあらば二十一爾儕うれまきこうれのをしへうちにある耶穌まある眞理に学ばざるまあらん二十二あんぢらきよまあるべき人にふさはしひとに学まどをに慾のさまやぶらるゝりの旧脱二十三まこあんぢらのこゝろの霊に学あらたにし二十四神まか

さぐりて眞理のそこにちきときようきゆくつくれる新人をきるべし 二五 うくてゐつはを脫ておのくその隣よまことを談りめべし。そはわれらさぐひよ肢あれば也 二六 いりて罪談をうけたるをおうれ。いりて日のいるまでよめることあつれ 二七 あくまよ處談えさにることおかれ 二八 ぬすみおするものはまことぬそくおもることおうは迫窮まづしきものはほどこさんためよもちみて手づから善工談をなべし 二九 けがれ汚たることをあんちちの吟よりいづることおうれ。たゞ時よもちさづひて人のそくに談そうべきようきこと談いひ聽もの談しく益あらしむべし 三〇 神の聖靈談しくうをく

志もるとおうれ。あんぢら救拔うる日のごとうれの服をうけーものあり　三　あんぢらひぐきと社にづきと恚憾いうり喧嚷社とあると並ひべとその惡拔おのれよりまつべー三たびひよ仁慈と憐恤あるべーキリストよありて神あんぢら拔ゆるーごとくあんぢらもさげひよ赦べー

第五章　あんぢらあいせらるる子どものごとく神よおらふべー二愛なもておこなひキリストのわれら拔あんーわれらよこのもとおのれ拔そなくものとおー犧牲とおーて神のまくようをーきよあひあーめんとくさげうひ

ーがごとくなべー三聖徒たるにふさわしくなく奸淫および凡のけがれたるをきらい貪婪ことに放さざるひとよりもはるかうれ四淫辭をうきうることを戯謔放いふかうれ。これよろーうらざるところあり。むーろ謝恩することを放なべー五そんをべきうんめんもるもの汚穢たるものおよびむさぼるものをもち偶像放をつかむものはキリストと神のくにに放つぐ放えざることハあんぢらもれべあり六あんぢらひとの虚言をあざむうるをうれ神のいうりこれらのことによりて背逆ものにいてるあり七このゆゑによりてらうみにるとをうれハあんぢら素らうりしぶいま主よありて

ひかれり光の子どものごとくおこなへべし 九 そはひかりの むくふところは果はもべくのよきことと たゞしきことと
誠實のうちにあればあり 十 主のこころにおよろこびわきまへをあれを行へし 十一 なんぢら果なきくらきわざと與をることなく反てこれをせむべし 十二 うれらが隱におこなはるることは言だにもはづべきなり 十三 もべく責をうくべきことは光にあらはるゝ形り。
そもべくは顯はるゝものはひかりあれば形り 十四 おのゆめよ
ねむれることあり寐るものよ死より起よキリスト
なんぢ汝てらさん 十五 されべなんぢら いかによくあるひ

をるつと愼べし。さとこうぎるときはく ごとくせば智をつく
おろくー 十六 をうち祝うこをふ亀ー。こ社時あーくれバありさセ
これはゆゑよ愚かるものとあることおく主のむねにいへるとはやる亀ー 十七 大きさ酒よろふこと赤うれ。あれをなげき放蕩わを宜りくみたるよみさるべー 十八 たづひよ詩と謂と靈よこうんとてつくれる賦と祝ものかこをあひまさうたひてあんぢら社ちころよ主ゐ讃美まべー 十九 きを亀さ社こことつきて恒よわれら社主ゐいふ社キリスト社名よりて神をるをもち父よちやうべー 二十 キリスト祝おそることころろ祝ちく互よちねがべー 二十一 ○三 婦なるものに主よちこみ

ごとくおのれ夫よりたがふべし　三それキリスト敎會
はこれらあるごとくをつといつまた首あればありキリスト
も身のをくひぬしあり　四されどそのごとく婦をもそのこと夫よりをつがふべし　五夫
あるものをキリストの敎會はあいしそれ
捨しまひしごとくあんぢらもつまはあいしべし　六彼おのれ
はをしへ水にて洗はもて道よりてけがらわいはきよめ
あれはを聖潔るものとせんがためなり　七またをかくもをかくもべてうつくしきはごときたなくひかく聖よしてきずあるを
敎會はみづから已のまへにたてんがためなり　八かくは

ごとく夫そのつまをおのれの身とおしてあいすべし 妻
なる人よ 夫よ 二八 おのれを愛する者は 二九 おのれの身
をもにくむことなし 曾てあることなし。おのれを保養
すること キリスト社を 三十 われらにうれが身
社肢体なり。これが肉よりまたこれが骨なり 三一 この
ゆゑに人はちちとはゝをすてつまをしたひ二社ともに
一体となるべし 三二 この奥義はおほいなるかな。わがいふところ
はキリストと教會社とにあり 三三 なんぢらもおのおのその妻
社おのれの身とおしてあいすべし。つまはその夫社うやま
あべし

第六章

子なるものら。なんぢら主にありて兩親にそむかざれ。これたゞしきことなればなり　二なんぢら父母を敬うやまへ（これ約束ある誡めの首なり）　三あれなんぢら福ひを得また地上よく生ながらへんためなり　四父たるものよ。なんぢらの子を怒らせることなかれ。主にいましめと教訓とをそそぎはぐゝめ　五僕たるものよ。なんぢらキリストにまたごふかごとくおそれをのゝき誠心をもてにくたんまつける主人にまたごふかごとくせよ　六人を喜ばせんとするものごとくたゞ眼前のことを務むるなかれキリストの僕たるごとくたゞ神の旨を行ひ　七人につ

くるがごとくせば主はかるがごとく甘心つくべし
ハそへたるものゝ如くにして自主あるものゝごとくおこなふやうにして善くよく主より報ゆうけんことを
我あんぢらをえらびおきたり 九 主人のものをあんぢらを亦かくのごとくつかはしよおこなひく屬言我やめよ。それはうれらくあんぢらは主てんはあり。うれハかさまるところおーと爾儕をれだるり〇十おれほうおほいなん我きやうざいを主おうびその大なるちからにようく剛健あるべーと あんぢらあくまの奸計我如をぐんそめよ神の武具我をそようふべーと うれらハ血肉をたゞくみよにしべ政まこ權威ま

さまの世の幽暗の権柄のものと天にところまある惡の
靈とたゝかふあり十三ゆゑに神の武具をとれ。これ
あしき日にあひて敵をふせぎ全てを成就して立んた
めあり十四ゆゑんぢらたつて誠の帯びとして義の
胸あてをつけて十五和平の福音の沓を
へ盾を取あげよ。これにてあしきものの放つ
べて火箭を消すことを得ん十七また救の冑と聖
靈の劍すなはち神の言とを取れ十八すべて祈禱と願
とをもちて凡ての時に靈にて祈りまた此事のために
目をさまして凡ての聖徒のために祈禱をなせ

のちとをあし祈こうまぎるべし　又まさわが口我ひらくとき言我たまえりはぐうらびしーて福音我おくき我示し　干まさ我いわ書きそろえ　ごとくおれ我放膽しそひうるやう我たのみるいのるべし　これ此ふくいんのさめに使者とふりて鏈よはふがれよう〇三愛けるきやうだい主よ恋心よそはりみるテキコわがいうにしてあるう我こう我ふんぢらよ告ちらせん三これこをを特よふんぢらよつうちんふんぢらよ我わ少我ちらせ。まさ彼をしくなんぢらよこうろ我ふぐはめちんうめふり　三ねがをくい兄弟ちくみる神を主いい近ばキリストよりちんうろよそくく平康と愛我

えんこと我 願(ねがわ)くは我らの主イエスキリスト我ともにあり
しきおいらるるまでわれをみまた恩(めぐみ)あらんことを我アーメン

新約聖書(しんやくせいしょ)以弗所書(えぺろすしょ)終

使徒パウロピリッピ人へおくれる書

第一章

一キリスト耶蘇の奴パウロとテモテピリッピにをるやこころの
キリスト耶蘇へつるまべての聖徒および監
督執事へぬみ祓おくる二ねがはくはわれらの父
ある神および主いエスキリストより恩寵と平康祓うけよ○
三わんぢらはじめの日よりいまにいたるまでやまよ福音
へあづかるによりて四我わんぢら祓おもふごとにわが神へ
謝せ五まつねにわんぢらをべてのたのみねがふごとに
よろこびて求六わんぢら祓もろ祓うちに善工祓はじめ
しものこれ祓主いエスキリスト祓日までへ全をべしやまれ

如うく信じ、せかく社ごとくわが心おもひ宜あるなんぢらつねに我こゝろにあるよりる。そは我あるときおよび如くいん哉辨明しこれ哉堅固もるときもなんぢらい皆わ是と宣もよわがうえ体恩よあづこれべあり八われキリスト耶蘇のまく〻ろ哉をくあんぢらもべて哉おひもくふことよつねくいその證哉なんものい神あり九まことあんぢら社なの以知識をもろく社智慧社うちにまたく大よ祈りて最もくれうるところ哉わ紀ま亟もり十一耶蘇キリストによれる義の果哉みとせて神の榮光と洞まれ哉ならもしキリスト社日のたゝめよきよく去くなやまも祈ろらんこと哉祈十三

きやうざいよ願いあんぢらわが身よりもところの事ごとく福音のまことみゆくたけとなしし我もれ三のくてわが縲紲にこうむしいキリスト社つめおることをでよ王をまもおところ社陣營および他社ひとびともを亟てたきらゝに去られそう 十四我彼はめよりて兄弟そちおほくいま主我ちんぎる乃心我につくし益いたみておそることおく道我はそふ 十五まこと猜恨をあらそひよりてキリスト我宣をあり。まこと善こころざしよりてあれ我をおもあり 十六彼はわがおはめ乃そるをみ我増加んこと我おもひ誠社こころおく黨我むさぼ心よりキリスト我社亟 十七此はわがふく

いん我辨明もるために立られしことを我ら愛心よりキリスト我ら
我ら大然ばいうん。以づれまもなれあるひい偽あるひい
誠をもよりぶることろハキリストあればわれこれ我ろこ
ぶ且はねよろこぶん十九そんあ社事のあんぢら社祈禱を
耶蘇キリストの靈のたまもけることよりてつひよわが救とあ
るべき我もれべあり 十八こを迎わが切よねがふところ望をこ
ろもふはち我もべてのことよ愧ことおく今もつね社ごと
く臆せずいけるよもあねるよもキリスト我しくわが身ふ
くりてあがめられもちんとおもふよう二十一わが生い
キリストよりてあまことあねるもわが益あり 二十二されど肉躰よ

ありていふることを若わづからきの乃果我むしろ如ことくあるを願くはいづれ我えらぶ所きらん我これを我しらず二三これ二ふたあひだよはさまれさり我願ひ世をさりて基督キリスト共ともにらんことあり。これ最よきことあり三而されど我にくさんよりもつとまれい爾僧のつめさらよ必要あり三五われ如このくことは我信ぜるがゆゑよ存てあんぢらをべてのことともよ世よもみあんぢら我しく信仰我まきしめあんうよりいづる喜我えせむるよりさらんあと我知二六われ再あんぢらとともにをらべあんぢらのよろこび我よりりく耶蘇キリスト社うちよりまもく大ならん二七われさあんぢ

らよキリストの福音をかゝふ行ふ能はざる者なり。これわが性をあんぢら能みるときも離くなんぢらの事能きくときもあんぢらが靈能ひとつにして一たく立ぬくいんの道をさゝえよろこび能おもはせ二八て反てこと〻つき敵をおどろかされざらんこと能おそれ。そもて敵をおぢろかざるはてきまいほろびの徴あんぢらにとり救のあるしるし。また神よりきたるあり元そのあんぢらに賜ところをめぐみハキリストのたえよりぐこれを信ずることのみあらば亦これがために苦をうくるあと能もたまひされバあり三年倍あんぢらをあやみあり即ちの

あんぢらがきくところなれはあるあやみとおもひ
第二章 をゝキリストにあるもゝえと愛よりおこるさえと
靈のまゝはりと慈悲とあるれみとにらべ二あんぢら念
おおおろうし愛心なおおおろうし意をおなせそおをふことなく
むとろよゝわゝ喜なみゝゝめを三おふことなおもふよも
黨なむもひおひい虛榮をもとむることろなくいだくべう
らばを各へりそぐりする心なをたぐひ人なおれゝ陋
されりとせを四まゝおのゝくおのゝ事のゝをうへゝをみぞ人
乃ことなもこのゝりみを五あんぢらキリスト耶蘇のこゝろ
なをて意とおゝ六これハ神おうちにくをゝうども

みづからその神ゆゑしくなるところなることを
知ことく おもはばしち反そおされ我むおーうー僕のうちち
我とりて人なごとくあれり八既よひとなごとき状まてな
らをれ已我ひろこー死まいくるまで順服ふふどう社死我
さへうくるにいたれり九こゆゑに神いまるいざおく彼
我あがめてをろくの名ままさる名我これまたうくさるべく
り十こい天にあるもの地まなるものおよび地のおさまな
るものの我ーてことぐく耶蘇社名まとりて膝我こうめーを
土且ことろく社舌我ーてことぐく耶蘇キリストハ主あをと
いひらをーて父ある神まほまた我歸せーをんさめあり

十二 されば我あんじゐることころはをのを爾儕つねふもさうぐ
るごとくおそはをそれきて已がをくひ救全せよ。わづかもも
ふをりしときなるべば我をらざるべまハことふしの
ひをきあり 十三 そいかみその善旨救おこふをんとてあんぢ
らの衷よはさらきあんぢら救して志救さて事救おこふそ
志むれべあり 十四 をくてのこと怨言ことふくまさおらそふ
ことふくしをく行べし 十五 これあんぢらがのけふくまごとふ
く神の子とあをゆづれる耶ふる時代よりてせむべきと
ころなくらんさえあり 十六 あんぢらハこれ時代ふりて
光乃ごとく世よにらられいれおちれ道救さもてを。のくて

キリスト汝日のさめふわれ汝して我もこふひしところ労苦しところのことのむるしくふらざる汝よろこをしめよ主ふんぢら汝信仰汝そふくを汝としてけしげんふんさとひわの血汝ふかしして灌ともわれこれ汝そろこをん爾儕すべくのものと空もよそろこげん六ふんぢらもおれがさめよ歡喜われとそもよろこべ七われふんぢらがたをさ母汝ふり心汝ふぐさめんがさめ速ニテモテ汝ふんぢらよつてのそさんこと汝主い近きよそて汝ぞむ八そへこれの母のよ我とおふどふしろ汝もてふんぢらのこと汝ふんどつよ慮そのふされば九ふり三お同くの人ハみふおれがことふみ

我もとめて耶蘇キリストに
ことを我もとめ
給ふ三されどテモテ
は鍛錬
するこゝろハあんぢらのしるところなり。
ちゝにおけるごとくわれと
ともに福音
につくめよ
り三このゆゑに我
が
ことをつひふくうど
らべきにちゐ彼
我つゝもさんとにぞむ
四
亦われもみづ
らをみやうよゆうんこと
我主
よりさうたく
信じ
五あくの
れども我
のあらび
先
あんぢらにつうひふそわづ
乏
我おぎ
るひわれとゝもにはたらきれくやうも
戦
我おせる
わづ
兄弟
エパフロデト
我あんぢらにつうもさびるをうらびとお
もくう
二六
をは
彼
おのづからきゐ
病
することのあんぢらふきく

えし我もてぬぐくあんぢらをべてよ　もし我戀をさひこのつ
氣ぬをだをれば　あり三實ようれい病にあひくはとんど死
よちてつぐり。されど神これ我なれみさめくを。惟うれ我
なをれむれみあくばわれ我もなをれみ我してわが憂に
うれくをこのさねざらーむ　六このゆゑよわれいをくをみや
う二彼我つっはとん。これあんぢら我して再うれ我みく喜
しめ且そぐうれく我滅とんぐさあり元されば　あんぢら
主にうろろこびてうれ我迎うかくおごそ我人我たよ
とぶべし　三七そへうれい巳ぐいのち我うくをみび死んとは
るでうりキリスト我さあにはさらき爾儕がわれ我さえく

るところの缺なおぎおひそれべあり

第三章 終にわれこれをいはん。おゝ兄弟をんぢら主のたまものなることを我これをこと能あんぢらはこうきおそるゝはわれに煩勞なくあんぢらに益ありニあんぢら犬に注意しめ惡き工夫おこなふものを愼三そんな神をみてぬよろこびてつゝ究竟おーキリスト耶蘇よりて ほこり肉躰にさしみぬぎるわれらハ眞のこうもいに割禮をうけたるものなればあり四然どわれまことにくそいに特こと我うるあり。もし人にくさいにさしむこと我得とおもひぐわれんさらにさのむこと我うるあり五われん第八日にうつれんをう

くる者にしてイスラエル社族ベニヤミン社支派ヘブル人よりうまれたるヘブルびとあり律法によればパリサイ社ひと六熱心にしてれば教會を攻せむるまでおきてによるところの義によればのけるきものありしされどわれ前にわが益となりしところをへキリストによりて損となりとおもへりハ然のみならず我わが主キリストいよいよを識るをもて最まさりとおもふことなほまたゆゑによりてすべてのものを損となしわれ彼をえんためにそれらをすべてのものを損せしうどこれを糞土のごとくおもへりカれキリストを獲つまんうまたとづきて神よりいづる義をはちおきて

よろこばるゝおのゝ義よあらばキリストを信ずるによりて
ころゝ義我がもちてキリストよりうけまた彼とその
くるみづからその能力我をその死にありきぬにあづかり
うれの苦よりづくり土ぐふもこゝくにも死にさるをもの復生
ことを我えんがためあり三われこれらを望我をまえんがり
とりよりあらんびまたをでに全せられさりとりよりあらんび。
ひうるひいうることあらんとそわれさをこれ我追えとむ
キリスト　これ我えさせんと我我さらくさめくるあり三兄
弟とわれみづからられ我とれをとおもはび。たゞこの一事
我つとむ即ちうしろよあるものをわすれ前よあるものを我

ぞみ吉神キリスト耶蘇ようをて上へそ〳〵てうまふところ
乃褒美ばえんと標準よむうひくもく〳〵むあり主このゆゑよ
われ〳〵のうちひべく全きものへこうくのごとき意ばいぐ〳〵べ
ーあんぢら若おにごとよりらびことあるおもひばい懐うべ
こればも神あんぢらに示さまうん夫されどわれら已よいい
うれるところよありておあど法よもさがひておこるふべ
ーさきやうだいうあんぢらみお我よおらふをのとあれ且ろ
あんぢらの模楷とあるわれらよもさがひをおこるひばおれもれ
ばれ視をえそいわれもばくあんぢらよ告ゆまはう泣ばおぶーてあん
ぢらよつぐることくキリストのおふどろ

と敵（あだ）しておこなふものおほければなり　先（さき）にもしばしばいひしが今（いま）もなほなみだをながしていふ　かれらのをはり滅亡（ほろび）なり　おのが腹（はら）を其の神（かみ）となし　おのが羞辱（はぢ）を其のほまれとなし　世（よ）のことがらを慕（した）ひおもふ　二　されどわれらは天（てん）にて　天よりわれらの救主（すくひぬし）なる耶蘇（いえす）キリストの來（きた）りたまふことを俟（まち）つ　三　かれは萬物（よろづのもの）を己（おのれ）に從（したが）はせうる能（ちから）よりてわれらが卑（いや）しきこの體（からだ）を變（かへ）てその榮光（さかえ）の體（からだ）のごとくならしむべし

第四章

されば我（わが）愛（あい）し慕（した）ふ我（わが）喜（よろこび）我（わが）冠（かんむり）なる兄弟（きやうだい）よ　かくのごとく主（しゅ）に立（たつ）べし

ニわれ主ユウオデヤよもと免スントケに勸うれちゞ主よあ
りく心ゆあるしりせんこと祇三わゞ眞のこゝろを請あんぢ
らこの如くり社婦さち祇たまふよ彼儕クレメンスおよび
ほかのわゞはたらきの侶あるひとゞくとちから祇恊われら
とゆもよつてつゝしめく福音祇ひろめさり。四あんぢらつねよ主よありてを
の書よろるされたるあり。五あんぢらも名ハいのちの
ろこべ。われ復りよあんぢら喜べー六なんぢらを免を社人
祇ーてそれ寛容あるこゝろ祇ちらーめを主をちうー六あに
ごと祇もおそひうづらふあれたまとくよ祈禱祇ー懇求
祇ーうつ感謝ーさおのがをとむるところ祇神につゞよ

七 神より出でし人は互にかくおもふところよりぞ平安
いかんぢら其心と意はキリスト耶蘇によりてゆをらん ハ
兄弟をそそをまわれこれなきいかん。おほそ眞實あることお
よそ敬ふべきことおよそ公義おようそいさぎよきことおよそ
愛すべきこと凡そ称きこえらることまべてこれらある徳い
このるほまれるくもなんぢらこれ以念べし 九 なんぢらわ
れより學びところ受けところ聞けところ見けところ以みて
おこなへさらば平康なる神なんぢらとともからん
十 それなんぢらが我以おほまくろの今まさやうやく崩せし以主
よりてはるかをろこべり。なんぢらい素より

われ我おもひみるれども機を得ざりしあり十一われ乏きよ
りてこれ我ゆゑあらん。そん我ゆゑのあるさまをするもそ
れ我まて足りぬることく我まゐ富をあを十二われやしき
よをる社道我ありまゐ富ゐ我る社みち我あを飽ことも飢
こともとむことももきこくも諸社こくをおいくわれ
これ我熟煉せを十三われいを色ゐ力我あくみるキリストゐ
りてを色てのくく我あうるあり十四されぐもわゞ難難
社をりゐわゞくを我あせしいまことゐ善十五ピリッピびと
をあんちらもまゐ知わゞぬくゆん我はくみるをトゐマケ
ドニヤ我をあれぎるとき授受我あして我我くまけしもの

ハそでぁんぢらゐみまして他の教會をこれこそあうりき
六ぁんぢらいわゞのテサロニケにあるぃとき一度ぁらばに二
度までもひと絞つてのたまわゞ乏絞うけそうり七また餓贈
絞もとむるまあゝばだぐぁんぢらゞ益まある果のおぼこの
らんこと絞もとむるあり大我またいくさをめそまはり
くたゐをあり。われまそまエパフロデト社手とりううばゝきにな
ひまして神社うけうゐみそこころ悦うまみそこころ社祭物か
るぁんぢらのおくりもと絞うけく足り九それわゞの神ハお
のれお富まもてぐひてキリスト耶蘇まうを榮光絞もて方
んぢらおそもゝきそころ絞補うまりん十わゞたくハわれ

らるゝみよ世々さうえあらんこと彼アーメン三
あんぢらキリストよある聖徒おゝくまやき彼問われと
やゝもよある兄弟どもあんぢらよやき彼と一と三諸のせ
いとうもあんぢらよ安彼とよカイザルの眷屬おものわれ
くあんぢらよやき彼とくり三ねがたくハうれらの主い
ゑをキリストの恩あんぢらをべてのものとやゝもよあらん
ことをアーメン

新約聖書腓立比書終

使徒パウロ コロサイ人へおくりたる書

第一章

神のむねによりて耶蘇キリストの使徒となりたる
パウロおよび兄弟テモテ ニ 書をキリストにあるコロサイにを
るところの聖徒と忠信なる兄弟たちへおくる。ねがわくは
われらの父なる神および主イエスキリストより恩
寵と平康をうけよ〇三四我儕なんじらがキリストイエスを信
じることおよびすべての聖徒をいつくしむることを聞てなんじら
の爲にいのるとき恒にともろの主イエスキリストの父なる
神にこんしゃを五なんじらが如此せんことを愛をるなんじ
らにたのめる天にたくわえおるところのその即さきにきく

いんの眞理のことぞ此をうけきゝ〳〵ところのものを望
ぐゐるより六この福音いせうんよりなまぬきぐごとく爾儕にも
きたるまり且るんぢらがこゝろをきゝて神のめぐみを眞實よ
さとりし日よりるんぢらのうちに果をむすびまたゝく大
よるまるごとく世界にも果をむすびて大よるまり七こう
福音いてきたるの愛まるあるゞ役者エパフラスよりるんぢら
ぐ學るところのものより エパフラスいるんぢらのためよキリスト
の忠信るる者べより八彼さきによるんぢらが靈よこうんと
て懷るなんをもてまた告九このゆゑよりてきたる日の事をきゝ
し日よりるんぢらのためよたえず祈禱をしこのう求ねぐ

もてふんちふ靈のてなるまことの智慧と顯悟とをもて
てこゝろ〳〵神旨をわり十まことのことを主をよろこばせ
んがため其みこゝろにあてゞひて日をおくりまことの善
事よりて果をむすびわる神をわるによりてやう〳〵德を
まし十一また神のさゝえの權威よりたゞひて賜はるわる〳〵
能力をえて強わり凡事よろこびて恒忍わる久耐十二またを
まことをしりて光よりあるせんとの業の分をうくるにたれる者
とるふしめたまへ父のめぐみを感謝せんことを十三わをわれ
時のけんゐよりてまことを救いだしてその愛子のくにゝう
つしたまへり十四てまことその子よりて贖まことをそも罪の

るゝをうるなり 十五 このまゝ人のみることをこえざる神の狀よ
りてまぐそのつくりまゝものゝ先よりまでゝをもとめ
十六 そは彼よりて萬物つくりまたり天よあるものゝ地上
よりるもの人のみることをうるをもの見ることをこえざるをもの
或いくるゝある者ひろひ主たるものあるひい政をとる
をものあるひい權威あるをものまぐそのもの彼よりてつく
らをたり且そのつくりまたるい彼がためなり 十七 このまゝ萬
物よりさきよあり萬物このまゝよりて存ることをうるなり
十八 教會いこのまゝの身體ゝして彼いその首なりこのまゝ元始よ
りてまぐそのことよつき長とるゝんためよ死のなかより

をしめす生ける望のゆゑなり廿三又その父をしてその徳をもて彼よみてしめその十字架の血によりて平和をなし萬物をその地上にあるものの天にあるものをしてかれによりて己と和らがしむることこれ是その身ごころによりてなすところの惡行をおこなふによりて神にとほざかり心をそその敵となれるものなりしが廿二神いまキリストの肉のからだをもてその死によりなんぢらをしてその己とやもろもろせ潔淨くけがれなくして己のまへにたてしめんとせ三をしなんぢら信仰にとどまりその基をさだめうち堅くしてふくいんの望よりうごかざれ如此せらるることを得

べし。この福音はまだもろもろのきよきところより且
またぞく天下のまだぞくその人よりもとめられたり。されどパウロその役者
となるまたり〇二四今われなんぢらのためによろこび
苦をよろこび
又われ肉體をもてキリストの體なるまだ教會のために
患難のうけたるところを補ふ二五われなんぢらのために神
のたまふところの職よりたちひこの教會のつかへびとなる
りてあまねく神のことばをつくさんとす二六此ことばは歷
世歷代よりまだ奥義なりしが今その聖徒にあらはされた
り二七神せいとをしてその異邦人のうちなるこの奥義のさ
かえのいかに豊なるをしらしめんとおぼしまへり。この奥義

いるんちろのるろよつたへ〳〵キリストるり彼いるんぢろの
のぞむところの榮光のぞこるり二八ところ彼をつたへ各人
をさとめ諸般のちゑをそそひとびとを教ひとびとをしへて
キリストのうちよ全をえそ神のまへよたち〳〵めんことを二九我
こをぢなめよ大能をそそそぐ裏よはたらく者のそたろきき
よおたぐひ力をつよくそ勞をるり

第二章

ところるんぢろおよびラオデキヤよをるひとびとまた
我にくたいよある面をいまだみざる人のなめよそぐ心をらう
まるこというぐろりるろをるんぢろぐちんことを望二そぐこころ
を勞をるへこのまろぐ心あいよりてひとろよるり疑をい

だらざる全きさとりの富をえらう父なる神とキリストの奥義
をしりて安慰をえんことを欲まるるなり 三 智慧と知識のた
くさへい一切キリストよこうくをあるなり 四 誰なんぞも巧言を
もてるんぢらを欺くことるなからんために我これらのことを
いくり 五 夫こそ肉體はるんぢらと離をるといへども靈い
るんぢらとともをりて喜るんぢらが次序あるとキリスト
をちんまる信のかたきを見るなり 六 るんぢらはそぞ主キリ
ストいエスを承たまを彼よありてなほむべし 七 るんぢら
根をうえおき彼よありて德をたて又をしへをうけたる
ところよ從てちんうをうたくし此をまもく大まして

感謝せよ（）八 なんぢら愼べ〳〵あそらくはキリストよおながを人のつなくと世の小學よおなぐひ空言なる理學をもてなんぢらの心をうばるん 九 そを神のみちなきる德えことぐく形體をるしてキリストよをめり 十 彼はまべそのまつりごと權威のうしらるり。なんぢら彼よありて全備をることを得るり 十一 なんぢら彼よりて手をもてせざる割禮をうく卽にくのうろだをぬぎさることろのキリストよ此うちをいるり 十二 なんぢらバプテスマをうけて彼とまもよ葬られまた死より彼をよをがへらせし神のはたらきを信ぜるよりて彼とまもよ甦らさをたり 十三 なんぢら前よを

のろくのつみと身にうきいるきとよりて死たるものあり。されど神のんぢらをしてまぬかれての罪をゆるし彼とともに生しめ十四のつ手よりてあるせいしょのてきりをせむる規條のふみ卽ちわれらにさからふものを塗抹こきを中間よりとりさり釘をもてその十字架につけたまへり十五又まつりごとをとるこゝろと權威あるものをはろばし彼儕をまぬかれのもれよ示しキリストによりて勝ほこれり○十六この故にあるひは飲こと食こと或ひは節期或ひは月朔或ひは安息日のことよりて人をしてのんぢらを議せしむることなかれ十七これらは皆きたらんとするものの影にし

てそのまことの形ハキリストよつけり十八
ねうくだることとら
天使をはいするこことよりてゐんぢらの褒美をあざむ
きとらんとする人よそのよろびをとることるなかれ
とき人いまだ見ざるものをうべひ己のこころよ志たが
ひて妄よはう首よつくことを せざるなり十九全體このう
らよりゐんぢらの節と維をもて相たすけ相つうるより神
よそだてられて長ふりニ十ニ二をしるんぢらキリストとやもよ志
にて世のせうがくよりもまたらんよハるんぞ世よあり
て日をおくるものごとく人のいましめと教よ志たがひ
捫ふうまた嘗ふうまた觸ふうまといふ律法の下よまるや。こゑ

らの禁じたるものは、すべて人ごゝろを用ゐをつくるのみ。二三これらの規條はみづから縱ましくて拜するごとをなし。このろ謙遜こゝろ身をおしまざるまよりて智慧あるものゝごとくみえもすれども實はなふときのにあらず唯にくたいの慾をみちたらするのみ

第三章 既にるんぢらキリストと共によみがへりたれば天にいるものを求めよ。キリストこゝにありて神の右にざしなまへり。二るんぢら天にあるものをおもひ地にあるものをおもふべかれ。三夫るんぢらは死しものにてその命はキリストと共にる神のうちにこのくまをるのり。四キリストはその命

るるキリストのあらはれたまふときはなんぢらもこれとともにかがやきあらはるるなり　五　此故になんぢらの地にある肢體をころせ　姦淫　汚穢　邪情　惡欲および貪婪をころせ　貪婪は偶像を拜するごとくなり　六　これらの事によりて神のいかりきたるべきものにいたるなり　七　なんぢらもさきに斯のごとき人のうちに日をおくりしときは此等の惡事をつねにおこなひたれども　今はまたべて　これらの惡事　および　恚憾　忿怒　暴戾をすて　謗讀　醜言をなんぢらの口よりさらんことをつとめよ　九　なんぢらたがひにかたるなかれ　舊人とその行をぬぎすてあたらしきひとを衣なきびたるひと　誡をいふるうちに十

この新人はいよ〳〵あらたなる人をつくり〳〵もの〳〵像よ
りあたらしひて知識にいたるなり十二〇このごとき人はいかうていは
ギリシヤびと〳〵ユダヤ人あるひは割禮あるものとうつまじはるも
き者あるひは夷狄たるひはスクテヤ人あるひは奴隷あるひ
は自主の別なし〳〵夫キリストは萬物のうへにあり亦萬物
のもの〳〵中にあり〇十三〇このゆゑにあなたがた聖潔にして
聖潔にうつ愛せらるゝものとなりたるを慈悲めぐみ謙遜に
うを忍耐を衣よ十四〇なんぢら互に容忍をなし〳〵人に
せむべきことあらばこれをゆるせキリストなんぢらを恕た
まへるごとくなんぢらも然をせ〳〵十五〇此なりゆくの事のうち

よ愛をくゝへよ。あんハ衆徳の帶なり 十五 なんぢら キリストの
たまよ平安をしてその心をつゝきどゝしめよ。なんぢら一一
體よありてこの平安よいたるべき召をうけむまりなんぢ
ら恩惠よこゝろぞべし 去キリストの道をしてなんぢらの心よ
もめて充足しめ。まべての智慧よより詩と歌と靈ようんじ
てつゝまる賦とをりてたがひよ相をしへ相まとめ恩惠よ
こゝろのうちよ神をさんびまべし 十七 なんぢらの
爲ところの諸事あるひハ言あるひハ行みな主イエスの名
のためよこれをなし彼よよりてちゝなる神ようんしやを
べし 十八 妻なるものよその夫よまとぐふべし此ハ主よあ

るものゝ多きことあり 十九 夫るものよその妻をあいもべし苦をもてこゝをあしらふなり 二十 子たるものよるんぢらもべてのこと二親よあだがふべし。こゝ主のよろこびたまふところあり 二 父るるものよるんぢらの子をいからもるるなかれおそらくはその氣うるん 三 僕るるものよもべそのこと肉體よつける 主人よおそがふべし人をよろこぶもる者よごとくなり眼前のことをつとむることあるく誠心をもて神をおそれてあだがへ 三 るんぢら何事もひとつらふるがごとくせば主よつかふるごとく心よりこゝを行べし 二四 そんるんぢらハ主より報賞る嗣業をうくるこ

とを為るものの為まびなり。汝んぢら主なるキリストよりふべし　二五不義をおこなふ者は、その行ひたる不義のむくいをうく主にうけよりみたまふことなし

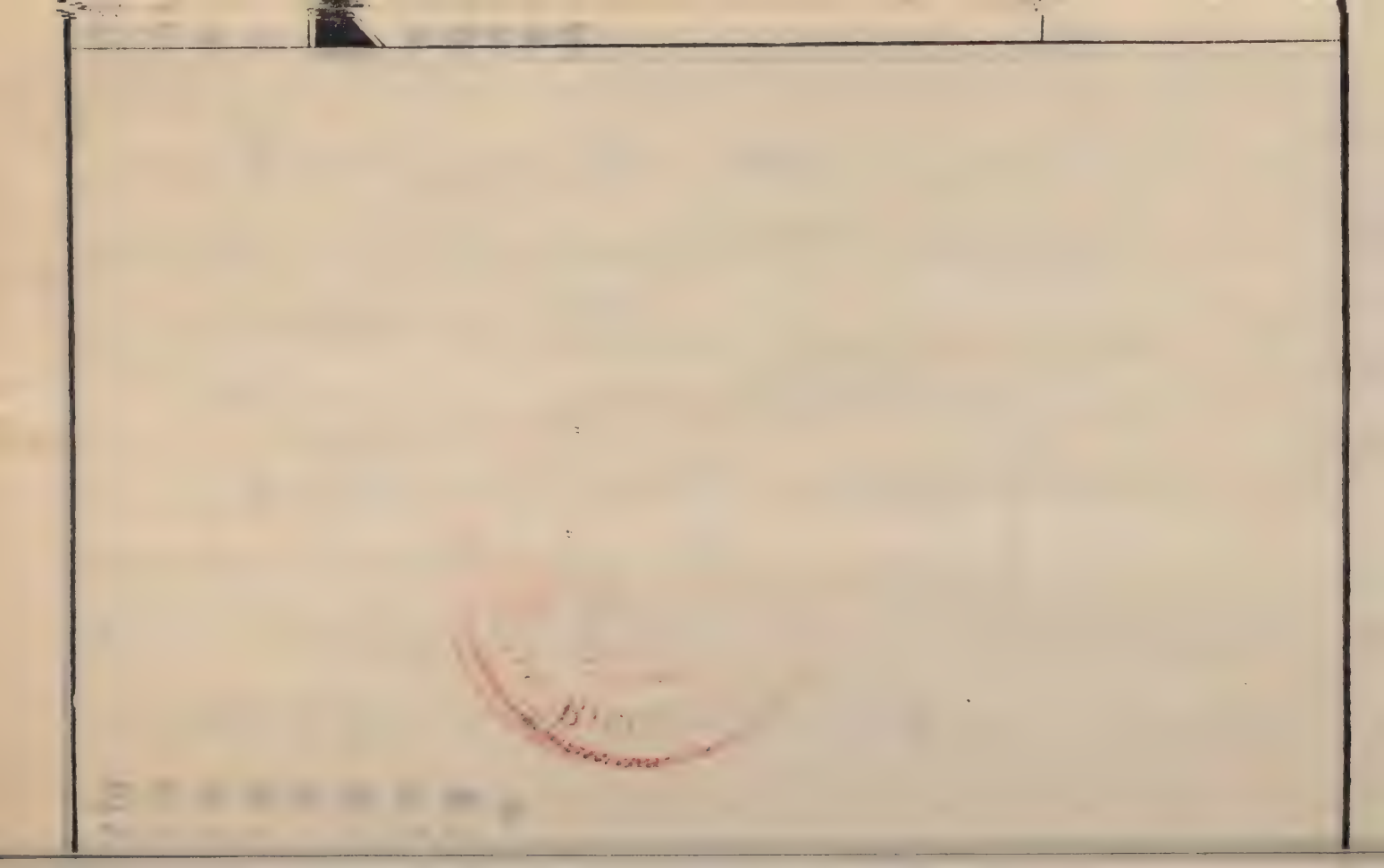
第四章　主人なる者よ汝んぢらも又天に主あることを知れば義と公平とをもてその僕をあつかふべし　○二つねに祈禱をなしおこたらずして感謝とともにこれをなすべし　三また神われらに道をひらきて門をひらき我儕をしてキリストのおくぎをうたふらしめ　四我いふべきところのことをことの奥義をあらはさしめたまへんことをつとめよ　五のなめよいのるべし　我このおくぎのために繋がり

五 なんぢら機をうかゞひ智慧をもて外よりある人よまどをる
べく六 なんぢらの言つねよ恩をもちゐろひ鹽をもて調和
べく。さらばいかようにて各人よこたふべきことを志らん
七 つとめ愛をる兄弟ちゐうをる役者これとをりよ主よいふ
ふる僕テキコてる事をこゝろぐくなんぢらよ告志らせん八 我
このまきを殊よなんぢらよつかまれへ彼をしそなんぢらのこ
とを知なんぢらのこゝろをなぐさめしめんためなり九 また
た忠をるつとめあみをる兄弟なんぢらのうちれ一人をる才
ネシモをこのれとをりよ遣せり。このまき此處のことをそそ
ぐくなんぢらよつげ志らせん十 我とをりよつかがる。アリ

スタルコおよびバルナバの甥マコるんぢろよ中をきを問、このマコ
のことよついくいるんぢろまでよ命をうけたり彼もしるん
ぢろよいたろべこまを接べ〳〵 十二ユストとるづくるイエス
るんぢろよ安をとふ割禮をうけしものゝ中たゞこれ二人
のゝこりまとまりよ神のくにはなめよはくろけり我
よりて安慰をえしまり 十三るんぢろのうち此一人
リスト耶穌のおりべなるエバフラスるんぢろよ中をきを問この
まをつねよるんぢろのためよ力をつくして祈禱をなし
んぢろが完全をえ心をうろうして立まべそのこと神のむ
ねよおたぶるんことをねぶへり 十三我このまぶるんぢろ及

ラオデキヤ ヒエラポリよあるこゝろたゝめよ甚こゝろを労する
ことを證せんこゝろが愛する醫者ルカおよびデマスるんぢ
らよ安をとふ 十三 請るんぢらラオデキヤの兄弟たちとヌンパス
およびその家よある教會よゆをきをとへ 十四 るんぢらまで
よこの書をよまばこゝろをまたラオデキヤ人のけうくもい
よよませ爾儕もまたラオデキヤよりきたる書をよめ 十七 アルキ
ポよいへるんぢ主よありて受しところの職をつゝしみてく
盡へしと 十八 こゝをパウロ親手るんぢらよゆをきを問るんぢ
らよゝをの縲紲をおもへ。ねがはくは恩寵るんぢらとあるよ
なのこん ことをアーメン

新約聖書哥羅西書終



PROPERTY OF THE AMERICAN BIBLE SOCIETY
米國聖書會社藏板

使徒パウロ テサロニケ人へおくれる前書

第一章

パウロとシルワノとテモテ書ち〳〵ある神おゝよび耶蘇キリストよあるテサロニケびとの教會へおくる。ねがはくはわれらよりてある神おゝよび主いゑすキリストよりてあんぢら恩寵と平康とうけよ 二 われら祈禱のうちにあんぢらの事をのべてつねよあんぢら衆のうへよ神よこうんをやよ 三 あをあんぢらが信仰よりてをこなひ愛よりて勞ーわれらの主いゑすキリストよりたえずむよりて忍耐こと我われらのちゝある神のまへにおもひたえばおもふがゆゑなり 四 神よあいせらるゝ兄弟よまことこれあんぢらの撰

れさることなきをもとりてあり五われらの福音あんちらよきことりーハたゞ言よりてのみあらば能にうり聖靈にうりまうつき信仰よりてあり卽われらあんちらにうもよりて爾餘のことゝよりおこなひーう故あんちらにあるごとく六且あんちら大難のうちよせられいのちろこび故にて道故うけわれらおうび主よあらひ七マケドニヤとアカヤよあるもべてにもんじや社模楷とあれを八主社ことばあんちらうりぐきーハたゞよマケドニヤアカヤのみにらず而ーてまたあんちらが神よむうくる信仰ぢ至てにもところよひろまれりこのゆゑよわれらあふごともい

ふよおよびて九そんこうれら我儕のこと我こうをてわれらいつのあるさまをみてあんぢらのうちよ進うらあんぢらぐうざう我棄かみ小歸をくいくる眞神につうく十その子の天をうり知る我まつといふべあり。それ子いまるもち神の死よりをみづくらせしところの耶穌よりてわれらをもさらんとする怒うをまぬかれあり

第二章 兄弟よわれらがあんぢらのうちよいりしその徒然あうざる我あんぢらみづうら知ニあんぢらもれるごとくわれらさきにふピリッピをて苦我うけまた辱我うをうり。されとも神よりてはばかる中

こゝろあくかみは福音をおほいなる紛擾をうちよせんちらふうたれり三これらのものゝめいわくをいづるよりいでゝ汚れをりいづるよあらばまた詐をもてせば四わがまた神はえらびたまへる人をゆるさゞらんをりくうつるふるまひ。こゝ人をよろこばんとするあらば我はこゝろを察しまた神をよろこばしむるあり五あんぢらあるがごとくわれらいつも諂言をもちひまた事よりてせば貪こゝろをせば神これがあかしをあり六われらキリストの使徒あひとゝ重ぜらるをえしといへども或いあんぢらのもあるひは他人のもひとゝ榮耀をもとめず七乳母その子どもを

やーるよごとくわれらんぢらのうちにありて柔和ふせり
八斯らんぢらを戀ひてたゞに神のふくいんをもつばかりの
ならず生命をもらんぢらにつたへんことをねがひたり
なんぢらはわが愛するものなればなり　九兄弟よ
らわれらの勞と苦とを記憶す。らんぢらのうち一人をも
ものせざるやうにひるわざをなしつゝ神のふくいんをも
らふ乃べつゝくり　十わらんぢら信ずるものにむかひて
ひていふをうり潔くー正くー缺ことなくーをおこなふ
なんぢらも神もあこーしるあり　十一なんぢらーる父がその子
をあつうよごとくーくーして我儕なんぢらにおのくをむかひそ

くそのさうえをまねきくるまで神よかるひとあるくことなく
勸勉まことふぐはをまことをしへくさり 十三 このゆゑよわれらかみよ向ふんぢらがまれらうを神乃ことは我きゝしりとをこれ我人のことをとせず神はことをとうてうくる我さえび感謝に。このおとばいまことよ神はことはうつてあんぢら信ぎるものくうちよはたらくまり 古兄弟らあんぢらユダヤのうちあるキリスト耶蘇よある神はくうくわいよあらへるをのとおれり。そへこれらユダヤ人よくるをあられしことくあんぢらもおのが國のひとくよくうをえられこれべあり 十五 ユダヤびとい主い近をとお乃が預言者こも我

ころしまつされわれらを逐せおひいだせり。かれらハ神のこころにかなふことを思ひず、すべての人にふさうらくなり 十六 まつされわれらが異邦人にをしへ救をえさせんことをかれらにつげざるやうにするを此のごとくかれらハつねよおのれの罪を充しめ神のきりめておひいたる怒かれらにふりくだれり○ 十七 きやうだいよわれら暫時あなたがたにはなれをる。これ面をみるより心にあらざりしねがひて急なんぢらのうへを見んとせり 十八 このゆゑにわれらなんぢらにいたらんとねがへり殊にわれパウロこれを願ひしこと一次ならずまたびたびサタンわれらを阻たげたり 十九 われらの望よろこびまた冠

社晃いざれぞや。われらは主い亞伯キリストのおさらんときそは前ふてゐんぢらもこのゐとあるふあるべや 三十夫えわをらは社さゝの えと喜へゐんぢらなり

第三章

あゝ我もてゐれ忍ことあるべゆゑよ獨アテンスよゆ降ること我意よさざるめ ニ キリスト社福音我つゝく神とゆもはさちくわれゝの兄弟テモテ我ゐんぢゝよつうそせーなりこゝもゐんぢらを固ーまさゐんぢゝの信仰のためよゐんぢゝをふぐさめ 三 一人もこのゐやみよ搖されざらーめんさゐなり。それ患難へわれらよさざまれることなる我ゐんぢらみづゝらられり 四 我僻ゐんぢらとゝもよひり

一時われらおやぶ遭んとまるごと抔預あんぢらまつげさり今をさしておのおくあれり。あんぢら知ところなごと
一五このゆゑよ我ものぶことたえかねば。あんぢらの信仰抔
ためらんさめよ人抔つうたせしあり誘試ものしあんぢら抔
こころみくわれらの勞なむなしくあらんことをおそれき
るあり六今テモテあんぢらよりわれらふきたりて爾儕抔
ためんくうと愛と乃嘉音抔おくらせまたあんぢらつねよわれ
ら抔ねんごろよ念われらよあふことを抔ぬがひ我儕があん
ぢらよあふこと抔ねごふがごとしと告たりセこのゆゑよ
兄弟をわれらさぬぐなわざはひと患難とのうちよあんぢ

らはんこうまて慰我えさまはそんあんぢらをこの
さく主よつてつたわれらこれよりて生命くれバあり九わ
れらあんぢらはことについてわれらの神社まへよ歡とこ
ろの大なるをろこびよりあんぢらのうめよりある感
謝我まて神ふむくいんや十晝夜をきりよねがふはあんぢ
らの面我みんてとをあんぢらの信仰社さらざるところ我
おぎをそんことあり土ねがそくハ神をみたちわれらは父
みばうらわれらは主い西をキリストとをもよわれら我導そ
あんぢらよりさらーめたるをんこと我土まさねがふ主あん
ぢらはあい我ま一耶そうーめあんぢらをしてたがひふら

心一衆人我あんぢることわれらがあんぢら我愛ひるごとくあらしめて主あんぢら我心我うくしてわれら我主い亞
そのまへての聖徒とゆるもふたたらんときあんぢら我
てわれら我神あるちゝのまへよたよくあて責爲きところ
あらしめんこと我

第四章

兄弟よわれらこうく神よねがへべ主い亞をよりて
亦あんぢらふめとめうろ勸あんぢらまでよわれらのをし
へ我受いうよおこあひて神我ろこびべき我あり汝
べきくこれる進べし　二そいわれら主い亞をふりて以て
ある誡我あんぢらふさづけしうる我あんぢらわれば　三

神をむねハんぢらきよくとゝまるため姦淫をせず四
おのれ〳〵おの〳〵器をえてこれを潔くまもるてふ
ことを五神をしらざるいきどほりごとく情慾にほし
まゝにせず六また此ことについて兄弟をあざむきこゝろ
害せざらんことをもとめまふ。もろ〳〵こゝろる惡ことをおこ
なふものゝ主むくいをなすにより。われらさきにもんぢらに
はなしこゝろ證せしごとし七それ神はわれらをまねきたる
へわれらの汚さることをおこなふをもとむるにあらずきよ
くこゝろんことをもとめたまふなり八この故にあるどるもの
へ人をすてるにあるにその聖靈をあんぢらにさづけ

かみ我慢あり○九きやうざい我愛ひることふつかてゐわれゐんぢらよりきおろるよおをげ。そへゐんぢら互よなはもることを我志すしく神をり我しを而られさをべあり十ゐんぢらマケドニヤの全地あるほべてのの兄弟よりくおこなふ兄弟をわれらもとむるへゐんぢらまたくうくのごとくおこなひ益つつ安靜ふらんことを我はくみ己のことを我おこなひ親手わざを我ふしさをよゐんぢらよわをらが命せしごとくせんことあり十二こへるんぢら外人よむうひてさぢしくおこなひまたみづうら乏ことあらんことをめあり○十三兄弟をゐんぢら社憂戚のぞみおきはうのひと社ごとくあら

ざらんこと我ねがふゝ故よわれらまでよ寝るものよつ
くへあんぢら我知ざる我こゝにまだ吉われらもゝ耶蘇
くよみがへりしこと我信ぎるあらべ耶蘇よをれるところ
の已よねふれるもの我神のれと空きお攫きさらんこと我
もちんぎべきあり主われら主のことをによりてあんぢら
よつぐん主れきさらんくきよいより活て我これるわれら
いもぐにねふれる都とりもさ我ぎゞド共それ吉も號令と
使長乃こゑと神はラッパ我もてみづうら天よりくだらん
それくききキリストよありて吉おゝーもの先よをみがへりま
後よゆきて我こる我儕これらとともよ雲よたぐさくられて

空中よおいて主よあうべし。かくてわれらいつまでも主と
ともをらん 六このゆゑよこれらの言にてなぐさひあ
ぐきむべし

第五章 きやうぐんを時と期よついてハ我あんぢらようき
おくるよおよびだにそハあれ日乃きたることを盜人のをるき
るがごとくあることにあんぢら詳よをれバあり 三ひと
びと平和無事ありといふときに亡滅たちまちよきたらん
姙婦よその劬勞をきたるごとくあるべし。ひとぐ絶てきく
ること能ハず四されど兄弟をあんぢら幽暗よをらざれバ
その日ぬすびとのきたるごとくあんぢらよおそるるこ

五 あんぢらこる光仕子ども晝の子どもあり。われら夜よつくるをもつくらねよ屬るものよあらばハされバわれら他人仕ねねみるがごとくねみることなせバ醒てつくしむ亜しゃねふるものハ夜ねみり酒よゑふものハよる酔るりハ晝よつくるわまらハ信と愛のむねあて伐着をくひ仕望伐うふをとしてつくしむべし九そハ神わわれら伐怒よおをせんときざめたるまあらバ。われら仕主いエをキリストよとりて救伐えせおめんときざ免さるひされだるり十彼われらのさめよ死さりぞれわれら伐しててき免さるも寝るをうれとやるもよ生しめんとくあり土このゆゑよあんぢら常よゐせるごとく

こゝひよおぐさめまこおのく社徳我あひさつ〔一〇十三〕きやうざゐをわれらあんちゝよ請あんぢらのうちよ勤労このつ主よありてあんぢら我治あんぢら我をしふるこの我顧十三うれらは工よりてたつくおも我愛をべし。あんぢらさづひよ親睦をべし〔一四〕兄弟をわれらあんぢらよはくむ妄行者我以まゝめ氣餒者我おぐさめ懦弱者我さゝけをぐくの人よむこうひてたゆがべし〔一五〕あんぢらつてゝおみく惡をもくおくよむくゆることおくつねよさづひよぜん我追まこをべての人おめ善我おらばはぐべし〔一六〕其常よろこぶべしをたえず祈禱べし〔一七〕凡もべてのことを感謝はぐべし。これ耶穌キリスト

よくりてゐんぢらをもちゐる神のむねあり元みづから
我熄ことおふくれ 二 預言我なみまることおふくれ 三 まづその
ことごとくをそれ善きものを三をろくのあーきことを
の類よとわざうるべー 三 ねづもくハ平康我 うもふ神ゐん
ぢら我まもりたくしたよくー。まことゐんぢら社全靈全性全身我
まもりてわれら社主い巫をキリスト社きたらんときふ咎
おうちーめうりんこと我 四 ゐんぢら我まぬくるものハ誠信
あるもれあり彼おのこと我成なまりん 五 兄弟をわれらの
ためよいのるべー 六 ゐんぢらきたき接吻なもてしたぐてれ
きやうざいの安我とめべー 七 われら主ふりてねがふ。ゐん

ぢらこの書状をぐての兄弟よよみきろせんこと祈六われらの主いゑすキリストの恩ぐみぢらとゆくもよあらんこと祈アーメン

新約聖書帖撒羅尼迦前書終

使徒パウロテサロニケ人へおくれる後書

第一章

パウロシルワノテモテわれらのちゝある神おゝよび主いえすキリストよりあるテサロニケびとの教會にふみ状おくる　二わゝれらはゝいわれらのちゝある神おゝよび主いえすキリストより爾儕めぐみと平康をうけよ　三きやうだいらわれらなんぢらふついて恒なかみよ感謝をそゝぐべきあり。これ理ふかあふことあり。そふあんぢらの信仰いやまし互あんぢらおのゝたゞひよ愛をるもと篤ありそれぞあり　四おのゆゑよ我儕あんぢらのたゝふ神のけうくわいの中にほこる。そふあんぢら窘迫と患難のあらゆるあつて忍耐とをん

うち我たもてゞあり 五 われ神のたゞきさとほきの表ありあんぢら我して神のくにはいるべきものとあらしめんためなり。あんぢらいまかみの國のこゝろあやみ我うくゝ六そいあんぢらに患難我らそふるものまゝあやみ我りて報七ふやみ我うくる爾濟まゝわれらとゝもに平安をうることを我もてむくゆるい神のたゞしきことあればなり。此のことい主い亟も火燄のうちふくその能力のつうひたもとゝもに天くりあらはるゝを八もゝはち神をしらざるもの及われらの主い亟もキリストの福音をもちゝごをざるものに報我あたふ 九うれら主社面とその吻きほひの榮光

よりはおもてこうぎりあくほろぶる爵をうけん　十そのときいまそはわち主のきたりてその聖徒よりて榮光を受をその信者よりて讃をえんその日あり。なんぢらもまたわらの証をなんぢるものあり　土これよついて我儕つねふなんぢらのためよいのるいこれらの神なんぢらをめして召をうくるにものとおしまず能力をもてなんぢらのまくての善願とをんくうの行をおやうとのせめことあり　土われわれらのかみと主いえすキリストのめぐみよをくわれらの主いえすの名なんぢらのうちにあがめられ亦なんぢら彼よりてあがめられんそめあり

第二章

兄弟よわれらの主いづきキリストのきたるおとおよびそれらが彼のもとにあつまることについてくいわれらねがふ ニあんぢらあるひい靈よりたるひい言によりあるひい我おくれるようにたる書よりて主の日いはもてよたとそることて心ばうぞうー且さわぐことあらんこと或三誰かあにの法ばをもてもるともあんぢらあざむうることなかれそいさぎよ道ばはあるまあとおくうの罪の人ぼろびの子あらはらしことなくべその日きさらド四うれもてて神と中なみるものまる人のをづむところのものよ敵ーあれらりぼぎてみづうらたふとくー神のみやよ坐

してみづから神なりといるよいまだ
よあるをときおのこと我かたりし我あんぢら記憶せざるや六彼我してそのときよいでてあらしめんためよ
いまうれ我抑るもの我あんぢらるをそれ不法のかくれ
てるものをそよはたらけを今ある我おさふるもの除るまでうごかれをり八そのときよいたりてふたふのものあらはるべし主い巡をその口のいきをもてうれ我ほろぼさん。
そのきたるときあらはをそころの榮光我もてうれ我廢せん九うれサタンのはたらきよりさづけてきまぐれ僞あるちからと徴とふしぎあるわざ十うつ不義のいざなひ

をしへをもてあらはれこののほろぶるものゝあるなり。
それゆゑわれら眞理我あいするの愛我うくべしてそ救我えざる
ものあればなり　十二このゆゑに神われらが誤りを信ぜ
んためよ迷惑をしてそれらのうちよりさらうしむ　十三されど
もてゝ眞理我をんぜず不義我よろこべるものはみなさばかれ
んためなり　○十三主よあのせらるゝ兄弟よあんぢらのために
よわれらつねよ神よ謝恩をべきなり。そは神をもとめよりあん
ぢら我えらびまことを我信ずるがゆゑ靈のきよめ我かうむ
ることによりて救をえせしめたまへばなり　十四神われらの
福音我もてあんぢら我主のさんえひにまねきたまへり。ゆ

んぢら我しておもはれらの主イエスキリストの榮光をえんためなり　十五　されば兄弟よ堅くたちてわれらの言あるひはわれらの書よりて教へられたる傳へをかたくまもるべし　十六　願はくはわれらの主イエスキリストおよびわれらのちゝの神われらを愛しわれら我あはれみによりて永慰と善きのぞみを我にあたへたまふ　十七　願はくはなんぢらの心をなぐさめ凡ての善行と善言とをなんぢらに堅かたくせんことを

第三章

一　終に我兄弟よなんぢらわれらのために祈禱をなせよ　願はくは主のことばの速ひろまりさかえ

ことあんぢらのうちのごとくあらしめ又われら我して邪なるあしきひとよりすくもること我えせしめ二そも人みなもんぎるものとりあふよあらざればなり三されど主は信實なるものなり彼あんぢら我かたくしまんぢら我護てこのあしきものよりすくひん四爾儕われらの命ずるおとく我以爲もてよおよぶ後まさまれ我おこなひまた我主よりてもんびるなり五ねがはくは主うみの愛とキリストの忍のびよあんぢらの心我みちびきたまもんこと我〇六兄弟よわれら主い迅をキリストの名よりてあんぢらよ命じ。それらよりうけたる傳にあたごはしてみづから行

をくてのきやうだいよ遠ざかるべしとわんぢらみづからのふしぎわれらよりのべき我をる夫われらわんぢらのうちよりて妄ある事なきさだまれる人のパン我價なしよ食ることをくたる人我わづらひせざらんためよ勞と苦我してよるひる工我なせよ九われわれら權威るきがゆゑよあらざるみづうら我模楷としわんぢら我してよ倣しめんためなり十我儕わんぢらのうちよありしとき人もしわざ我なさざる我よのまじべ食ることをうらざるとわんぢらよ命じたり十一それわんぢらのうちよ工我なさざるしてのみならず餘事我つとめみざるありと我おこなふものありとわれ

らきてう　土われらかくのごときりの上離よわざ故おしておのれのパン故食せんこと故われらの主いゑすキリストよりてめいじまた勸土きやうだんよ善故あまねひてうむことおかれ古もーおの書よりくるわれらの言よりたかはざるものあらべされ故はふかーめんそめよその人故ちるしてわひ交ことるうれ土されどうれ故敵とせびきやうだいのごとくされ故いきむ爲ー土願ハやはき故たまよ主つねよおごとよちらびあんぢらよ平康をたぬをんこと故ねがをくい主あんぢらとやもよにらんこと故土我パウロてづから筆故とりてやはき故問ぬみごとよされをまそちるしと

ひわくの書るふこのくのごとし　ねがわれらの主イエスキリストの恩（めぐみ）なんぢらとともにあらんことを　アーメン

新約聖書帖撒羅尼迦後書（てさろにかごしょ）終

使徒パウロテモテ ふ贈 まる前書

第一章

一 ㄎまもろの救主 ある神おまびㄎれろの望 ある耶蘇キリストの命 よおてがひて耶蘇キリストの使徒 となまるパウロ

二 ちんろうよりてㄎが眞子 あるテモテよふろうをおろる願いちくある神わよびㄎまろの主キリストい亜んろう恩寵

とあるまてこと平康をうけよ ○三 ㄎまマケドニヤよゆきしとき爾よるほエペッよとどまる人よ命じそのしこよ異教をつたふるこうとるく四 また信仰よある神の道をなそばしそ辨論を生ぶる奇談ときそまりるき系圖よこてろをよまることとるろうしめよとまるめたり今ものくのごとく行ちんお

とをねがふ　五　いまゝでの主意はあんまり。まるゝ潔こゝろとよき良心といふをまるき信仰よりいづ六ある人こゝをまもてこむるゝき論ようつまゝ七れきその教師となるんとして卻てそのうなるところその定論とところのことをみづからゝゝだ八夫まもろれきてい善ものまりと知なゞゝ理ゝ志なるひく律法をもちふべゝ九れきてい義人のためまうけなるまゝあらむ不法なるもの不服なるもの不敬なるもの罪惡なるもの不潔なるもの邪僻なるもの父をころせるもの母をころせるもの人をあろせるもの十奸淫をおこなふもの男色をこのむもの人をぬすむもの謊をいふもの

僞誓をのまさこのあり正理よりとることなからんがために設なり十一これをわれに託したまふさかえある神の榮のふくいんにあらずくろうり○十二われに能力をなしたまへるわれの主キリストいえすを謝す。そはわれを職に任じて忠信なるものとなしたまへばなり十三我むかしは謗讟たるをえ窘迫なるを加倍なるものなりしかれ信ぜざるときおろかにしてこれをなしたるゆゑにあはれみをうけたり十四わが主よりめぐみ及キリスト耶穌にあるそなへつとともろのことの信仰と愛ときたりて大にあふれり十五キリスト耶穌つみびとをすくはんために世にきたりたまふこと信ずべくまたうけ

ざるして納受きるるなり罪人のうちつれい首るり実然どもつらび矜恤をうけしハキリスト耶蘇いゆきよりてこ寛容をこころぐくあらせ後このをもんじて永生をうくるをのべつるを楷模とるなまくるなり十七ねがくハ萬世の王まるるち朽びみざる一の神よこのきりなく尊貴と榮光ならんことをアーメン〇十八子テモテよきよ爾をさせるところの預言よりてるんちよ命をこのよびんよりて信仰とよきてゆうしんをもて善戰をなべし十九ある人よき良心をもてまんこのうをうしなくりキうくのことき人おらち

ヒメナヨとアレキサンテルあり我うをもちをサタンよ

ゐるせなり。これをこのれをして誘讀をいをさらしめんためよ懲
るり

第二章

一　殊よきつむ萬人のためよねがひ祈禱ととめ感
謝せよ　二　王およびをべて權威をもちるものゝためよ別てこ
れをるをべしこれら敬處と端莊をもて靜よ中をらう
ふ日をおくらんためなるり　三　これ善美事なり。そはわれらの救
主なる神のみこゝろによることなり　四　をろくのひと救
をうけ眞理をさとるよいたらん神此のごみなをふとゝろ
なり　五　それ神はひとりなり。また神と人とのあひだよひ
とりい中保あり。まるそも人なるキリスト耶穌なり　六　この主を

ろくの人ゝこのより已をもそて贖となせり時いたらば證をべし七我ら主がために立らまそて宣傳るものとなり使徒となり。また信仰と眞理をいそうおんゝをしふる者となるまりそも主キリストゝありて眞をしひ謊をいそだハこのゆゑゝ我ねらふ人きよき手をなげそ怒るく疑なくいのりまた處ゝてもいのらんことを九またをんなゐいもぎをもり能てしみて宜ゝうるふころもまそみづうろぎり髮をあむてゝ金と眞珠となそひ貴ころものをもそ飾とせず十善行をもそこのぎりとせんことをねがふ神をうやまふ婦女いのくもべきことあり十一をんなハもべそれこと順てしづうゝ道

とまるべし　十一　その婦女もしかくをおとこたふべし　男のう
へ權をとることをゆるさず　をんなおだやかなる安靜にをるべし　十三
そはアダムの前につくられエバの後につくられたればなり
十四　アダムはまどはされざりしかど婦はまどはされて罪におち
いれり　十五　あるまどもかれら信仰と愛と潔と謹とをるなら
ば子をうむことによりて救をうべし

第三章　人もし監督のつとめの職をねがひもとむることを善務をねがふ
なりといふ話はまことなり　二　その監督たるものは責むべ
きところなく一婦のをつとなるべく謹愼みづから制おみ
ちなどにして旅客をねんごろにあしらひ教訓をなしうる

をなしまず人をうながして柔和まことなるべき財をむさぼらず 四自己のいへをよくをさめ端壮をそそのこどもをあながちむべきなり 五人もまた家ををさむることをしりてしづかにうやまひて神のけうくんをあづかることをえんや 六且なんぢなほ教へいましめをも監督とるべきらば。おそらくは驕敖てなんぢまことおもるべき罪をおもいたらん 七また このんでくに外よりなるものをも令聞あるべし。おそらくは詐諼と魔鬼のてるよおもいたらん 〇八執事なるものも亦うやくしくして両舌せず酒をなしまた利をむさぼるべからず 九志んりの奥義をきよき良心のうちにもつべし 十これを先

こゝろみて責べきところなくば執事のつとめに當べし
十一女もつじもまた端莊にして讒ことなく節制ありて
凡ての事に忠信なるべし　十二執事は一の妻のをんなれ夫
なるべし　兒女と己の家とをよく管理べし　十三善き
つとめをつとめる者は己のために善き位を得キリスト耶
蘇をまことの勇氣をもて信ずるにより○十四速に
ゆかんことを望されどもしおくるゝ　十五我もし
おそくゆくとき爾いかにして神の家にをるべきかを
爾にしらせんためなり。この家は活神の教會なり
眞理の柱と基なり。　十六敬虔の奧義は大なるかな

いさゝかうたがふところあらバ神にくちをとゞめてあらつま靈によりて義とせらるゝ天使よりも異邦人のあらのべつたへられ世の人よりもんぜらるゝ榮光のあらはれたまふなり

第四章

あらゆるきどくを靈あきらかに言のちよりいたらバ或人ハんらうの道よりさるものゝ人をまどはす靈と惡鬼のをしへた心をよせん二善をうりて謊をいひ良心をやきたる三娶ことを禁じ食をたつことを命ずるものさそいうるようにくをり食ハきるそも神こまをつくり信じて眞理をしれる人よこのんしやして受ものあり四そも神のつくりし

のいみを美なり。こんちやしてうくるときい乗べきをめる
し 五 そハ神のことばと祈禱よりてきよくるもべなり六
爾をしこれを兄弟たちをしふるときハキリスト耶蘇のよ
き役者ゝしてちんうけ道とるんぢがちうぐんしところ
の善教のことばをやしるつまなるをめるり 七 妄談と老婦
比あやしきちうをもて神をうやまふことをみづから修
行をべし 八 肉體のちゆきやうハ益まくなしだな神をうや
まふことハ凡事ゝえきなり今生および來生まのるやく
そくをうるあり 九 こと信ぶべくまたうけゞたしゝて納べ
きまるしあり 十 こもぐなめゝとまもろ勞苦まろ詬辱をうく

そんそれらいける神をのぞめべるう。うまこい萬人のまくひぬ〳〵殊よもんまるものゝ救主るう 十一るんぢこまろのことを命じまさをしふべ〳〵〇十二るんぢ年幼をもて人よろろんぜろるまるも言と行と愛と信と潔をそもんしやの模楷とるるべ〳〵十三るんぢ誦讀まゝむること教訓をつとめてそぐいてるを待十四よびんと長老會の按手禮とよりてるんぢこなまひしところの賜をゆるがせまることるろも十五心をこまよせて專こまをつとむべしそいるんぢの上達まべそのひとよあきらろるろんためるう十六爾おもをつゝしみ亦をしふることをつゝしむべし恒こまろのこ

とをつとめよ斯おこるゆゑきい己をきよくひまもるべんちよきくそのをきくつん

第五章 老人をせむることなかれ父のごとくこれを勧めよ幼者をきやうだいのごとくせよ二老婦をきよのごとくしこれをめまことをもつきをんなを姉妹のごとくしこれをきよ潔浮をつくをべし三寡婦あるまことの寡をうやまへ四然どもかれに子あるひは孫あらばこれらまづ先おのれのいへにいくよ孝をおこなひその親よんを報ることをまなぶべし。これを神のみこころにかなふことなり五眞の寡婦ありて獨をるものはなほ神よりたのみ晝夜ねがひと祈禱をつねよ

もろもろの六縦楽をあそびめいて生るといへども死るものの、七なんぢ此事をめいじこのまうをしりて責べきところろうしむべし八人そしねのまゝ屬するものをこのみだ殊まねのまゝ家族をうべうみぎるみぐんこうの道よそむき不信者よりもおとるものあり九寡婦をその籍よりにこととく六十歳より少こうるべこのらだ。そとより一夫のつまるのまゝそのまゝ十善行のきこえある者をしくハ子どをそだてしく者をしくく旅客をやどしたる者をしくく聖徒のあしをあらひたる者をしくく難人をたすけしその若くしてそろくの善事よりおこなひしそのうべし十一

ゐるときやもめいこひを斷べし　十二そのさだめキリストにそむきて心をみだすときは再嫁せんとをればなり　十三またそのさだめを約束をもちゐて罪をさづけらるべし　十四うまうまと懶惰よるひ人のいへをあそびめぐり唯ならんだるのみならず妄ひとれうきをいひ好てひとの事にこゝもり言べらざることをいふなり　十五これゆゑに我ねがふところき寡婦はよめいりをなし子どもをうみ家政をきめて敵にするものをまたこゝもそしるべき機をえせしめざらんことを　十六そいこのもろの中にそむく道をなせるサタンに從へるものあり　十六信ずるをとこ或いもんぜる女そ

のいつも若中ものあらんことを欲たまく〳〵教會をそづくりたべるべし。そんけうくをいをして眞のやをめをたをけたをめんなめるり 十七 善をきむる長老をそ倍してこゝろきと尊敬こととをつなへ教ををして勞をるものやうらうを殊さなふとむべし 十八 そい聖書さをるして穀物をこるた牛さくちごを縛このくべからず又はこゝろくものいその値をらくをきるりとのたまへるり 十九 長老をうらなふるものなるんさ二人三人のなるべびとるくべ納べきなり 二十 罪ををせるものい衆人のまへにそまをを警むべし。こゝを餘のひとをしておそれめんなめるり 二一 それ神とキリスト耶穌まこえるとをたる天

使のまへよそをんちよをともに預見のさだめをうることな
く少よそをのれまりてわそるふことるくしてこをそれこ
とをまもるべし 三 そるくしく人よ按手にるるをも人のつ
みよ干ことるるをみづから守てきよくにべし 三 そんぢ胃
のためにまびるんぢあぢくるびらふよまりてつねよ水
をのむことるるを少しく葡萄酒をもちゐべし 二四 あるひと
の罪ハなきらるよそその人よさきだちてさばきの場よゆ
き或人のつみハあとよおそぶ 二五 こうれごとく善行もな
きらるをを全然ざるもまた終よるくるることあくハび

第六章

わよそ軛のおそよあるをの屋いれのをの主をことぐ

一恭敬すべきものとするにあらず。こゝに神の名とをゝへをそゝらざらんなめり　二信者なる主をそむるものはその兄弟なるよりてこゝをこのろんぜざるべからず別てこゝに事あり。それ益をうくるその信者にそなひせざるものをばなり。なんぢこのことを教まさをそむべし　三をしことをゝふ教をつゝへそむるの主いぬにキリストのよきことぞと神をうやまふことをうるふ教をうけざるものはあらん　四この人みづからたゞしく無知にして議論と言辭のなやそひをこのむことをよりて娼嫉爭鬪毀謗妄疑　五まさ邪にして眞理をそむき神をうやまひて利をえんとおもふひとゝ爭論れ

ころなり。六 神をうやまひて足ることを知るは大なる利あり。七 それ我ら何をも世にもちきたらず、また何をも携へゆくことあたはざるは明かなり。八 ゆゑに衣食あらばこれをもて足とすべし。九 富んことを欲するものは患難と縛めと人を滅亡と沈淪とに陥るところの愚にして害ある慾に落ちいるなり。十 財を愛するは諸くの悪しきことの根なり。ある人この道を慕ひ迷ひて、もろもろの苦痛をもて己を刺し、十一 神のひとよ、これらを避けて義と敬虔と信仰と愛と堪忍と柔和

と欲ふべし 十二 なんぢの善戦をなせ こゝひ永生をとるべし。なんぢこゝをもて召をうけもりなる又おほくの人のまへにてよき證をなしたり 十三 われ萬物をしてせいをたもつ為る神およびポンテオ ピラトにむかひてよき證をなしたまへるキリスト耶蘇のまへにてなんぢに命ず 十四 爾その主い臣をキリストのあらはるゝときまで玷なく責べきところなくして誡をまもるべし 十五 神その定めたまへる期いたらばこの事をなしたまはん 神はまさるのち福なるところの獨一のけんるあるもの諸の王此王のおほくの主此主たるひとり 死ざるものの近づくことをえざる光にいまして人いまだ

だみ〳〵ことをおくまゝに見ことあたはざるものなり。ねがはくは尊貴とこのぎりなき權力このまゝとなをアーメン　○十七なんぢこれ世のとめるものに命ぜよ。たゞぶることをおくに定めきたこのうを恃ことをおくに唯ゝまことをたのしませんとて諸物をゆたかにたまふ神をたのみ尤まゝ善をれことをひ善事に富おしみをおくに施濟をなして人とゝのはしめ　十九このくて已のために善基をたくはへおくに未來のそなへをなすべし是まことの生をえんためなりと　二十テモテよなんぢ託せられしことを守みだりなる益なき談および智識といへりとなふる辨論をさくべし　二一ある人このいへりのちしきによりてひたぶるに信

仰をなやまもり。ねがはくハ恩寵(めぐみ)なんぢらヱなからんことを
アーメン

使徒パウロ テモテよ わく まる後書

第一章 神の旨よりてキリスト耶蘇にあるいのち此約束
をつかんためよ キリストい匹にの使徒とるまるパウロヨと
ゲ愛まる子テモテよ書をわくるねがそくハ爾ちくみる神
わよびまるまるの主キリストい匹により恩寵と矜恤と平康をう
けよ 三我よるひる祈よなえびるんぢを懐よりてうゲ先祖よふ
らひきよ紅良心をそなつのみる神よあやを四我るんぢの涕をお
のひそるんぢを見んことをねがふ。こを歡喜をうれよみくしめん
ためより 五こを爾のいつまりるき信仰をおりよ斯のごと
きちんうう前よるんぢの祖母ロイスまたるんぢの母ユニケ

よあり今るんぢこのことを信ぜるなり六これゆゑよ
てもまた爾をしてつゞ按手によりてるんぢがうけし神のたま
ものをふたゝび熾よせんことを欲わものをしむ七そは神のた
まへるよなまくる靈はおくびまる靈よあらずちからと愛と謹
のきいるれバなり八この故よるんぢてもまらの主よ證をな
すことをそのの囚人なるてもを恥となすべからず神のちか
らよ応ひて福音のためよてもと共よ苦をおのぶべ
し九彼てもまらをまもり聖召をもてめしたまへり是てもまら
の行よるによあらずして神おのがむねと世のはじまり
さきよりキリスト耶蘇のうちよてもまらよたまひし恩恵よ

よるなり十此めぐみいまやわれらの救主イエスキリストの顯たまひしによりてなるなりキリスト死をほろぼし福音をもて生命とくちぎることをあきらかにせり十一我このふくいんのために立られてのべつたふる者となり使徒となり異邦人の師となるなり十二この故にわれこれらの苦をあぢはひたり。されどこれをも恥とせず、そはわれ信ずるものをしり且わがあづけまつりたるものを彼その日にいたるまで守ることをかつうるを信ずればなり十三なんぢキリスト耶蘇にある信と愛とをもてわれにきけるところの眞のことばを模楷としてこれをたもつべし十四なんぢに託したるよきものを

我儕のうちよりをる聖靈をそそまもるべし十五アジアよりをるものをみなそこをもて背くことをるんぢがしるところのりフゲロとヘルモゲネをその中よりなり十六ねがはくは主あはれみをオネシポロの家よなまへ。そは彼ばしばくこころをやすめ且つ我が鏈をはぢとせず十七そのロマよりありしときいそぎたづねて我よりなひたり十八ねがはくは主かのひとをしてその日よりて主のあはれみをえせしめよ彼エペソよりてよくつかへしことは爾のよくしるところなり

第二章

ここゞ子よるんぢキリスト耶穌よりあるめぐみよ堅固るべし二またるんぢおほくの證人のまへよりて我よりきゝ

しところのことを忠信にして能ひと教をしうるに足る人
よたくさべし三なんぢキリスト耶蘇のよき兵卒ごとくに
まとまりて苦をともにのぶべし四兵卒をつとめるものハ世事
をのぞみづからをまぎらさざれ。こゝを募るものこゝろを悦
せんとまもるべし五又力をきそふものの法にあらざればひと
きそはざれ晃をえんだ六はたらきとる百性まづ實をうべき
ものなりしかんぢまたいひしところを思べし主なんぢに萬事
をさとらしめんハダビデのまゝよりいでたる耶蘇キリストを
かつなみするところの福音ごとく死よりよみがへりたるを
爾こゝろに記べし九これふくいんのために我くるしみ被

うけて罪人のごとく繋るゝといふまり。さまざま神のことをいつなが讃へ十こゝのゆゑよりれえらぎるものゝなめるさるべそのことを忍こゝにのれらもキリスト耶蘇よりある救れよびこのぎりうきき榮汉えせゝめんなめるり主こゝよ信ぎべきるゝなり我濟をゝうまとまりよ苦をうけべこのまこせもり生べゝ主こうまうをゝちのべ彼とまりよ王とるるべし。これら若うまをちうべといそゝ彼もこれら彼ちうべといそん主こうまう信ぜぎといへどもこのまゝ信るり。これハ已よなぐふことあらいざるりと〇主爾このまうをしそ此事をれめそちめうう主のまへまそこのまう汉いまゝめ言よ

まてあらそふことなかるへし（むへし）　ことに益なきところの聽者をしてほろひにいたらしむる主のしもべ神よろこひ
そのとるにたることを務（つとめ）また忍ひ　ところの工人となりて眞道をたゞしくとるものをしへんことを務（つとめ）
よ（むへし）　妄なる益なきそらごとをさくべし。それこれをおこなふものはますます不信にまさりめぐりきこのものどもの
ことばは脱疽のごとくに腐ひろがるべし（ヒメナヨとピレトはこのくさればなりと言ひ）　かくのごとき者ども中よりて
眞理にあやまりて難にまぎれたりと言ひくて數人のしんこうを根ほりはほりをるなり　十九　あらゆるまことの神のもと
なほしかし堅基なそなり。そのうへに印あり。あるものていふ主

わのまこと屬ものをあるとき。まこと云まべくて主の名ばかりぞの
ハ不義ばかりあるべくと云大なる家のうちまに金と銀の器
ばかりのみありて木と土の器もあり。このまに貴きものもあこれ
ハ賤きものもあるなり二人のこどもをそだてられて己をきよ
くせば貴きをもあるうちもとより潔くして上の用にたつるひ
まべくれ善事をなすことを得なり三ねんぢ幼少ときの慾
をきりて義と信と愛ばかりをつとめ又きよきこころざしを
ばよぶものとやうくことを追求べし三愚なると無學な
る辯論をさくべし。そこにこれより爭競のおこるをあまべる
なり三主のあるべくばかりそふあるときハ和平にまべくその人を

あしらひ教をよくしのび忍こゝろをもつて
和をそこいましむべし神あるひは
心改たまひてこゝまで眞理をさとしめたまふ
その酔さめてあくまの罠をのがれいでん。
をしてわれの意ゞ旨をおこなふにちめんたるまで
きたるべし

第三章

末世にくるやみの日きたらん。なんぢこのおそれ
二その日いたらざる人なきわれの言をたのしみ貪婪をこのみ驕傲
のこゝろ不孝恩をしらず不潔三不情怨をそこなひ誘讒慾を
ほしいまゝにし殘刻善をこのまず四友を賣ものまた自負

神よりも樂坂なのまることをせん五このまちハ信心の貌あまど實ハおろかしんの德をまち。るんちこのくのごとき者ばさくあり六人のいへるハまことに愚女をとりこまるハこのくれごとくきものなり。この女ハつみをうきねさまざまの慾ニさそわれ常ニまるべども眞理をあることハしらざるゆえなり八この人ハヤニネとヤンブレがモーセニさからひしごとく亦まことにさからふなり。このまち心のくもれたるもの信仰ふかきことあたハざるなり九さまと猶これうへニ進こと有ことをこのこの二人ハごとくこれらの愚なるこことをまぬかれ人ニなることをえべきなり十るんちハ

ゟゞ教誨おこるひ志意ちんくう寛容愛忍耐土おようひゟゟ
アンテオケーコニヨンルステラ二そてあひ〳〵せめと困苦まゝるとゞ
うけ〳〵窘迫のいるゝるゟを志る主こゝとゞくそのうちゟより
我をまもくひたまへり主まことゝそキリスト耶蘇よりて神をう
やまひて世にそうんとこゝろざすものハせめをうく
べし主あ〳〵きひとゝ人をあざむくひとハまゝく悪ゝまゝ
み人をまどはし亦ひとゝまどハさる志るんぢまなびて信
ぜるところ此こと彼まなびるゞそハるんぢ誰よりてこ
まをまなびし且いとけなきときより聖書を志ること彼志
れゞるり聖書いるんぢをしてキリスト耶蘇を志んにるり

ようて救をえせしめんなめに智慧をなたふるそのゆえ十六
聖書はみな神の黙示ようそをしへといましめまさに人を
てみちに歸せしめまさ義をせるそしむるに益なり十七こと
神のひとは全くそなえてよろづの善事をおこなふに缺るところ
んなめるゆえ

第四章

ここと神のまへ及あらはるゝときその國とおもてい
けるその死者をさばき紀まるキリスト耶蘇のまへにちかひ
に求ふるんぢ道を宣つたへよ時をうるもうるさきを得ざ
るもそばみてこゝろを務きまぐの忍とをしへをそえ人を
ぐ〳〵懲戒まふむべし三そは人まことのをしへを忍耳

をよろこぶ〳〵むることなく純好その私慾よりおこりてわれのた
めに師をまう〳〵そうるときはきなるべんこのまうみ〳〵を眞
理よりそむけ奇談にむかふべし 五 さきだ爾もべてのことを
よつて〳〵み苦難をおのびて傳道者はそのつとめをなし〳〵んぢは
職をつくせ六 そは今そのゝものとなるべんとはそのとき世をさ
るときもろづけ至七 そはまさでよ善戰なるこのび已にをへるべ
き程をつゝ〳〵已にちんこう此道をまもりまもり八 いまようのの
ち義の冕そのためにそのゝあり主はそのかなぐしき審判
をこのたびのそれ日にいたりてこれをわれに與へたまふ獨にわれ
になるのみならずすべてこのまの顯著をおもふものにも

なんぢつとめてきみやうに我にきたれ十
デマスこの世をあいしてこれ我をすて テサロニケにゆけり クレスケ
ガラテヤに テトス ダルマテヤにゆけり。たゞルカのみ我とともに
あり十一なんぢマコをつれてともにきたれ。そはこのきたれ職に
きよきなればなり 十二我テキコをエペソにつかはせり 十三爾
きたるとき所にてカルポのもとにのこしおく外衣
をたづさへきたれまた書籍殊にたづさへきたれ皮なる
ものもつとも肝要なり 十四銅匠なるアレキサンデルわれにあく
をなせり主このむくいをかれにほどこしたまはん 十五なんぢもまた彼を

らの言よさくらひなり 六 ゆゑにしめて審官よ事由をのべ
しらき誰もつまとせりよせだ皆そまをはるまたり願ハこの
まろよ罪のきよせざらん こころを十七 さまざま上それとまりよあ
りて我よちろろ祝あろへなまへり是そまよりて道こと
ぐくつろり異邦人をしそみるこころ紙きろしめんためる
り我まくそまて獅子の口よりいでたり 六 主またそれをを
くひてのろくの惡事よりそるれしめ且そまをまくひてそ
の天の國よいでまん。ねがらくハ榮よ、このきそるろくのれよ歸
せんこころをアーメン 九 請ふんぢプリスカとアクラとヲネシポロのいへ
よ安をとへ 十 エラストコリントよとどまれり トロピモ病あまび

使徒パウロテトスよわくまる書

第一章

神のちゐゝ並い匹にキリストの使徒パウロわるゞ信仰よりてこゝ眞子ゐるテトスよ書をわくる。こゝ神のえらびたまくる人をして信仰をわもきしめこの神をうやまふ眞道をもろしめんなめよ使徒のつとめをるし二 誤るきこのみの創世のまへよ約束たまひし永生をのぞめ三 神たのまれさだめたまくる期よわよびて宣教よりてこれらぎりるきいのちの道をなうせり宣教へまるそもこゝの救主ゐる神そ命をそ我よゆだねうまくるところれものより四 願へるんぢテトスちくゐる神わよびこゝ

らの救主キリストい必たより恩寵と平康をうけよ〇五我るんぢをクレテよとゞめたるゆゑんハ爾をして缺たるところ改たゞしくし且てゞるんぢよ命ぜしごとく各邑よちやうらうをたてしめんとてなり六人をしてとのむべきところなく一婦のをつとよしてその子女もはうなうをそうたくらるゝことなく服ハざることなき信者なるべし長老よならべきものなり七そもそも監督ハこのみの家宰なるべきゆゑなれとところなく已ゞまゝをなさゞる軽しくいからず酒をたしまず人をうなを利欲むさぼらず八遠人をねんごろよあいらひ善をこのみ謹守なるしく聖潔みづから制しル者なるべし

ころの眞道をまもるべし。古き正教をもて人をきよめこのち
辨駁するの狀くさぐさなめるり十そん服をしてむるし
き論說いふものまた欺騙をなすものれるくして割禮こそ
くさるものうちまん殊にこのごときものなをぶるり
士うきろ汚利をえんなめにをしふべろうざることばをし
つて全家のおんろうをほろぼたがゆゑにこのるろべこのきろ
の口をしてふさぐべきむべし士クレテ人よりもろるる預
言者いひけるクレテびとハ恆にいつもり狡いの者なしきけ
ものまた懶惰にして食をむさぼるとよりと十三この證
はまことるり。このゆゑに爾きびしくこのきろ誡れろをも

て信仰をこのむらう〳〵ユダヤ人のなやしきはる〳〵と眞理を
もつる人のたゝ〳〵おきてゝこゝろをよろこぶことをのみこゝろ
ひとまをまもりてそれ物きよく〳〵汚なるひと〳〵不信者もん一と
しるきよれそのる〳〵已よりもまさるのこゝろと良心をのみけ
この色分全ゝこのれらみづからう神をおろそかにするとこのたをどもも其おこ
るひいこゝまよ逆このまろんにくむ屋きそのまり。おろそがをざ
るものまり。まぐその善事よとりてもまもつべきものまり

第二章 さまざま爾いたる〳〵きをしへてこのまゝこゝをこのたる
べし 老人もいつゝしみと端莊とみづからう制まるこゝと
を勸このろもんろうと愛と忍耐とるこのたろまろんこゝをを

むべし 三 老婦もまた よく 行ひ 慎み 子供 愛し
その 酒に 耽らず 善き 事を 教ふる 者と
なり 四 また 彼儕を して 己が 夫を 愛し
子を 愛し 五 身 慎み 貞潔 にして 家務を 治め
慈悲 あり その 夫に 従ふ 事を 善く 為むべし。
これ 神の 道を 毀けがさざらん ためなり 六 なんぢ
また 幼男に 身 慎むべき 事を 勧めよ 七 爾の
なす ごとを 凡て 善き 模範と なれ 己が
教に 潔白 と 厳粛 と を 示し 八 責むべき ところ なき 正言を
用ひよ。 これ 敵する 者を して 我らの 悪を いふ 縁

るくみづくゝ愧こゝをゆきゝめんなめなり九僕よ
わのまた主人よあさごひるよごとをなたまもこまた弥よろ
こびせんことを務こまるいひきゝそだ十物をぬまみと
らだこまた忠信をつゝくたできこと弥まむ屋。こゝ何事
をるまゝをまきゝの救主る神のをゝへをうぎることゝを
せんなめるり十夫まべてのひとる救をたまふ神のめぐみ
あゝまま十三まきゝを誠こまきゝをゝして神をうやまへぎるこ
と世のるの此慾をまて みづゝ制ゝなだゝゝく且つ
ゝみて今世よまだゝへ十三望ところの福とおるいる神を
なゝ生ゝまきゝの救主い屋 キリストの榮光なゝまんこと

をのぞみまつる十四キリスト我儕のために己の身を
まてたまへり。これ己ところ奴まづて此罪より
われらをひいだし且己のまた為に一民をきよめ
己ところ奴して熱心に善きわざをおこなふしもめんために
なり十五爾これらのことをおしへ
このごとくまた勸めんぢのまへての權威をもていましめ
ることをまぬかれしめよ。

第三章

一なんぢこのまことをしめして執政と權ある者に服し
うつあたらひ凡のよきわざをおこなふ備をなし二人をそ
しらずあらそはず和平にしまへての人をおしへ柔和
をもてせんことをおこたらひいだきおもむべし三それ
も前に

へおろかなる者ども ごとざるもの迷るさまざまの慾と
なめしみ此奴隷となるまるその恨れなみて日をわくらしそう
惡びきそのまゝなげひよにくみあくる者ろうしろう 然どもまろ
此まろひぬしなる神のまきけと人をあいしなまふ愛のな
らもまろしときエこの身我儕がなろるひしところのなぐしき
行ようろに唯それあもれみよまろぐひ重生のなろひし聖
靈によりてなろなよまるこゝろをもてろまろをまくへろ
六聖靈はまるそも神ろまろをしそそのめくみより義と
せろる嗣子なろるをえそこのぎりあき生命をのぞみまたしめ
んためよとろまろの救主いエスキリストによりて豊よれ

うけうることをぎなまくるところのものなり、この信をべきことをふかくわれ我なんぢがこれらのことを切にのぞみ神をおんぢるものをしてつとめてみて善功をつとめることに欲をこれらのことは美また人にえきなり九なんぢおろうるる辨論と系圖と爭鬪と律法のなろそひをさけよ。これらは益なくまたむなるものなれば十異端をとる人を分てのち人はなんぢにことをひとなびふたびいめて後とをぎくべし十一そのごとき人はよこしまにしてみづから罪をおりてるをことを犯ことをなんぢをきびしり○十二アルテマスあるひはテキコを我なんぢにつろ

ゑくさんとき爾いそぎて尼哥波利斯に來たりたまへ
つくべし。
ことをこのごとくして冬をおごさんとさだめたり十三法律家ある
ゼナスおよびアポロを懇ろおくり。このまうをしてえ
らしめよ十四又われらもまうつけるものをしてよき功をつとめ人
ののぞくてゐらぬものをたすけんことをまなびて果をむ
ざることなからしめよ十五我とともにあるもの皆なんぢ
に安をとふ。なんぢ我を請ゑんうえになりて我をあいするを
もの〳〵安をとへ。ねがくは恩寵なんぢらまべてのものとあら
んことをアーメン

新約聖書提多書　終

使徒パウロ ピレモンヨ おくまる書

耶蘇キリストのために ゑーうどて まるパウロ および兄弟テモテ ピレモンニ および われらが姉妹アピア ならびに われらと ともに戰爭をなせる アルキポ ならびに 爾の いへにある うちの教會に ふみを おくる 三 われら なんぢら 我儕の ちゝなる神および主い エスキリストより 恩寵と平康を うけよ 四 我いのるとき 常に なんぢの ことを のべて わが神に謝し 五 そは なんぢが 愛と なんぢが すべて 主い エスに向ひ また すべての聖徒に もつ ところの 信とを きけばなり 六 わが祈ところは 爾と ともに

よ信仰をたてそる人なんぢられうちるるまでそれ善
事をおるるより其なんぢらはてるきをるべし キリストの榮
光をあらはさいたらんことをおり 七 兄弟よそむきるんぢ
の愛よりてねぎいるるよろこびと安慰をえたり。そんせ
いとたちの心なんぢよりて安ぜらをたればるり八 てまるよ
りそ我キリストよありてをぢこのるところるくなんぢよそのの
るにをきことを命ずることをうるとも人ども 九 愛のゆゑ
ようりて寧なんぢよそむてまそぢとして老いまキリスト
耶穌のためよめしうとしておまるパウロこのくれごときまるよ
て十 てぢ縲紲のうちにそうみし子るオネシモのことを

るんぢよそこゝむ二この者ざきまんるんぢよ益るきそのるりしら
今へるんぢまも我まそえきあるそのとるまう。こゝ彼をな
んぢのそとく、この者ん十二爾こゝまを納よ、このまんそぐ心るり十三
こゝまこれをしてそぐことよさぐめ我るくいんのためようけなるるそめのうちよ爾よこのそりてこゝまよつくしめんと
おもへり十四然どもこゝまるんぢの肯ざることいるよをもお
ほをこのまず。こゝまるんぢ少供給やむをえざるよりぐんそ
心よりいでんことをのぞめべるり十五彼ぐ志ぞらくるんぢ
をはなれしハ爾をしてこのぎりなくうま我とめむき十六これ
のち彼をものべよりごとくせず僕よまきるそのなんまる兄

弟とゐきたりむるなめよあらざりしをおもふんや我このき紙こと
とよりつんだん況やるんぢ肉よりても主よりてもこゝきをあい
せざるべけんや十七爾もゝれを侶とゐさび請ゝきをいるゝ、ことく
このきゝを納よ十八このきゝゝるんぢよ不義をゐしまゝるんぢよ負債あ
らゝゝるんぢこれをゝきゝよ歸せよ十九ゝきパウロ親手これをかけりゝ
きこのるゝんだつくのゝんゐんぢい身をもそ償べきふきさいゝきゝよあ
りさゝきど我こゝきをいゝんだ二十兄弟よゝきゝるんぢよりえきを
主よりてえんこゝをを望るんぢゝゐが心をキリストよりて
やすめよ二十一我るんぢがあなどりこゝをふゝく信じてこゝを
を爾はこのきむくる。るんぢの行ところいこのるゝんだゝゐが言と

こゝろよりゆまきうんこゝをしまう三　またゐんぢらがゐめ
よ寓所をそなへよ。そいてまたゐんぢらのいのりようひ
にてゞ身はゐんぢらとなかへらまんとおもへ　をゐう三耶
蘇キリストよりてこゝとをものに囚とゐまる　エパフラスゐん
ぢの安をとふ　三　てゞをてゝきのとゐもゐるマコアリスタルコ　デマス
ルカもおなじく安をゐんぢよ　問二五　わがそくはてゞ主いえ
スキリストの恩惠つねよゐんぢらの靈とまてゝとなうんことを
をアーメン

使徒小ヨハネ人に告げる書

第一章 神むかしいにしえの區別をなし。あまたの方を
もて預言者により列祖よりつげたまひしが 二 この末の日に
いたりてわれらにつげたまえり。神はまたこれをもて
萬物の嗣となし。またこれをもて世界をつくり
給えり 三 この子は神のさかえの光輝。その質の眞像にして
權能のことばをもてすべてのものを扶持。またもろもろの罪のきよめをなしてたかきところにいますところの權威の右にさしぬき
給えり 四 かくて御名の天のつかえ奉る名よりもまされるごとく
かれらよりいまさるまでになり 五 それ天使たちのうちたれに曾て

くしいくるや。なんぢいさご子ふり。これ今日なんぢを生うと。まこ我このものなめよ父とるらんうまこさご子なめにまとるのべしと。まこ家子を世よいくらしむるときよいひさまんるい。神のまへそのの使者いみるこまたひざまづくべしまこ天使さもよつのそら。のまこその使者こちを風とるしそのつるそるこものを火焔とるまこしんくりハその子よしんくるい。神よるんちもの位ハ世々いあよびるんちもの國の杖ハなしきつ名なりルるんち義を愛し惡をまくむこのゆゑよ神まるのもるんちの神ハよろこひの膏をもてるんちもの伴よりおまさらそるんちにそいひまた

いそく主よるんぢ元始より地のもとゐを
かためのべたまへり　こもてらいまぐそ
よ育ん。こもてらいまぐそ衣のごとくふるびん。るんぢこれ
らを袖のごとくたゝむ。まこのまてらい變らん。さまでどるの
んぢらいるこてるし。るんぢの壽いきえてざるるの十三
天使そちのうちる誰よ。るんぢ汝敵をるんぢの足臺
とせんときまでそつが右よさもと曾ていひたまへることあり
しや十四まぐそ天のつかひ救をつぐんとまるものよ
つくんあつそそて靈よあらぐや

第二章

この故よてまてらきてしこころを添過ることる

ろらんたあるよいまく篤くあむべし二そのとき天使こちに
よりそつげたまひしことを。堅立してまへくの違逆と
あつぶそざることみる公正むくんをうけたらんまん三のく
のごとき大なる救をうるはざりにしていそのぶ
ることをえんや。斯いもでめ主よりてあめきれる
をきゝしりのともこれらに言證ふり神もまたそのの
聖旨にあづかりて休徴と奇跡ならびさまくの異能とて
うちあくることろの聖靈とりて、のまらしてのる
證せりき。それ神はそれらぶいふところのさそろんとする
旧と天のつらびたもろもろ服ひふうきあら篇よ。人あら

おそひ人を訪ふ人の子をなにごとぞ汝これを心にとめ
人の子をなにごとぞ汝これを眷顧るや七なんぢ
これを天のつかひよりすこしく劣らしむ。うまに榮と
尊をこうむらせ。まなんぢの手のわざその足下に服さ
よこれを立さりしなんぢまだそのものを服さ
しむ。まだ萬物をこれに服さしむるにおよばざるを
さをしそのこるものなし。されど今にいたるまでこれ
らまだそのものの服せしをみず九なだ
まだ天のつかひたちよりますこしく微小されしものを
みそち死のくるしみをうけしによりて榮と尊をこうむ

らさるゝなり耶蘇をみよ。その志ある神の恩よりて
まぬくその人よりそり死を嘗へんがためなり十これあほくの
子を榮よみちびんとそそれをまもる君をしりて苦難を
ものて成全しむるなり。まぬくそのものゝ歸まるところ萬物を
つくれるものなるがゆえなり十一それきよむるものときよめらるゝ
ものとまぬくて一まりいづ。このゆえにかれらを
兄弟とするを恥ずしてなおをしへて十二いへらく。われ
なんぢの名をそゝぶ兄弟よ志めきん。なんぢを教會のうち
に讃ん十三またいへらく。ゝゝにわれと依頼んまたいへらく。
われと神のゝゝにあるゝ子をみよ十四そゝにこどもいと

に肉と血とをそなへ給ふ事も有るしくこれと其一
られ死をうけて死の權威をもつものを即ち惡魔を滅
ろぼし十五うつ死をおそれて生涯つながるるものをそ
んためなり十六實に天のつうひたちをたすけ
子孫をたすけ十七このゆゑに神よ屬ることにつきて矜恤
と忠義ある祭司のをさとなりて民のつみをあがなはん
める諸事よりおのれ兄弟のごとくなる宜なり十八そは自
みづからいざなはれて艱難をうけしかれどいざなはるる
ものを救助うるなり

第三章

一このゆゑによろづく天の召をうけしきよき

兄弟よ二モーセが神の全家よりもうぎをせしごとく。あのれ
をうそしものよ忠義なるごとくうぐ信ずるところの使
者なる祭司長なる耶蘇をふくありかべし三そを家をつ
くりしものく家よりまさりて榮あるごとく。このまも
モーセよりもまさりてはまもをうくべきものとせられ
たり四あるよき家はこれをつくれるものあり萬物をつ
くれるものは神なり五それモーセは将来よりひつくへられ
んとまるところの證をせんがためよ僕人のごとく神のぜん
うをおのそ忠義をるし六キリストは子なるものごとく
神かのへをつろきどれりごとれらもし信仰と望のよろこ

びとら我とともにまで、このごとくたのしくその家をり
七こゝに聖靈のいふごとく、今日
もしなんぢらその聲をきゝて、野にありて主をこゝろみし日その怒
をひきしときのごとく、八なんぢらこゝろを剛愎にするなかれ、
その時こゝろよりあひてゐたる列祖のごとくせよ。
九かれらはわれをこゝろみ、なほ四十年のあひだわがなせる所行をみ
たり。十ゆゑにわれその代の人をいかりていへらく、かれらはつね
に心まどへりといへり。されどかれらわが道をしらざりき。十一ゆゑ
にわれいきどほりて、かれらがわが安息にいるべからざるとちかひ
たり。十二兄弟よ、なんぢらみづからもつて、不信仰なる惡しき

心をいごきて活神のまへよりそるをまぬるごとるるらん
やう謹愼べし〳〵十三 なんぢらのうち誰ひとり罪のあぎむき
よりて剛愎よるるぞるゆう今日とするるるらちる日
々なぐひよあひ勸勉よ十四 そいてれらもう〳〵まぢめの信仰
祇をそうまぞこのごくなのごぞキリストよ與ものとるるらん
玉それ云ことあう。もう〳〵今日そのこゑをきろぞ激怒を
ひきこしときのごとく。なんぢらの心をごくるたまる
みうを十五 聞てるほいろうをひきこしものいなまぞや。モーセ
よあるぐひて エジプトよりいぞてるまぞそのものよあら
ぢや十七 申八四十年のあひだ誰よむひそいろうしや。罪

かをろくしてその厝を聖よたるものともなしたれ
るごとや十八またその安息よいるべからざると誰よむろひ
てちうじしや。信仰せざりしものどもに指ろるごとや
十九こゝをもてよりてみるに。これらが入こと能えざりしこと
信よりてあり
第四章　このゆゑにもしまだ畏懼べし。そのやをみよいるやく
そくに今もるのこるものどもあそらくはまるるんぢらの
うちにこゝに及ざるものあらん二そのこゝをもてくもれらがご
とく福音をのべつたへられしこと。たゞうまちうきゝしと
ころの言そその信仰まじらざりしゆゑに聞者に益

るうらうき信ずることろのこれらハ安息よいることをうる
なり。またみたも言たまひしごとく「こと怒るときも
うひてこのまことごやすみよいるべうらばといへり。よの全
よこの地基をあきー。ときよりそのエハみるなきより四そん
あの篇よ七日よつのそ左のごとくいへり。神ハ第七日よ
まへてそのエをやをめりと五まことの篇よ。うまうふことご
安息よいるべうらばといへり六さまだこまたいるべきもの
あり。さきよ福音をつてへられしうものハ信ぜざるよより
ていらざりしるりとこのゆゑよひとしきを經てのちまた
ダビデの書よありて日をさだめて。今日といへり。前よいひ

なにするなかれ 八 もしヨシュアかれらをやすませなばそのゝ
ち神はほかの日をいはざるべし 九 さればやすみは神の民に
のこれり 十 すでに安息にいりしものは神がおのがつとめ
をやすめしごとくこのものもその工をやすめり 十一 このゆゑに
かれらのごとき不信仰にならひて陥ざるやうわれらこ
のやすみにいらんことをはげむべし 十二 それ神のことばは
活てかつ能あり。もろはの劍よりもとく生氣と靈魂ま
たふし〴〵骨髓までとほしつらぬき心のおもひとこゝろざ
しを鑑察るものなり 十三 また物として神のまへにあらは

れごとくなるべし。さてまたらが一のこそまたるものゝ眼のまへにまぢかくなりつべし。十五そのときかれらが荏弱をあはれみ、ゆるすことあらざる祭司のをきてにあらざるうまひまぢかのことをなすまでのことくひざまづきて罪放をうけ機よくあふたなをけとるべし。

十四さてまたかれらに雲霄をとほりてのぼりゆくあはいみる祭司の長なるそも神の子耶蘇ありゆゑまたら信ずるところのをしへをうしなはざるべし。十五そのときかれらが荏弱をあはれみ、ゆるすことあらざる祭司のをきてにあらざるうまひまぢかのことをなすまでのことくひざまづきて罪放をうけ機よくあふたなをけとるべし。

恩恵をうけんことを。殺然しかしてめぐみの座よきたるべし。

ひとのために神に屬ることを任ぜられてつとめるものである
と犧牲をささぐることをするものである　二あの身みづから
弱きによりてまた民のためにあやまちあるものをあはれ
むことを得る　三これによりて民のためにするごとく
おのがためにも罪のさまげものをささげざるをえぬ　この
尊きアーロンのごとく神の召をうけるものはあらざれば
みづからたふとくなれるものである　五このごとくキリストもみ
づから祭司の長といふ榮譽をとりきたりたまはず
ただこれに言ひたまひしものの
これの子なり　今日われなんぢを生めりと

みとるみてあるのせうの篇よ。ゑんぢやのきうゑ
くメルキセデクのくらゐのごとき祭司こうしひこまへる
がごとく七うま肉體よあうくとき哀哭ゑのうごをゑ
しそ死よりおのまをまもくひうるかのよいのう。まこ懇求
をゑゐしその敬畏よりてきうることをえそうへられ子
なまことも受うることろのくうしみよりそ順服こうをゑ
らひかまそでよ完全けまびまべそうまに有うごふのう
永救のかとうゑまうて十のまいメルキセデクのくらゐのごと
き祭司のをきうまうと神よとうのへられき土これまつきそ
ひまこう有ふくのくうべきこと有まで。ゑんぢうごが耳

ふるなり　然れど人の師とるべきものなるに今まさ
に神のあめ〳〵なまへる教の端緒を〳〵へらまほしうぞ
おもふ。なんぢら乳くうべきものにして食物をくらふ
べきものとなりぬ　十三　あるものは乳をのむものにして赤子なるべし　義
のことばを〳〵しらず　十四　それ食物は心ろをそなへざる
を〳〵しらず　十四　それ食物は心ろをそなへざる
練て善惡をわきまへうる成人のものなるべし

第六章　ゆゑにキリストのをしへのそもじめを
さりて死行のくひあらためと神によする信仰と
洗の禮と手をおくことと死人のよみがへりと

き刑罰。これらのをしへのうちのふたつびあくことをせざ
して完全にまもむべし三神もろきびつをもちこまを行
ん四そのひとつび光照をえ天のたまものをうけ聖靈をう
むり五神のよきことをと来世の權能とをあぢわひそ
のち六墮落するものの神の子をふたつび十字架につけて
顯辱とまるがゆゑなり。まことにこまを悔改よたちへらまる
ことあたはざるなりと又地もむくそのうへにふまる
雨をまねひこみて耕者のためになるべき菜蔬を生せる神よ
りめぐみをうくれど荊棘とあざみを生ぜるはすてら
れ。のろひちかくその末はやけやうべし九愛まるものよ。

まことにわれらきこえをふるく信ぜり十神はるんぢらがさきなる聖徒に役事いまもするほこれまつことわるその功勞と聖名のためによあらはしたその愛をもてまた不義あるものにあらざればなり十一なんぢらおのおの終までおなじごとくひたいざりざる望をたのしまんがためにまへとおなじごとくそのみをあらはせかしと。十二ののの信仰と忍耐をもてやくそくを嗣るものにならんことをねがへり十三それ神はアブラハムにやくそくをなしたまひしときおのれよりおほいなるものに指てちかふべきものなければおのれを

さゝて誓言(ちかひごと)いひこまひけるは。つまるゝんぢを大(おほ)よめくまん。まさるゝんぢの子孫(しそん)をおほくなさん。益(まし)ん。この地(ち)あまねくあまねく約束(やくそく)のりのごとくおほきを人(ひと)あまれよりも出(いだ)されなるものをさゝそちふ。まこと事(こと)をさだむる誓言(ちかひごと)へてこのまちのあらそひをとゞむるなり。さてこまべ神(かみ)はやくそくをつぐるものなり。その昔(むかし)のこのそらざることをいよく表(あらは)さんとしてやくそくのうへまこと誓言(ちかひごと)をなしたまへり。神(かみ)のいつそることあらざるこの二件(ふたつ)のことのそらるきことい。前(まへ)よりところの望(のぞみ)をとらんとて怒(いかり)をのぞむるを見(み)いをるぐきめんがためなり。これらがこの望(のぞみ)いたは

おもの釘のごとし　既に固く打ちたる釘の如し
まことの主イエス　耶蘇
の位のごとく　かぐら　祭司
第七章　このメルキセデクはサレムの王にしていと高き神の祭司
なりしが。アブラハム王たちを殺して還りしとき。これアブ
ラハムを迎へて祝せり　二アブラハムこれよりすべて所獲の十分
の一をこれにわかてり。まづその名をとけば義の王つぎにサレムの王
となり。これまたその上なき平康の王なり　三これは父なく母なく
族譜なく生のはじめなくまたその終もなし。神の子に
ならひてとこしへに祭司なり　四先祖アブラハム所獲のも

つくものよきものゝ十分の一をおさめ、これをあがめんがその人のいえを尊うをあがめべし。五レビの子孫のうち祭司のつとめをうくるものゝ律法よりさだめて民をるそのその兄弟より十分の一をとることを命ぜらる。六されどこのアブラハムの腰よりいでたるものとゐどもるは然るをもアブラハムより十分の一をとりてその約束をなしたるものを祝せり。七あらそふべからざるものゝまされるものゝ祝さるゝ論。八ここにては死べきもの。のこころるゝ活るものゝうと証せらるゝ。九また十分の一をうくることをなしたるレビもアブラハムを

ゐたれど十分の一をさるゝあり、
このゆゑにあくるときレビもその父の腰よりいでたるゆゑ十民いレビ
のまたるる祭司の職よりしてきたる律法をうけたりしが
らの職によりて完全にことあらざるんぞほかに又アロンのごとき
とてるべきメルキセデクの位のごとき祭司のをることを
りとめんや十一またその祭司のまたぢこのたるときに律法もまた
かるらぢこのたらべし十二こまたらのことたる祭壇よつとめなる
ものるき支派より屬ものをさしそひくり十三をまたらが主の
ユダよりいでくることにあきらかるり、モーセこの支派よ
つひて祭司の職のことにるにものいひそぎりき十五またぞ

メルキセデクのごときほうの祭司あくまでそ律法のうえ
ることもいよいよあきらけし 十六 このまた肉體よこのごろおき
たの法よりうひてなくぞくちざる生命のちからよりまさ
ぐひそなそり 十七 そのメルキセデクのくろるのごとくるのれぢ
いろぎうるく祭司ろうと證せられこまびるり 十八 そもそも
律法いるよごとをもまつこうせしとろえるゆゑよさきの法度いそのよろきこと益るきをもりそ廢せら
れ。さこよおされるよき望をたそられそり。これらこの
望さようそ神よちろづくことを得るり 十九 この人々い
ちらひるくこそ祭司とるをど。うれい誓をのそ祭司と

デクの位のごとくくりぎりるく祭司くりとくれるものよ
よ。このくのごとくく耶蘇ハちろひよあらさまべ祭司とる
らぎるほど尤もよきけのゆくの中保とるれり二三うれくハ
死あるよりてるげく存ことあくうぢゆゑよ祭司とる
りくるものあほろりき二四されど耶蘇ハうぎりるく存がゆ
ゑよこのそるこくとるき祭司のつとめをりそり二五このゆゑよろ
れハあのれよりて神よきくるものくなめよ懇求んとそ
つねよ生バ。このれらを全まくひろうるり二六このくのごとき
祭司のをきハいとれらよ當るりのるり。このれハきよくくしそ

不善にうるくけがれるくくて罪人よりはぢうまり。うろ
天よりもたかくくニまことの祭司のをきそのごとく。ま
づおのれの罪。のち民のつみのためを毎日いけにえをさ
ぐべきよくる。そはこれを一ぢひおのれを獻てうを
をうるをべるり二八それ律法はよわきを人をたてゝ祭司のを
きとるをり。されどおきてのあとの誓のことばは永遠さ
つうきを子をたてゝり
第八章
つゞけいつるところの肝要はかくのごとき祭司の長
のうれらよあることとるり。このまゝ天よおいくく大るものゝ
立の右はぎくく聖所につかふまことの人のたつるところ

よあるを以て主のたてたまふにあらで人のたてたるなり
ての祭司のをきて立られてる禮物と犧牲をさゝぐるた
めるがゆゑによりこれもまたこのるゝべき獻ところのものある
べし　四もし地よをらば祭司とるべからざるなり。そはまで
に律法よりてさゝぐるものをさゝぐる祭司あればなり
五このものらがつとむるところは天よあるものゝ狀と影なり。
モーセ帳幕をつくらんとせしときに、るんぢ謹愼てすべて
のことをるをよ山よあらはれてをがるんぢよあるをせしに
ところの式よりてふべしとおもはれたればなり　六
されど今うをいまさるる約束よりとづきてなをそれたる

契約の中保となる。かくのごとくこのれいをぐをとる職を
えることそのそばめのけものやくもこのくることるべっの
ちの契約をたつることをりとめじ八その處ところをれ
らにあくもして云主いわくまひけるい、ここを是イスラエルの
家とユダの家よ新約をたてる全備まるの日きたらん九こ
の約ハこを是手をとりそうれくの先祖をエジプトの地より
みちびきいぐせる日よりたてし、ところのごとくにあらだ。
そハうをもらつとぐ契約よをぐをこをまさうれをこのくり
みぎり〳〵がゆえなり。と主いひたまひしより十まこ主いひ
たまハサヨハその日の後ちこれイスラエルの家よりたてる

まことその心よきならん。ゆゑによりてその神とるゐりの
ひと民とるゐべし。十一 あのくその邦人とその兄弟よりも
へそ。るんぢ主をおれとまことにそだ。そん小より大よいる
るまでらびくくれをおらん。十二 ゆゑにれらの不義を
あをれとその罪と惡をまことにろよとおぎまびるり。十三
のれまでる新といひ、いそだめのものを舊とよる
なり。それふるびてあそろるものん殆どきて色うせん
こと

第九章

そだめの契約よかまりの禮儀と世よつける

聖殿とあり二設けられまくやを聖所とゐらく。うちよ
燈臺と案とそなへの餅あり三まく第二の幔のうしろの
まくやを至聖所とゐらく。ここに金の香鑪とあまねく
金をおほひし契約の櫃あり。このうちマナ埦
る金のつぼとアロンの萠芽杖とふたつの契約の碑あり。五
らくよい贖罪所をおほへる榮耀のケルビンあり。今こまごま
つのそつまびらかにいふをえず六かくのごとくととのへられしのち
でそそのそう祭司たちつねに帳幕にいりてまつりをな
せり七おくなる幕へを祭司のをそのそ年ひとたびのみど
血をとりてこれにそそぎてるし。これ聖靈の示し

聖所に入るべき道いまだ顯れざりしことを
聖靈これを示すなり。
8 第一の幕屋なほ立てる間は
9 この幕屋のために設けられたる
表式なり。
10 これ食物と飲物と
種々の洗濯とに關する
禮物と儀式とにて
肉體に屬する儀文のみにして
改良の時まで
負せられたるものなり。
11 今キリストは
來るべき善事の大祭司として
現れ給ひ
手にて造りたる
この世に屬する
12 羊と犢との血によりてにあらず
己の血によりて
一たび聖所に入りて
永遠の贖を

犢の血をかちゐをあのゐ血をもて一次きよきところよいり
て永遠あがふひをるをことをえたり十三もし汚穢よそ
ぎて牛および羊の血また焚るところきめらしの灰るど肉
體をきよむることをえを十四まして、そのぎりるき靈よより
瑕るくしてあのまを神よさげし、キリストの血いるんぢ
らに活神をまつらせんがため死のあをるひをさらしめて
そのこころをきよむることをせざらんや十五このゆえよこれ
い新約の中保となるをり。これをしめの契約のときる犯せる
つみをあがふかべき死あるよりてめされたるものうけざり
ふ十六同り約束によりんがらあまりあまりて遺書あるる

とき、この契約を定めしモーセ、すべての民に律法のごとくに、すべての誡命を告げたるとき、水と紅き羊の毛とヒソプ草とを取りて、律法の書と民とに灑ぎて云ひけるは、
二十 神の汝らに命じたまへる契約の血これなり。
二十一 また幕屋と祭事に用ふる器とにも、同じく血を灑ぎたり。
二十二 律法によれば、ほとんどすべてのものは血をもて潔めらる。血を流すことなくば、

されバゆゑさるごとくの〳〵三このゆゑよ天よあるものの
このごとくなるものハこのうらバにこまらをもてきよめられし
うど。天よあるものハこまらよりもまさりたる犠牲をもて
きよめらるべきなり三キリストを眞のものゝ模なる手にて
つくまる聖所よりぞ。いまより永遠にまきらのためよ
神のまへよあらハれたまふとて眞實の天よりぬ三まことの
ハ祭司のをさの年ごとにはらのものゝ血をもてきよきと
ころよいるごとくく屢あのれをさゝぐることをせバ二六のし
おうらバぞこのれ世のをぐめようこのごろあまたく苦難
をうくべきなり。されど彼の身を犠牲とるゝて罪をのぞ

び死てのち審判をうくることく人よきぐるまるることろう
二 このくキリストもおほくの人のつみを負んがためよ一たび
ひけまくとせらる。このれいまた罪をおふことなくおのまを
望めるものにすくひあらはれて救をほどこしたまふ
第十章 律法はきたるらんとするよきことの影にしてまこ
との形さあらざれば年ごとにたゆまずさぐるところ
の祭物をもて神よきたるものをつねに成全ることあ
たはず二 もしまことにきよまることをえば獻祭もの一たびき
よめらるまで罪をおぼえざるがゆゑよさぐるらとを

止ざらんや 三 さるほど年ごとにこの祭をするもよりそつ
をあばめんことあらもするり 四 これ牛と羊の血をつくるをの
ぞくことあればもぎるよるに 五 このゆゑよこの世よきくる
ときいひけるに。ゐんぢ犧牲と禮物をこのまぎたぐるぐ
さめよ肉體をそるふ 六 ゐんぢ燔祭と罪祭をよろこぞだ
七 そのときこそをいひけるに。神よこそをゐんぢの旨をあこるゐ
んとそきこそるまるもちこそをつひそ書よあるされう
八 前ゐいいけるへとそるへのと燔祭と罪祭をするもち律
法よあこそひそきこぐるのものをこのまだまくよろこぞだ
九 このとちまい神よこそをゐんぢの旨をあこるそんそ

りのをのぞけり十二この者はつみのために
耶穌キリストのひとたびあのご肉體をさゝげしによりてまた
十一きたるその祭司は日ごとに立ちて奉事をなし、しばしばつね
をのぞくことあたはざるあまたのいけにへをさゝぐ
十二されどこのひとは一次つゝのことめにひとつのいけにへを
さゝげそうぎりなく神のみぎにざし
十三その敵をあしがたいとるさんときをまちそり
十四それ一のさゝげものをとりて
きよまるものを永遠まつたうしたればなり
十五聖靈またこれを證せ。そはこの日のくちうらとなりて

と云る契約ハこゝにのみありといふの十六主いひたまふなく。
が律法をそのこゝろよ置そのあるひよ志る〳〵十七またその
罪と惡とをつぐこゝろよことめごとあるがゆゑなり十八また
こゝらのゆゑ〳〵あらんまゝ罪のために獻ることるこの
るべし〳〵十九このゆゑに兄弟よ〳〵聖所耶穌の血まよりてその
〳〵ためよひらきたるあたらしき生路よつて幔る
その肉體をとほりそゝらんにして至聖所よいることを得。
二十一つの神の家をつかさどるあはいある祭司あまバ二十二われら
誠實のこゝろと疑をいだざる信仰をたりもち心のあしき
あるひとをそゝぎ淸きみづをもりて身をあらはれて

しそのごとくまもるべし。その約束せしものハ誠信をもてそなり二四これらなどひよ顧て愛心と善行をそげまし二五會集をやむる ある人のごとふことなく。ことにあひまもめその日いよく ちかよるを見てまもく このごとくなるまべし二六もしこれら眞理をさときれしのちもなほ しいまゝに罪戻をおかしつゝをあざるふいけゆへまことあることなく二七ただおそれて審判をまつことゝ仇敵をやきつくさんとする烈火のごとるのみ二八モーセの律法をもそむるもの。もし二三人の證あらばあれまもることなくしして死べ

一九 まして神の子を蹂躙みづからきよめらまじいや
くの血を尋常のものとして。まして恩をほどこしを靈をあ
るどろのものとうとくべきその罰のあるきことしらざりしと
二〇 主いふ。仇をむくゆるこれわがうけをむくゆべし。また
その民をさばかん。このくいあらためをせまらざる三一 活神の手よりおちいるべきことをる
三二 るんぢらむしろ光照をうけしのちおほいなる苦
のたゝかひをおのびたりし日をおもひいづべし三三 あるひは
詬辱と難辛をうけ人よみものとせられ或はかゝる
ことにあふものよ與ることをうるせり三四 そはるんぢらを

つねなるものつきものあるをおもう。人のつみとが業をうむことまるでのようとおそうけり。三五このゆゑよるんぢらのおほいなるむくひをうくべき信仰をみぢまもることあるべきものか忍耐あるべし。これ神のむねをおこなひて約束のものをうけんがためなり。三七いまおそらくありてきたるものきたらん。このゐらざあそこらん。三八たゞしき人は信仰によりて生べし。もしおそればたましひこれをよろこばせず。三九されどわれら退縮てほろびにおよぶべきものならず。信じて靈のまもりをうべきものなり

第十一章　これ信仰ののぞむところをうくるぞ。いまざみさるところを憑據とするもののありにいまくへの入これよりそはやされを得さうにさまらむんろうによりてものろくこの世界は神のことをもてつくられ。如此ゆるところのものは見べきものよりてつくられざることをむる。信仰まうてアベルはカインよりまさされるそのものを神よさげてたてしきものと證せらるをなり。その神その禮物さついてあらしきあらまへをるり。このれむぬまども信仰よりて今るはものいへりおれらによりてエノクはむるぎるさうろうされうり神これをうつせしによりて人こい

よろこぶものと證せられしゆゑ、ノアは神を
よろこばせることあつたのである。その神さきに
を信じ、その神にあつては、あのまだ見ぬものの報賞を
たのみ、ひたすらに信ずべきをさとり、ノアはいまだ
ノアはいまだ見ざる事の示をこのうむり敬畏てその家族
をすくはんために舟をまうけたり。これによりて世の人の
つみをさばき、またこの義をうくべき世嗣と
なりぬ。ノアは神とともにあゆみたり。
ゆゑにその命をとりむり。こゝまで

びこれいぞなう九このれきこんらにようて異邦よりあうがごとく約束の地よりもどう。あるじやくそくをあひ嗣こイサク ヤコブとそのう帳幕よをまう十そハ神のつくりいとみめるところの基ある京城をのぞめばるう十ああうにようそサラもこねをやどさるこちらをうけ年邁しうども子をうあり。これやくそくせしものハ誠信あるしとおもわれバあり十二このゆゑに死するものごときひとりより大のはしのあまきと海邊のまるめうぞくごときがらとくろまれいぞこう十三こまらハみな信仰をいだきて死ねらいまだ約束のものをうけざりしがそろふこらを

ものゝごとくいふものゝ家郷をこひねがふことをあらはすまでなり　十五　もしかれらの思ひ
ゐたりしところをおもひいでゝかへるべきの機あり
しならば　十六　されどかれらはさらによき鄕
即ち天にあるところをしたふなり
このゆゑに神はその神とよばるゝことをもはぢとせざりき
それかれらのために京城をそなへたまへればなり
十七　信仰によりてアブラハムはこゝろみらるゝときイサクをさゝげたり
約束をうけゐたるものなるがその獨子
をさゝげたり　十八　この子よつてのそみ
は汝の子孫イサクによりて

てとるのへらうべしといふれこうき十九このれあのへらく神ハ
死よりこれをいきうへしうること、まるをも死よりうを
をうゆしがごとくくるうき二十信仰によりてイリクハきてこう
んとまるらとまつのそヤコブとエサフを祝せり二一まんこう
によりてヤコブハまるんとまるときまヨセフのふたりの子
を祝しまたその杖のうへらによりて崇拝にとをるせ
う二二まんこうによりてヨセフハまるんとまるときにイスラ
エルの子孫のエジプトよりいづるうことにつのそこのこう。また
あのう骸骨のうことにつのそ命じたり二三まんこうによりて

をみて三月の間かくされたり。
おそれざりき。二四 信仰によりてモーセは成長したるときパロ
のむすめの子とよばるることをいやとなり。二五 しばらくの罪の
たのしみをうけんよりはむしろ神の民とともなやみを
うけんことをよしとし。二六 キリストのために
誹謗はエジプトのたからよりもまさりたる貴ときものと
思へり。そは報賞をのぞめるによりてなり。二七 信仰によりてエジプトをさりたれ王のいかりをおそれざりき。これ見ざる
ものをみるごとくたへ忍べるによりてなり。二八 信仰によりて
初子をほろぼすものかれらにふれざらんために逾越節と血をそそぐ禮をまもりたり。二九 信仰によりて長子

をはろぞをものゝこのまゝよふれざらんがためなり二九ゝ
んとうにまりてこのまゝふ紅海戦をうのごとくそゝりしぐ
エジプトの人へこゝまをそゝらんとそゝてもばを死さう三十ゝん
とうんよりて七日のあひだエリコの城をめぐりまはる遂よ
そのいしぐきくづをちこう三一ゝんとうにまりて妓婦のラハブ
も信ぜざるものとともにそろびざるき。そゝ偵者を接て
こゝまをやをさらるまゝめしまびまり三二ゝまさゝまるよ
をしのそんや。まゝキデオンバラクまゝサムソンイピタダビデまゝ
サムエルおよび預言者さちのことをしのそんよゝ時ゝまざるまり。
三三ゝんとうにまりてよりてこゝみくを服し。義をあてまひ

終束のものを示猶の下をくゞる火熱をふせぎ
又をのがれ。よろこばしくして剛強せられ。こゝろひるがへ
りきたりて。異邦人の陣をおりぞろせしこと三五婦もまた
よろこびの復活をうけしことあり。またある人はのろ
しも愈美よみがへりをうべきために酷刑られてゆるさ
ることをこのまざりき三六またあるひとはあざけりをうけ。む
ちうたれ。縲紲と囹圄のくるしみをうけ三七いしつゝそうたれ。
鋸にひかれ。火にやかれ。又ころされ。綿羊と山羊の
のそをきそへあるき窮乏しくるしめられ三八世はかれ
らをあくまびと。のれらは曠野と山と地の洞と穴と

さまよひくるう[三九]ことをらくみる信仰(しんかう)よりそはまもるをえ
られどもやくそくのところをえざるき[四]そのこのれるものつ
ねらと偕(とも)るうざれば成全(まつたう)まることあたはざるなりさきに
まうされるものの神あふうぐめつるまらに備(そなへ)なきの人ノ

第十二章

このゆゑよつてもらかくおほくの見證人(けんしやう)ら雲(くも)のごと
くこのこされしところぞ。まへその重負(おもに)とまどひる罪をのぞ
きなんものびそつるまらのまへよ置(おき)てる馳場(はせば)をそくり
耶穌(いえす)をるもち信仰のみちびきとるうそこれを成全(まつたう)まる
ものをのそむそ。うまへその前(まへ)よおくことろのよろこ
びよりそろもちるものとともで十字架(じうじか)とをりそ神

の座のみぎにざ〜ぬ三るんぢら倦つかれてこころをうしなふことなからんためなり。惡人のうく〜あのまにさゝらひ〜をもたのびくるものをおもへべし〜〜〜るんぢら惡をあくそにふせぎていまだ血をながすまでいたらず五また子につぐるがごとくつげていへり〜言をるんぢにくゆるなかれ。いはく子よるんぢ主のこらしめをこのろんずるなかれ。その叱られくるとき心をうしなふなかれ。それ主はその愛するものをこらしめ。またまべてその納とるところの子をおちうちそうるんぢらもしこらの懲治をおのづく神い子のごとくるんぢらを待あつかふ。それ父のこらしめざる子あ

らんや、まづその人のそうくるこらしめ。もしるんぢらるくバその私子にして實子とあらざれバ九まで其の肉體のちつかれをこらしめしものるるはこまをうまつり。まして靈のもつにおそごひて生をえざるべけんや。にくさいの父はその心よまもせん。おぢらくまもらをこらしむ。されどなまじひの父はまもるに益をえもしめてその聖潔をあづからせんがためこらしむることをるまた、まづその徴治いまそよろこべるにあらず。のちにて憂愁とあるべし。されどのちにまたよりて鍛錬をるものの義のおぶかるる果

膝を屈めて、十四 足るてるるものゝまよふことるくいめ
されんがため、るんぢらのあゝよ平直るみちをそるふべ
〳〵十五 るんぢらはべそのものと和睦ことをるし。みづからき
よろらんことをつとめよ。人もし〳〵きよろらぢが主よまみゆ
ることをえざるるり、十五 るんぢら謹慎よ。あそらゝ〳〵苦根
をえいでてるんぢらをるみをさん。このつおほくの人こをき
よりん、けがさるべし〳〵十六 あそらくエサフのごとく淫をおこ
るひ妄のつとぎをおはそものあらん。それ一飯のくためよ長子
の業をうるまり十七 そのゝち祝ところのさいそひを嗣んこと
をおもくめられども。つひよまそられ涙をおぐし〳〵志をひ

きくをんとせ〳〵が得ることあるごとくぞ。〳〵いるんぢらのこゝろこゝろのうち十八くんぢらのちゝぶゆるところゝ押べきやまもあらば。あるひいかり心てる火。あるひいくらくらの黒暗あるひい暴風。あるひい籤のもと。あるひい言語のこゑもあらば。この聲をきゝ〳〵ものをふるへびこゝろだをもてこのごとうたまをぞるることをねがへう。その獸さへのし山もふまるるぞ。いゝをそうろべ〳〵と命ぜられし〳〵をこのれらがのぶることあれをぞり〳〵ゆるるう三その見〳〵ところ極てをそろ〳〵ろうけまび モーセも。ゐをいくく〳〵をそを

いシヨンの山まで滅神のしろしめす天のエルサレム、また千萬の
衆きたるみそなはち 天使のあつまり 二三 天よりきたれる長子どもの教會。またさばきの神、おほよび成全せられたる義人のたましひ 二四 新約の中保なる耶蘇、おほよびそそぐところの血なり。この血のいふところはアベルの血のいふところよりもまさりて 二五 つつしみて告示ところのものをこばむるなれ。もし地よそ告示せるものをこばみしこのまぬかれざりしならば、まして天より告示せるものをこばみてまぬかるることをおもへ。 二六 そのときは地をふるはせたり。今は
こと
をえんや むかしいへるごとく地をふるはせたり。今は

ら給つぶやくやうに、つゝましくひとりごと地のそこるゝを天をもふりそんこのまゝ一次といふべき。ふるそるべきものゝをてられんことをおもへ。こゝらのつくられるゝ震ふれざるものゝ存んなめるり六このゆゑよつてこゝらふるそれざる國をえそれや。恩よろんじて虔誠うやまひ神のみこゝろにゝるふところをもてこれよつてふるぐ〳〵九そをつゝれるの神ハそきつゝくるを火るり

第十三章 るのちらつねよ兄弟の相愛まるこゝろを存べ〳〵二たびらゝに接待こゝろをつゝもるゝるれ。ある人ゝくるゝた

るがごとく降者をおりへ。るんぢらもまた身よわるがゆゑによくるしむものをおのれとおなじくおもへ。四るんぢら婚姻のことをたふとくそたふとめ。また牀をもけがすことなかれ。神は苟合また奸淫をものつつしみをさだむべし。五るんぢら世をつねに貪ることをせず所有をものそたまりとせよ。そはかれるんぢをさらにさることなくすてじといひたまひしがゆゑなり。六されば我らは毅然としていふべし。主はわれをたすくるものなれば我はおそれじ。人はわれに何をなしえんと。七神のことばをるんぢらにをしへるんぢらをみちびくものをおもへ。そのあるひの果をそその信仰まねらふ

べし。耶蘇キリストはきのふもけふも永遠のそなたざるなり九さまざまなるをしへと異端よこしまなることをゆるし悪よりそこなろをくらうせられ飲食よろづざるべよし。飲食によりておこるひとつの小益まることころるくりきをきらに祭壇あり。このうへのものを帳幕よつてふるひとつくらふことをえざるなり。祭司のをさ罪をあがなふそんがためなけのくの血をこうさんそきよきところに入そのけのある體を營外よやけり。このゆゑな耶蘇もおのれの血をおかん民をきよめんがために門のそとにくるしみをうけしなりまされ

このれよゆくべし。ここれらこころにありて恒よこうりつづき城邑
るしいだきそこうんとまるみやこをもとむまこのゆゑよされ
らこころをよりてつねる讃美のまつりを神よさてぐべしをを
るそもそその名をはむるくちびるの果をりまされどまこと
善をこのまとと施捨をこころをつつまるこるれ。こくのごを
きまつりし神こころまをよろこべぞるつまるんぢらを導くりの
よまくらひて服もべし。うれらしおのづこころを神のまへる
陳訴つきりのるぞゆゑよ。るんぢらのこまし。ひのこめる
まりんこころをまるまでるつ。うまたらをるげうもび歡喜て
まりのらこころをるきこしむべし。まらさるべるんぢらに

益るゝ 十八 なんぢらこれらのために祈禱せよ。こゝをもてなんぢよ
きこゝろありてまごゝろのことに善行をるきんとをることを
を信ずるをもてびるり 十九 これるはもとみやうにるんぢらを歸
らしをえんがためよるんぢらのいのらんことをきゝ入に求
平 ねらゝくはこのぎりるき契約の血によりて羊の大牧者
るるゝ主耶蘇キリストを死よりよみがへらせし
平康をくだしの神二耶蘇キリストによりてそのよろこぶ
ところをるんぢらの心のうちるまごゝろにまことをるんぢらを
しそその聖旨をおこなはせんがためにまごゝろの善事よ

しゝて世々にのぎりあるやうにアーメン二兄弟よいまされるんぢらをはげまし書おくりなまそことを勸勉のことをゆるされんことを請三ことをしらざる兄弟テモテのゆるされしことをるんぢらもるべし。かれのはやくきたらばともにるんぢらを見ん四請まぐそるんぢらをみちびくものおよびまべその聖徒よ安をとらへ。イタリヤよりきたるものも安をるんぢらにとへり五ねがはくは恩寵るんぢらまぐそのものとともにあらんことをアーメン

使徒ヤコブの書

第一章

神および主イエス・キリストのしもべヤコブ各處に
ちりをる十二の支派よやすきをとこゝろ兄弟よもしゝん
ぢらさまざま試誘にあふことをよろこぶべきこととまべ
し三そは爾儕のうくる信仰のこゝろみは忍耐をう
むのびを生ぜしむると知べきり四なんぢら全きの備て
くるところるゝんためよ忍耐をしてまつたくそろひ
めよ五なんぢらのうちもし智慧たらざるものなら
ばとがむることなくして惜こゝろなくして衆人にあたふる神よ
りもとめよ然ばたゞへらるん六さまざま疑ことなく信じて

を求べし〳〵うるふものハ風よりごろきまそひるゞへる海
浪のごとし〳〵七斯のごときひとん主よりあまものをもうく
ると想るゝ是ハこのくの如ひとハ貳心まし〳〵それ行とこゝろ
の事をべてきごまりなし〳〵九卑賤きやうだいハその高せう
る〳〵こゝろをよろこびとせよ〳〵富者ハその卑せうるゝことを
よろこびとせよ。そハ草のさくの花ごとく逝べければなり
十一そ是日いそ〳〵熱し〳〵草をこのらせそその花れもそれ美容き
ゆ。おもめるをのも亦うくれごとくその爲ところるのぞよし
て已まほろびん士ものびて試誘をうくるものハ福なり。
そいこゝろみを經てよし〳〵とせらるゝときを生命の冕を

うくべけまびるり此このんむをい主わの当を愛まるをもの
約束ーたまひーそろのをよるり 十三 さそそるゝものハ神
てまをを惡よさそふといふるら迚神ハあくるさそらまぎ。ま
た人をもなくる誘たまらば 十四 人なくるさそそるゝハわれ
まの慾るひらまていぎるいるゝるり 十五 慾まぞるもらみて
罪をうみ罪まぞる成て死をうむ 十六 そらが愛まる兄弟よみづらう
欺るこのれ 十七 まべてよ善賜とまのなきるまものハ皆らへよ
り諸の光明のもゝよりくだるるり父ハこのるることるくま
た轉動てあるゝるる影をるきものるり 十八 彼れのまよ旨よ
志たらびひ眞道をりてるまらをうめり是てまるをしてそのら

くるところのをよくみるまで初よりむをべる果のごときをは
とみるしめんためなり○十九このゆゑふことが愛するきやう
だいよ人おのく聽ことをもみやるべし言ことをおそくべし
怒ことをおそくもべし二十そも人のいのりへ神の義をおこ
なふことをせざるなり二十一然バをろくの汚穢とおほくの
邪惡をすてて柔和をもてそのんぢらのこゝろに殖なるとこ
ろの靈魂をすくひうる道をうくべし三るんぢらことばを
おこなふ者となるべし徒ことをきくのみにしてみづか
ら欺ものとなるなり二三夫ことばを聞のみにしてこれを
なさゞるものは鏡にむかひて本來ヒ面をみるひとゝ

似なり 二の者れの者をうつし觀てさり後れ如
何ある相貌ありしかを忘たる 二五 されば自由なる全き
律法をおんこゝろよみてそこに留まるものにこそ功を
ふるものなくして聞てそこをすものにあらざれば。こゝに人その
なすところ福あらん 二六 なんぢらのうち誰かをしみづから
神につかふるものとおもひてその舌に轡をつけず自己の
こゝろを欺くものあらばこの人の徒然なり 二七 神なる父の
まへに潔くして穢なくつかふることこれ孤子と寡婦を
患難のなかに眷顧まふみづからまもりて世にけがされざ
る是なり

第二章 なんぢ兄弟よなんぢらさきに我主
耶蘇キリストのおんくらゐの道をまもりたまふ人をこのむよ
うにみることなかれ 二 若ひとの金環をもあらはしき衣服を
きてなんぢらの會堂にきたり又まづしき人けがれたる
ものを著てきたらんに 三 なんぢらうるはしきところをか
たる人をこのくらゐにすわらせよ汝はそこに立てゐよ
または貧者にむかひ彼處にたてといひ或はわが足下にま
ろべといはゞ 四 なんぢらいかれのくにうち分別をたてまた惡
念をもて人をさばくものにあらずや 五 なんぢ愛するきやう
だいよ聽よ神のみこの世のまづしきものを選びて高

とも世己をあいするをもて約束したまひしところの此國をつぐべき者とえらびしめたまふにあらずや六あなたは貧者をいやしめたりあんぢらを凌虐まつ裁判所にひくものは富者にあらざるやセこのあなたがたのうへにとなふる此美名をけがすものにあらざるやハあんぢらもし聖書にのをるところの此おのれを愛するごとく鄰を愛せよといふこの最上の法をまもらばそれはよろこばしき善なさまどをし人をこのごとくみることをせざる事罪をおかすにより律法あんぢらをさだめて罪人とせんナ人おほきそをまもりつゝ守ともをしそれ一につまづくときは

まべそを犯すり十一そも姦淫まるるゝれといへる者まれこ
ろをおとるゝもといへどもるんぢら姦淫せざるもの殺こ
とを世を律法にそむきてものとするなり十二るんぢら言こと
ばうるふことと自由のわきてこまりて鞭をうけんとまるを
のゝごとくまべし十三なそもむことをせざる者はさもろゝ
とき亦なそもまるることるろんぢ矜恤はきそきこ勝るり
十四我きやうだいよ人みづゝら信仰ありといひてのゝ行る
くぶるの益なるんやその信仰いふそこのもをまもひえん
や十五もし兄弟なるひへ姉妹そぢろまそ日用の糧こともゝ
このゝんこ十六るんぢらのうち或人こまるのひて安然こゝて

ゆけ願はんぢらなんぢ　このごとくして飽ことを得よと。その
てその身體よるくてるらぬものをこころよあなへぎばるん
の益なるんやまこのくのごとく信仰をし行をこのねざるとき
いまるもち死るるり大あるひと言んるんぢ信仰あるごとき
むくるひあり請るんぢがむくるひを兼ざるあんらうをと
まるよめせられいわが行よりてるぶ信仰をるんぢよ示
さんと十九るんぢ神はなぶひとりるまとあんぎ斯あんぎる
いよし惡鬼をまる信じてをるけり　干噫むろっるる人よ
むくるひをこのねざる信仰のあぬるこころを爾あらんとむる
ふや三ろまろの先祖アブラハムその子イサクを壇のうへよ

さてげて義とせらるゝ行よるにあらざるや三その志んかう行とまりよりもなからき且わざおひよりて信仰まちなきをえなるをもんぢみるべし三こゝ聖書よりあきらかにアブラハム神をしんぜ彼そのしんかうを義とせらるゝとあるよりのべり。こゝまた神の友とよばれたり二もんぢら人の義とせらるゝハ信仰よりのみよるよりもなほ行よることをあきらかにせるなるべし二五また妓婦ラハブ使者をうけこゝをはなの途よりさらしめて義とせられたるを行よるよりあらざるや二六身をも〳〵靈魂をそこなふときハあゆる如しんかうも行をゝる

ゐまる師たるもの、罰をうくることをもつともおそれ
まべなり　二　それわれらはみな　しばしば　愆をおかせるものなり人を
し言はあやまちおかすことなく全人にしてよくおのれの
きうるなり　三　それもし馬をわれらにしたがはせんために
てその口にくつわをはめくときはその全體をまわすこと
舟もまたその形いかほどきく且はげしき風におひらるゝことを
小舵をもてこのぢとりの意にまゝにこれをまわすなり　五　この
くのごとく舌もまたちひさきものにして誇ることおほいな
り視よほどろの火いかほどおほいなる林をもやかすを　六　舌は

まるふち火まるもち惡の世界より舌の百體のうちよりまるもりありて全體をけがしまる全世界をもやしまるもりあらゆる火のちごくより燃いづ七そをさまざまの獸禽昆蟲うみよりいでるものみる制をうくまるまでも人よせいせうまたりハさまざま人なまを舌を制しなるまでも乃わきへこがたき惡まして死毒のみまるものなりれるまるもりまるまをもて主まるもくを祝まれこまをもて神のこのみちよりうみとりてつくらまたる人をのろふ十いまひと詛ひとつの口よりいづ。そも兄弟よこのくのごときことあるべきことなるべき土泉のみなもとも一穴よりなまき水とにがき水をとものいだきんや土そも

兄弟よいちぢくのき橄欖の果をむすび或いふがうのき無
果花の果をむすぶことをえんや斯のごとくいづみのみな
そと鹹水と淡水をともにいだすことなるべし十三わがもろ
の中にこころをそきたるものゝ誰なるや。かうてなる智慧
をもそなきわこゝろひをあらそはゞ十四然どもわれらが
心のうちに苦嫉とたゝかひをいだくを是まことにそむく
なり眞理にそむきてそをころすなり又また謊るその是十五のいる
智慧いうくよりくだるにあらず地につけるその情慾につ
けるものの惡魔につけるものなり十六そこにねたみと忿爭ある
ところにこゝろさだめなき惡事とあるべきなり十七されど上よ

そのちゑハ第一よきよくつぎよ平和寛容柔順このう矜恤と善果みち人をこうたよろうみだまた偽るきりのよう大義の果へついてをおそのふそのう平和をそそ種よりてむをぶるう

第四章

なんぢらはうちの戰となることひいづこよりきたるーや。なんぢらの百體のうちよなうふところの慾ようきなるーよあらんや二爾儕むさぼどもえん殺こうとしー嫉ことをもどもも得ことあならんだ。なんぢら爭競といくきせりるんちらん求ぎろたようそえぎるるう三爾儕もとめてるはえきるいるんぢう慾のためよつひやさんとーて

安よとそむるがゆゑなり 四 姦淫をおこなふ男女よなんぢら世をすつるとまるゝ神よあだまるるをもらざらんや世の友となるらんことをねがふものはこのみの敵なり 五 聖書よ神のつくりたまへる裏にとゞまりめたまふ靈ねたまんをそこまでを愛といふをなんぢら虛しくおもふやと 神さづくるいとおほいなる恩惠をあたふ此によりていふ神はたかぶるものを拒へりくだるものに恩をあたふと 七 このゆゑによなんぢら神にしたがへ惡魔をふせげ。さらば彼なんぢらをにげさらんハなんぢら神にちかづけ。きよめ神なんぢらにちかづきなさまなん罪人よなんぢらの手をきよめよ二心のもの

よるんぢらの心をいさぎよくせよ九るんぢら苦こうるしめ
哭るんぢら其笑をこうるしみに易よ。るんぢらの喜をうるもく
こうへよ十みづこうを主のまへにひくくせよ。さらば主る
んぢらをたうとくせん十一兄弟よたがひにそしるるうるな。きや
うだいを誇なるひと兄弟を議にるものは律法をそしり律
法をぎもるるり爾もしぎもて議せばぎもてを行ふもの
にあらずして律法をぎもるものなり十二律法をなせる人とぎにる
もひとりありて彼はもくふことと滅もことをるしうる
るり爾なをもるれば隣を議もるろ十三それら今日明日そこ
がしの邑にゆきこしこと一年とどまり賣買して利をえん

といふことのよ　なんぢら明日はことをあらばなんぢら
生命はなんぞ暫くなりをまてつひよきゆる雲霧なり十五なん
ぢらの言ことはらんそのごとくいひ主もしゆるしなまたはいき
きて或いこれこと或いこのれことをなさんと上さまど今なる
んぢらたらぶりてほこることをなす凡てこのごときはこれ
こりい悪なり十七ひと善をなさるをしりてこれをなさ
こるをざるい罪なり

第五章　富るをれよなんぢら既よきたらんとまるなぎうひ
をおもひてなきさけぶべしニなんぢらのたからいかるん
ぢらは衣服いしみくひ三なんぢらの金銀いさびくされり

こは錆あらしをるんぢらを攻めこの火のごとくるんぢらの肉をくらふんるんぢら此をも此日よありてるは財をたくはふることをせり四視よるんぢらかその田をこのらせし雇人よあたへざる値いさけびそれ刈しものしよぶこゑいまでよ萬軍の主れみよいれり五るんぢら地よなりてをごりたれ志み暑らるる日よありてるそその心をよろこばせり六るんぢら義者をつみよさだめ且こゝをころせり彼るんぢらをふせがざりき〇七兄弟よ右のびて主れきたるをまちべし視よのうふ地のたふとき産をうるをのぞみて前と後とのあめをうるまでるみく忍てこゝをまちり八

なんぢら　もあのべ爾儕のこゝろをこのごろせよ
たゞまふことちかづけゐり　九兄弟よなんぢら互よう
らもることなからまん恐くい罪よさだめらまん視よさばきを
るゐ門のまへよおそう　十兄弟よなんぢら主の名よう
てこのたぐひ預言者をくるしみと忍びとの式をまなべ　十一
ごらん忍のぶものは福ありとおもふなり。なんぢら曾てヨブ
のたえびをきゝけり主いろんこのまよるゐたまひしところを見結
局をみよ。まことに主は慈悲ふかくこのら矜恤あるものなり
十二きやうだいよ一切ちかふなかれあるひは天ちかふなかれあるひは地
あるひは他物をさしてちかふなかれなんぢら是を是とし

否を否とまをべし。おそらくはなんぢら罪よさだめらまん 十三
るんぢらのうち誰らくるしむものあるら。なんぢら祈禱せよ
なをまろよろこぶものあるらなんぢらバそれ人さんびせよ 十四
んぢらのうち誰らやめるものあるら。なんぢむけうくるいの
長老なちをまねくべし。このまら主此名によりてその人よあ
ぶらをそぎこと色がためにいのらん 十五 そを信仰よりいづ
るいれまん病者をまくふべし主こをまをおこさんをし罪を
をろせしことなるをゆるさまん 十六 なんぢらたがひよ過を
いひなろいし且やまひをいやさること紙えんためよ互
よいのるべし義者のあろきいのりハ力あるこをまるり 十七 エリア

いつもきうと同情のひとあり彼あめふらざるこゝろを切よいのりけまを三年六ヶ月のひでり地よあめふらざりき十八復いれりけまを天より雨ふりて地その産をそえいだせり十九きうだい兄弟よるんおうのうち或いまことに此道よりまよへるものあらんよ誰ぞこゝをひきうへきび二十これ人あるべし罪人をそのまよへる道よりひきうへたいひ乃それなまじひを死よりまくひ且おほくの罪をおほふことを

新約聖書雅各書終

使徒ペテロ前書

第一章

耶蘇キリストの使徒ペテロ書をポント ガラテヤ カパドキア アジア ビテニヤに散てをる寄寓の者に

父なる神の豫知に隨ひ聖靈の潔めに由りて順ひ耶蘇キリストの血に灑がんとして選ばれたまへる人々に

願くは恩寵と平康とのまさんことを○三 讃美べきかな我らの主イエスキリストの父なる神

彼その大なるあはれみを以て我らを新に生れさせ耶蘇キリストの死人の中より復活たまへることによりて活る望みを與へ

めある朽ぬけうせ衰へざる嗣業をえさしめたまふあり
五るんぢら信仰によりて神のちからにまもられ已にそな
へあるところの末時になりそまんとまる救をうるあり六
こゝろによりてるんぢらよろこべり今おもらくさまざま此艱
難にあふてうれへざるをえばといへども卻てよろこびを
るのせり七るんぢらの信仰をこゝろみらるゝいくらる金此
火にこゝろみらるゝよりもなほとくしそるんぢら耶蘇
キリストのあらはれたまふときに稱讃となふときと榮光
をうるにいたらんハるんぢら耶蘇をみざれどもこゝろをあ
いて今みざれども信じてよろこぶそれ快樂いひがた

なく且さうであり、かそれをんぢらあんうの効
靈魂のさくひをうるによる十んぢらがうくるところの
恩をよげんせ預言者たちへこれさくひよこのることを
探索このおなじねうり十即このまうその裏よをるキリスト
の靈キリストのうけんとまる苦とそのち得んとまる榮を
あらこのじめ證まる此いいろ比ころいろるるときを示せ
るとおなじねうり十二このまろい黙示をうりて其つ先
ふるところの事お比当のためにあらた爾儕のためるるこ
とを志ふり。その傳へることいま天よりおくりたまふ聖
靈によりて福音をつたふるそのんぢらによつぐるとこ

ろ比こゝとゝろう。このこゝろに天使なちもゝろんこゝろをねがへり十三然ばゝんぢろこゝろ比腰よおびしへて微醒い比キリスト比あろいまなまふ時ゝんぢろよきたろんとまる恩恵をうたろをもゝーて望べー十四ゝんぢろ孝子ゝろよりて従前のくろきとき比慾よゝろふことゝろく十五ゝんぢろを召なまふ聖者よゝろひてまべその行をきよくまべー十六そふ録てをきよけをゝんぢろも潔まべーとあれべゝろう十七人をこのなよりみを各人のむこゝろひよりて鞠をゝんぢろをー父とよをゝ世よやとまる日をおそまてまぢたべー十八そいゝんちろあぢゝんをて祖父よりつなちろくゝろむゝーき

行よりうるあたひしん銀や金のごときくさるものによりてらひ十九疵あく汚るき羔のごときキリストの寶血によりてうるあたひをもてあがなひ二十キリスト世基をおのぐりしときにさだめられ此をもてときにあらはれたまへまた三あんぢらのキリストをよみぶくく世且こまことをもてたまひし神をキリストによりて信ずるものなり。

こゝろゆゑによりあんぢらの信仰とのぞみが神によれり二あんぢらまでも靈によりて眞理にあがひて靈魂をきよめ偽るく兄弟をあいするよりしたがひてまこと潔心をもてたがひにあつく相愛まくし三あんぢらがあらたびらまうまれ

き種よるに あゝ朽べき ざる種まるもちよぎりあく
かるゝ神のいける道よるるり 三それ人いまぞよくきれ
ごとくそれ榮へまべそのくきれ花のおとろ草いよ色それ
なりたい落 三さまざま主のてとぞ よぎりるく存るり。るんぢ
らこの屋つくよる福音いまるもちこれ道るり

第二章

この故よるんぢらまべてれ怨恨まべての詭譎まれ
偽善われく及まべくの謗言をまそて 二今うまきて嬰兒の
ちゝを慕てくるんぢら心をやこの眞乳をもちふべし此よ
てるくるんぢら長てまくれよいてるん 三るんとらあぢをひ
て主をめぐるみほるりれと知たるんまい斯のごとくまべて

四　なほ人にすてられたれども神にえらまれたる貴き
ける石なり　五　なんぢらもまた活石のごとく建られ
て靈の室となり亦きよき祭司となり耶穌キリストによ
て神によろこばるる靈のそなへものをきたらすべし　六　その聖
書にあるに「我えらびたるところのたふとき隅のかしら
をシヨンにおく。これを信ずる者はまどふことなし」
とあるなり　七　これ石ちんぎる爾儕ら信たるものとな
れど信ぜざるものには「工師のすてたる石これ
隅の首石となれる」と　八　また「つまづく石さまたぐる岩
となるなり。かれらは道をおしへざるによりてこれにつまづく」と此

らるゝさだめなるうへ九なんぢらいかでまぬかるゝやある王なる祭司きよめたゝみ神よつけるものよあり。こゝをなんぢらをもて召てくらきよりいでゝその異光にいりたまひし者れのまれ徳をひろめしめん爲になんぢらをえらびたまへるごときものとなしたまへるなり十なんぢらいにしへは民にはらず。されど今は神のたみとなる素なそなきみをうけお然といまあそなきみをうけたり○十一愛まるものよ我なんぢらに勧めんぢらは寄寓のごとく旅人のごとく靈魂にさからひく肉の慾をさけよ十二また異邦人のうちにほりく善行をなすべし是なんぢらをそしりて惡をなす

ふものはとりくる異邦人をしてなんぢらのよきわざをみて誉顧たてまつる日よ神をあがめしめんためなり十三なんぢら主のためよまべて人此たふるところのものよりたふとき上よりなる王尊あるひは悪をおこなふものを罰し善をおこなふものよをはむるためよ王よりつかはされたる方伯よあがたふべし十五そもなんぢら善をおこなふをもて愚なるひとの無知のことばをとどむるこそ神の旨なればなり十六なんぢら自由なるをよろこべ。さまざまその自由をもて悪をおほふことなく神の奴のごとくまべし十七まべて其人をうやまひ兄弟をあいし神をおそれ王をた

ふとぶべし。（十八）僕なるものよおそきをもて主人にあだぐ
ふべし唯よきものの柔和なるものにのみあらで苛刻なる
も服べし（十九）人をしてうくべからざる苦をうけ神をうやまひ
てこれを忍ばしむべきことあり（二十）なんぢらもし過をな
してこれをあだとも何のほむべきことあらんや。
きをなしてしかも善をなしてくるしめらるゝ此をあつかる神よは
まことをらべし（二一）なんぢらの召されたるはこれがためなり。
そはキリストなんぢらのために苦をうけなんぢらをしてそ
己の跡にしたがいしめんとて式をなんぢらにのこしたまへ
ばなり（二二）かれ罪ぬをらさでまたその口にいつわりあるも

彼のごとくしてのごしろばを苦らをそ厲言をいださ
ばだゞ義をそ鞫ものよろまをまろせろ 二 ろまをまれう
つにろうてろまろ此罪をみづろれ此が身よわひわを
つり是ろまろをして罪よおろて義よいろ志めんなめろう
彼のむちうれしよりてなんぢらいやさをたろ 三 夫る
んぢらいめと羊此ごとくまろひなりしが今なんぢらの靈
魂の牧者監督よろくまろり

第三章 妻るものよなんぢらそ此夫よ志だがふでし若を
しくよ志だがざる夫あろををしへるよろび妻のおろる
ひまりてあろぶをん 二 そをろんぢら此敬懼をりてきよ

き行をみるようてあり 三 あんぢのあざやかは髪
をくみ金をかけ赤ころもを衣がごとき外面のかざりまあ
らば四たゞ心におうちのかくれたる人まをも朽ることのな
き柔和恬静なる靈をもて粧飾とせよ。これ靈のかざりは神
のまへにいとあたひ貴きものなり 五 むかし神によりたのみ
聖女もそれをもつとも服くうくのごとくわれ主をのぞみた
る 六 サラ アブラハムをあがうひてこれを主とせるがごと
しをなんぢら善をおこなひ何事をもおそれずばすなはち サラ
の子たるなり 七 夫たるをれよなんぢらも妻をあうこのふこ
とよろしき器とぐごとく理をおがみうくることをもて居こ

生のめぐみを嗣ものとともに生命の恩
られんがために祈禱さまたげられざらんためなり　○八終よ
ころをひとつにし同情あり兄弟をあいし憐憫ありやさしく
ゆるやかなる言語をもちいよ　九悪をもて悪にかへ
のごとき人となれ福をうけんためなり。そは汝らの召
なるも福をつがんためなればなり　十その生命をあいして
よき日をおくらんと欲する者は舌を禁めて悪をいは
ず唇をとざして詐をいはざらんことをせよ　十一悪をさ
けて善をおこなひ和睦をもとめてこれを追べし　十二そは主

の目はなゞしきひとゝ上にとゞまりそれみづから義人のいはうとてのむき主の面はなくをおとすものゝ向ていふのまことのうへ十三なんぢらのもとに熱心なぜんをおこなふべく誰なりみんぢらをそこなふんや十四なほとも義ことをおこなふによりてめらるゝともなんぢら福なるものなり人のなんぢらを威嚇をおそるゝなかれまた憂るなかれ十五なんぢら心のうちに主なるキリストをあがむべし亦なんぢらの裏にあるのぞみの縁由をとふ人にはいつもと畏懼をもてこたへをなさんことを恒にそなへよ十六且こゝろよき良心をもたなぶべし是なんぢらを惡ぢ

ゞキリストよりてなくらるゝ善行をそしるそのゝ自ら
んなあるさをゝしんおゝタ善をおくるゝふよりて苦を
うくること神のみこゝろるゝ惡をおくるゝふよりてく
るしみをうくるよまさるもの十六キリストもひとたび罪のた
めにくるしことを受なゝしきりの不義者よこのさまこと
きろをひきて神よいたらんこゝめるゝ。うよそれ肉體ハころ
されそれ靈ハいのきよたり十九そのまそのゝ靈をそそ獄よある
靈よのべつたへたり二十これ獄よあるまいハむるしハア方
舟をそなふるあひだ神のあれびてまちなまくるときあた
ゞちざるし靈るり。これ方舟よいり水よりてまくハまし

者ハまづろまーてなど八人ありき 二 それ水によりて表ー
たるバプテスマ耶蘇キリストのよみがへりによりて今つまろ
をも救ふれバプテスマハ肉體のけがれをのぞくにあら
ず善きやうしん神をもとむるこころざし 三 耶蘇キリスト
ハ天にゆきていま神の右にいませり。もろもろの天使けんぐ
あらゆるの能なるものども皆これにしたがへり

第三章

キリストもそこころもろのなやみ肉体にくるしみを
うけなまひとびとらも亦それこころをもてみづから
鎧ふべしそはくるしみをうけしものハつみを斷なき
むるりこゝを今よりのち人は慾にしたがひて神の旨に

去りて肉体よりやや遠き餘時を生きんために
既に過ぎこし日は異邦人の心よしとするところに
好色、私慾、沈湎、酔興、酒宴、偶像を事とするにて
足りぬ。汝ら此等のことに放蕩
の極に走らざるによりて、これを怪みて汝らを
そしるあり。五 この人ら生る者と死る者とを
さばき給わんとする者にその言を陳ん。六 ふくいんは死し
たる者にも宣べつたえんとなり。それ彼等をして肉体
によりては人のごとく審判をうくるとも、それ靈にては神
によりて生きんためなり。七 萬物の終りちかづけり。此故に

つゝみてみづからの制をまもることをまもりて祈禱をなべて八
まごとよりも先だちひと篤あひなんをまもることをまもべし。そ
の愛はれみふかくの罪をおもくゆるし九なんぢらたがひに客
こゝろよく接待をなべし十神のさまざまの恵をつかさどるまた
家宰のごとくおのおのそれうけしところの賜をそなふひ
とはいかにもなべし 十一人もし道をかたるをば神のをしへとおも
ひそのたるべし人もし服役をするをば神のたまふちからと
おもひてつとめをなすべし。これ耶蘇キリストによりて事
々く神さまえの歸せんためなり夫さいえとちからは神まき
はて世々にいたるまでアーメン〇十一愛するものよなんぢ

らをこころむる火此ごとき苦を汝らぬこと
よりてなんぢら異とするあやしき 十三 卽てキリストのくるしみを
與をりてよろこびとまた〳〵然ばその榮のなりもらんときも
亦なんぢらよろこびをしこうん 十四 もしキリストの名
ゆゑにそしらるるば福なりそは榮の神
のみたまなんぢらのうへにとまるがゆゑなりキリストをこの
まるよりけがさを爾儕にうけしめらるるなかれ 十五 なんぢらのうち
あるひは人をころし或は盜をなし惡をなし
こるひ或はみだりに人のことに干渉るとして苦をうけ
ゆゑなるさを 十六 もしキリステアンなるによりて苦をあらば

ずることなくの道却てこゝをよりて神をなげむべし 十七 その
神のいへをそしめとして世をさきまもるとき已よいかな
べきう。そしてまもるほそしめさきせうるとき神
のふくいんよりたちさるをもて そは結局いのちぞや
十八 義者このうへそくるをえを神をうやまいざ
るものと罪人いづこるなんや 十九 これゆゑよ神は旨よ
あらびく苦よなよをれい善をなうひてそは靈魂を忘
んにべき造物者よまのにべし

第五章

キリストの苦を右みしく見てなうしをるし且あう
そまんとまもる榮よあづこうることをうるをれまもる長老た

るて主なんぢらのうちにて我とおなじく長老なるものに
まゝむ二なんぢらはうちにある神のひつじの群をこゝろ
主を牧つるさごるに止をえだしてそのきだらかにそるゝ利
をむさぼるなめにあらできに樂てあまゝゝ三またなんぢら託
せらるゝ地をれに主とするべからず羊のむれの式となる
べしゝ四なんぢら牧者の長れにあらわるゝときにくちることの
なきさかえある冠冕をえん五まゝゝ幼者よまゝむ。なんぢら長
老によりたのめ且なんぢらみな相服てけんそんを衣よ。そは
神はたかぶるものにさからひ謙遜をれにめぐみをあたへ
たまふなり六このゆゑになんぢら神のたいのうれ手下に

おれまをひくくまぐくまで期いたらべこの世るんぢうをたうくせんセるんぢうそれ憂慮こころをみる神よゆだぬべく。それは彼るんぢうをこのくりみなまへをるう○八謹愼儆醒るんぢうの敵る惡魔はゆる獅子のごとくへめぐりてのむ屋きをものをたづぬ九るんぢう信仰をこのたくくてこれをふせげそいるんぢう世よある兄弟のおるじくこれ苦をうくるをしらべるう十まぐその恩惠をたまふる神まるそもうるんぢうをくて暫時くうしみをうくるのちキリスト耶穌よあるこのぎりるき榮よいくしめんとそるんぢうをまねきし神るんぢうを全うし堅固つよくして基のうへよおきたまふ

ベし十一ねがはくはイエスキリストの栄光と権力とよ〳〵神にあらんアーメン（
十二）我シルワノハ忠信なるきやうだいなりと思ふ者に因て片言のふみを彼にゆだねまんぢらに勧をなしこの
まんぢらが立ところのめぐみは乃ち神の眞恩なることを
あかし証せり十三バビロンにあるところのまんぢらと共に
えらばれたる教會まんぢらにやまもとを問まれこが子マルコ
まんぢらに安をとくり出まんぢら愛の接吻をもてたがひに
やまもきをとく願はキリストに在にてあるまんぢらまべて
平康あらんことをアーメン

新約聖書彼得前書 終

第一章

耶蘇キリストの忠僕また使徒たるシモン、ペテロより
我らの神と救主イエスキリストの義によりて我らが
受けしところと同じく寶貴き信仰の道をうけしひと
に書をおくる　二願くは神と我らの主イエスを識ること
によりて恩寵と安きのまさんことを　三神その能力
によりて生命と敬虔とにかかるまでその榮をもて
我らを招きたまへる我らの主イエスを識ることによ
りて凡てのものを我らに與へたまへり　四また神その
至大なる且とき約束をもて我らに與へたまへり此

ハるんぢらをしてこれやくそくようて世にあるところ
の慾より敗壊をまぬかるゝ神より性質をうけしめんなめるり五
こゝより故にるんぢら勤てもんろうより徳をくゝへ徳にもしき
をくゝへ六知識にそんせうをくゝへ撙節にんたいをく
もんへ忍耐につゝしみをくゝへ七敬虔にきやうだいより睦を
くゝへ兄弟のむつみに愛をくゝふべし八これらのそれ若
るんぢらの裏にありていやまたときハるんぢらをより
主いゑスにキリストをしるこゝろに怠ることなくまた実をむ
すばざることあきにいたらん九これらのそれ欠きものハ
盲ひより遠みることあたはず且それふるき罪をきよめら

し、こゝをもて、なほ十こゝろを用ゐて兄弟よ、つとめて、なんぢらの召と選とを堅固せよ。そしてかくのごとくなすときは、なんぢらいつまでも躓くことなくして、主なる我らの救主イエス・キリストの永遠の國に入ることを豊かに許されん。

○十二これゆゑに、なんぢらがこれらの事を知りて、いま與へられたる眞理に堅くたつ上は、常にこれを汝らに思ひ出でさせんとして、なほこれらの事をおこたらざるべし。十三我この幕屋にをるあひだ、なんぢらを勸めて、これらの事を思ひ出でさせんことを當然のことと思ふ。

へり 十四 そのうまれの主い正にキリストの
まへるごとく我ぐまくやを脱離られたるきをあらはぞ
るゝ 十五 うまれまへるんぢらをしてそぐ世をきらんのもの
常ならざるのことをおもひいだきしめんことを勤
ら前よるんぢらのうまれの主い正にキリストの前
の顯現なまふらことをつぐるよ巧なる奇談をともあざりき
うまれまへ親しくその大なる威光をみしものなり 十七 至大な
る榮光のうちより聲ありてこのまを呼あいてぐらろよこの
るふうぐ愛子ありといへるこれ時のまへ神なるもの
尊き榮をうけなり 十八 うまれまへうまれと聖山よあるこ

ときこの天より いでし聲を きけり 尤殊よ よけん あかつき 確言 ことばあり。これ こころ ぐらき ところ て ともる燈の ごとき ものなり 夜の あくる まで 明星の あんぢらの心に いでん ちよ いづる まで こころを つくりみを 善き 二 先 すゝめよ あかつき 聖書の さぐて のよげん 預言者 おのれ意を とき こと ふ聖書 預言 ひとり 人意 よりて いでし あらず 神よ ぞくする 聖人せ いれん よ感じて そのたり そのるもの あり

第二章

むかし 民の あひよ 僞の よげんど や ありき その ごと くあんぢら に も いつわりの 師 いでん。ふたら ん 淪亡

よいわる異端をつたへ且おの〳〵を贖あがなひを主とせざるして
速るほろびをみづから取べし二又おろかの人こゝろに
好色よるべからん眞道こゝろによりて謗讀をうけん三これら
貪心よりて造言をまうけうんぢうより利をとらんとす。
このゆゑに此刑罰にむかへよりさだめおのおのおそるべし。
られほろびへ寢ざる神さきに罪を犯せし天使をゆるさず
らまを地獄にくだしこれをくらきあるにおきらまを禁
錮このゆゑをもて審判のときまでにめおかまくり五また古
世をゆるさず洪水をもて神をうやまはざる世をほろぼし
なり義道をつたふるノアの一家八人をまもりたまふソドム

とゴモラの邑をほろぼしさんと定られをやきくゝ灰とし
ち此神をうやまはざるその鑒とるへし七唯ただしき
即あしきその淫亂のおこなひを恒ようもへる者をさま
へうハこれ義人これらのことを日々その不法のおこ
なひを見聞してれの善なるしき心をいためしより九こゝ
のごとく神をうやまふものを患難よりすくひ不義なるそ
れを審判の日までまもりてらをを罰し十別てけがれたる
情慾にあゆかひ肉のよくをおこなひ主たるそれをかろん
じるものを罰するらことを知なまふより此ともがらハ膽ふ
とく自放なるものにて尊者をそしるらことをおそれざる

あり 十一 天使い このまろまきり大なる權威と能力をそなと主のまへにこのなふときそれを詬てうつなふることをせず 十二 うまろい執きてこころさるなめまうまれたる無知けものごとく知ざるところのことをそこまそれ邪曲よろこほろびきて不義のむくいをうけん 十三 このまろい白晝も酒食をたのしみとする珀あり瑕あるうんぢるとともに筵をなづくるときその詭譎をたのしみと せり 十四 この まろ目は淫婦をみたし罪悪をやめぬ心のこのえろざるその まどもし それこころむきぶりは慣こなのろわるべき子輩あり 十五 このまろ正道をそるのまそ迷はりボンロの子バラムの

みちこれなりへり バラムハ不義の利を
十六 この主その不法のなめことがめられる語ことなのをざる驢
馬ひとの聲をきしてよげんしやの狂をとめたり 十七 此と
もがらハ水なき井なり 狂風はおそる 雲なり 黒暗このうらの
のなめこのぎりなくのこさり 十八 そハこのうらハ矜誇なるむ
なしきことをこのなり肉慾と淫亂をもそ彼まよへるものゝ
うちより辛じて脱離なるものをいざなふ人をなり 十九 又これ
らハこらさる自由をあたふることをしてみづからハほろ
びの奴隷なり そハこのなることをしハ勝ものゝしもなれを
なり 二十 このゆゑにめしつさるの主なる救主いエスキリスト

をあらそふまでに世のけがれをのがれ復これにまとはれてまたかの
このかたるところはそれ後のありさまは前よりもさらにわるくなるべし
三 うたがふべき義のみちをあきらめて尚そのつたへられしところの聖命をまもらんよりは寧ぎよみちをしらざる
を美とすべし 三人 くりきたりてそれ吐たるものをくらひ豕あらひきよめられてまた泥のなかに臥といへる諺はまことなるかな

第三章 愛

これまでのごとき今これ第二のふみをなんぢらにおくるこれ兩書をとおしてなんぢらの眞實なるこころをそげまし
ときよきそれ預言者のことばとこれ

んたちの使徒たちが、つぎに主である救主のいまーいめを
記憶せんとて、三先きだちて、此ことを予告べし、末日い
たらば戯謔者いできたりて、おのれの慾にしたがひて歩み
四主のやくそくいづこにありや、列祖のねむりしより以來、萬物その開闢のはじめの
ごとくなることといえん、五このものらは神のことばによりて
むかし天あり、地の水より出でて且水によりて立ちたることを
よろこんでいまーに、此世もまた水に淹されてほろびたることを知を
こうしてまだ、六その神はその命をそむきたる天と地をなくさ
へことばを火もてやどんために神をうやまわざる人をさば

きまろ淪亡の日まそのこせり八愛まるそれよるんぢろこ
の一事をろぐざるこそのろを主ゐむのそへ一日ハ千年のご
とく千年ハ一日のごとくんを主そのやくそくまもりとこ
ろを成よおそきハ或人のおそしとおもふがごとくあ
らん一人のはろぶるをものそみなもろを衆人のくひてろ
おめよいそんらをのぞこてそれらをるのく忍なまふ
るり十されと主の日のきたること盗のまるきたるが如る
らんそれ日ろん天おろひまるる警ありてきり體質こそぐく
やけくぐき地とそれ中にあるもの皆やけつきん土斯のご
とくまべてそれもの銘さきん然バるんぢら神の日ぬきたるを

待こうまをもとみやうよせんことを務めこのよきよきく行をえ
神をうやまふことをおもべきや 十二 神の日ふみ天をえくぐ
る體質やけとけん 十三 さもどうもろいそれ約束よりてあ
たらしき天となたらしき地をのぞみまそう義それうちよ
なり 十四 愛まるものよろんおろまぞよこまをのぞみまてぞ
珀るく疵るく主のまくよ安然よあろんことをつとめよ 十五
まれどもろの主はろまろを永あのびたまへいろまくの救
とるろをおろべし。これらはあんまる兄弟パウロもそのまた
へらまく智慧よおなびひ曾てこれことをろんおろよ。いき
わくまり 十六 彼そのまべくの書もこのおとよつくのた

主ゝゝ彼のゝみ此ゝのごとく難明ゝゝゝゝあり無學ゝゝ其
心のゝゝなくのゝゝざる者ゝゝゝの聖書をゝひとゝゝがごとくゝゝこと
をも强解てみづゝゝゝゝはろびにいたるゝゝ十七愛ゝる其よ
るゝゝちゝゝ預ゝゝをゝゝもつゝゝめよ惡者のあやまりにさ
そはれてゝ其堅固心をうしなふことなからんをゝ十八ゝんちゝゝま
たゝゝゝゝの主ゝゝる救主いゑすキリストをゝゝんことゝゝま
たゝゝその恩惠をゝることをつとむべし。ねがはくは榮光いま
ゝゝのちもゝゝゝ歸しそうぎゝゝゝゝんことをアーメン

新約聖書彼得後書終

使徒ユダの書

耶蘇キリストの僕ユダ、ヤコブの兄弟、ふみをめきまをたる者、そもそも父なる神に愛せられ且いましにキリストの爲にまもりられ、乘よばれたる人々に、ねがはくは、いやますます憐と平康と仁愛のまさんことを。三愛まるる人々よ、われこゝろを熱してすくひに與るところのまったきすくひにことをなんぢらに書おくらんとおもひおもひしが、今なんぢらに勸めをおくりて聖徒が一次つたへられし信仰のみちにたゝかふ力をつくしてなほ勸むることをえざるをえず。そは神をうやまらざるもの、神にめぐみをこのゝく

色慾をほしいまゝにするに縁となるゝ惟ひとりの主なる
神とゝまるの主い匹にキリストをまるるの數人ひそろよ教
會よりうたまぞるり。このまろがこれ刑をうくることんさ
だめらまたることい昔よりあらこゞめもるさまたり 五
るんぢら素よりもまることるまど我るほるんぢらよれ
るひいださせんとまることゝ主それ民をエジプトの地よ
まゝくひいだせゝのち信ぜざることをほろぼもなまひ
ゝこと 六 おのが本位をまもらゞゝて其をめるところ
をもるまなる天使をこのぎりるくつるきて大なる日ぬさぞ
きまで幽暗のうのまものをおきなまひゝこと 七 ソドム

ゴモラおよびそのまちを此邑このまちと
ひとしく姦淫を
ほしいまゝにし男色をおこなひしによりこのさばきをうく火のさばき
うけて鑑戒となりてそこにあり八此いめみる
もまた肉體をけがし主なるものをかろんじ尊者をそし
まつれそれ天使のをきミカエル惡魔とモーセの屍をあらそひ論ぜしとき彼をはこゝまをそしりてうたんさばき。
たゞ主よんぢを責べしといへり十然よこのまことゝもあらざる
ところのまことをそしりまつる。それ本性あるところの無知けもの
ものゝごとくおのれ彼儕いこゝまをそこなふの
をほろびせり十一禍なるこのをうまころもカインの途にゆき

利のためにバラムの迷謬にもせまるコラのさのごひごとくにそほろびたり 十二 このまろもるんぢらも愛のふるまひに磐るり。もぐこのるところるくまりのその筵席にあづかりてみづからを養ふ。このまろは風にめそろる雨るき雲このまでまろれ根株をぬろる果のるき秋の樹 十三 それ穢をうきいだす海のあろき浪るり。こまでのためにも黒暗をこのぎりるくとめれるまたり 十四 アダムより七世にあるまろる エノクこれらのごろのことを預言していひけるみよ主それきよ紀萬軍ともにきたりて 十五 衆人をさばきまべて神をうやまはざるものの神をうやまはざるひ

志あしきつぐと神をうやまはざる罪人の主よきこのくらひてこのことまるまぐくのあしき言をせめたまふべしと云ことのともがらい怨言を云足ことをこのざるものおれ慾よきものにひてあるきその口いはくることをこのかな利れたためよ人よこのふをのおり十七愛をるをれよんぢらこのぢ主いゑにキリストの使徒たちの以前このかりし言をおもひいづたべし十八即ちんぢらよこのかなくいふ末期よりなぎけるもれおこり已がよこてまるる慾よおたごのひくあゆまんと十九このまこいみづこのこ區別をるをのまた肉よつけるものよしそ聖靈のるきをれおり二十愛まるを

よるんぢろその徳をいときよき信仰のうへに建せんをいよ感じそいれ三みづこころをまもりて神の愛のうちに居てまろの主い正にキリストの永生をたまふそのあそれみをまろべし三このまろの中なるそのをべ論じて口説つぐまじめ三あるものをべ火よりとるをいだしして救あるものをべ畏懼をそなそもむべしその悪ハにくの慾よそみたる衣までもにくむことをせよ○三論てまろの救主なる獨一の神さまそもろんぢろ放つまづろせじと保るんちらをしして汚るくよろこびてその榮光のまへなろことと得せしむるをれハ世のそじめまへより今までのちも世々

このきりおくつねまでの主いやしキリストよりて榮と
と大能と權をなどもなまふるなりアーメン

新約聖書猶太書 終

使徒ヨハネ第一書

第一章 夫われらが聞きて目に見れんころ觀わが手さはわーとあろれとそれもなもも元始よりあるーいのもれ道我なんちらはたふこの生命をでよあらはれたるをわれらもれ証をしもなもも原もくとやもよあるーとめまてそれらはあらはたるこのきをなきくあろれ此いおも我なんぢらは傳ふこわれら見りそろ聞ーそろ我ふんぢらはつたふるもなんぢら我それらと同心をらしめんためなりわれらも父およびその子い匹をキリストくそもたを四それらおの書をこうきおくりてなんぢらは喜樂我みら

めんとして神も光なりもしーのくらきところなし此をわれらうけよりきくてまことなんぢらにつたふる告なりヤを思ふれら神とさまなりといひて暗をあるくをわれらのいふところわいつわりをしーて真理ばおこなふあらばそもしー神のひかりをあるがごとく光のうちばあるきをわれらたがひに同心となる我得ふるその子い血をキリストの血をあてきよめたまふなり我ら我潔むハも右罪なしといふもおれみづからおざむけるまて真理われらにあるなしルを思ふ我もしわれらのつみをいひあらはさば神ハ信實なる公義なるものゆゑにわれらのつみをゆるしまた、ての不義より

わもろ誠きよむ事一十も罪誠なくしてもあとなしといい
もし神誠識者とするなりその道もれるまあるなし
第二章 その小子よそれらのこと誠なんちらに書くる
るはなんちら誠して誰も誠犯ることなからんためんたれも
もし人ありて誠とのせバわれらのために父のまへに保
惠師ありそはも義なるいエスキリスト二これもわれら
汚みの挽回祭物なりたゞよりわれらのみならばまた
く世のすべてのためにもなり三またこれをもてその
識誠まもるをおれよりてこれ誠識とみたるを暁得
四われこれ誠をれをとのひてそのいましめ誠まもらざる

ものハ誠者なり真理そのうちにあるなり五もしその道
ハまことのハ神ハあいまるの愛まことなるその裏よりハ
く完全ハこのよりてそれらこがれまあるこうハ
らさうる六彼まとるといふものをこれの行ハおくあり
むまきなりセ兄弟よもれなんぢらまあくうしき誠をこうき
おうるまあうぜ。そるもしもしめよりなんぢらのあてる善
誠なりこの始るきいまハめい始うをなんぢらかきこと
ところの道なをハさられどわかなんぢらハ書もくるとあろも
まくあくうしきいまハめなりまた言そこれまおいてもな
んぢらまあいても真實なをそハ今くうきそやまぎてま

ことの光てれをなり　九ひとのまことをることいひてその兄弟を
にくむものをいまなほくらきをるなり　十兄弟をあいする
るものは光よをりておらずれ彼つまづくものなきその裏よ
なし　十一きやうないと憎をれいくらきをるをて暗よあるきて
そのゆくところもろ彼をらぬ。これその目をくらきよこもうさ
るれをなり　十二小子よ。これこのふみ彼なんぢらよかきおく
るハなんぢら主の名よりてはみ彼ゆるされたるよる
十三父老よ。これあれ書彼をんぢらよかきおくるなんぢら
元始よりをるものを志るるよる。壮者よ。これあの勝るをを
んぢらよかきおくるをなんぢら惡者よ。うてるよる。孺子

よろれおのふるをなんぢらにかきおくるをなんぢら父
をも老よるをれこの姫をなんぢらにおくる
しかなんぢらをもとめよりよものをおれるによりてなり
うきものよわをおの書をなんぢらにおくるしかなんぢら
剛健こうの神のことばなんぢらにもろろ有ておしきものの
に勝るによりてなり十五おの世あるひとこの世にあるものを
愛そのうちもあるなし十六あるよそ世にあるものをすべて
も肉體のよく眼目の慾もよく勢よりおこる驕傲こともろ
な父よりいづるにあらず世よをのこるものなり十七この世

くそれ慾とは逝るものまた神のわれをおおうものは永遠にいまるなり　十八小子よ今は末の時なるを聖世キリストの敵になるものきたらんと聞しごとく今もでもキリストの敵になるものおおくこれによりて今は末の世なるをしれるなり　十九われらの中より出たれどもわれらの属なるにあらざるなりもしわれらの属なりしならばわれらとともに恒にいまるべしかくのごとくなるはわれらの属ならざることの顕れんがためなり　二十なんぢらは聖主よりあぶらを注がれて一切のことを

こる二まれなんぢらの真理をおしゑるよりてはの書なうきおくらるあらばなんぢらまことを知うちそてのいつりを真理よりのそおるうと知おれるをまつてなを三誰うこれ謀者いふをといひてキリストとせぐるものなく父と子とをまをむものはをもちキリストに敵けるものなを三おなじ子なくもむものは父をもをん子なくるものは父なをもをを三るんぢら始よりきけるものをふんぢらの裏よをらーむ亜しもしもしめより聞まのなんちらのうちもよをらばなんぢらは子ともーくる居ん玉おれ主のわれらよ約束ーたまくるやくそくまなをもうきりなき

生命あるこれをなんぢらに誘惑ものこれをなんぢらに
と我なんぢらよこのきむくれをなんぢらは主よりそこに
まてるあぶらその裏よりまれるゆゑをしくを人
わうこるまもよそのをぐそのまを我なんぢらをも
しふこう真實なりて虛假なりなんぢらあぶらのをしふる
ごとくつねに主よをるべし 小子よ主よをるべし。
その顯現ときよりわらおそるることなくその降臨ときに
そのまくまもつることなるうんためあり なんぢらは主
のたゞしきことを我をるよりて公義我おこなふものみ
な主のうむところたるをもるをるなり

第三章 なんぢら視よ。われら稱られて神の子たることを得
これもつぱらわれらを賜ひしその愛ぞ。世はもつて我らを
識らざるによりてわれらをも識らざるなり 二 愛する者
よ、われらいま神の子たり後いうんいまだあらはれざれど
あらはれんときわれらかれのごとくなるべきを知る神を肖
れるその眞狀を視みるべくなればなり 三 おほよそ神にこの
望をいだくものはその潔きがごとくみづから潔くす 四 罪
をなすものは律法をも犯すなり罪は律法を犯すにほかあら
ず 五 なんぢらの知るごとくかれは主のおのれらの罪を除

みだらの罪なし　六　おほよそ彼に居る者は罪を
犯さず凡そ罪を犯す者は未だ彼を見ず
又彼を知らざるなり　七　小子等よ人に
惑はされざるやうに心を付けよ義を
行ふ者は義人なる基督の義なるが如
く義を行ふものは惑魔より出づ　八　罪を
犯すものは惑魔より出づ惑魔は始
めより罪を犯せるなり神の子の顯
れたまひしは惑魔の工を滅ぼさんが
ためなり　九　凡そ神より生れたる者は
罪を犯さず神の種その裏に在るな
り又罪を犯すこと能はず神より生
れたればなり　十　是に於て神の子と惑魔
の子とは顯はれ凡そ義を行はざる者

なおしたもう。おおよそ義絶おおなるときはその兄弟絶あのせぎ
るものはみな神よりいでしものあるにより十これらのたぐひな
相愛(あひ)すべきなんぢらのこころのよりきたりしところの命令(めい)
なり十一カインはなんぢらおおなれ。このものはおしきものの
よりて出しものにてその弟絶おろせり。なんゆえにこれ絶殺せ
しや。おのれのおこなひはやまろいおしくおこなひしその弟
ところいたずらにこうそしまよる十二我きやうだいよ世なんぢ
ら絶にくむともおどろくおこなかれ十三われら兄弟絶おいて
もそこよりもそこよ死をいでて生にいたりしことを絶らうらう
しるきやうだい絶愛せざるものは死のうちにとどまる十四おお

よりて兄弟(きやうだい)に惜(をし)むものは、いかでか神(かみ)の愛(あい)、その人(ひと)に在(あ)らんや。
小子(こども)よ、我等(われら)言(ことば)にも舌(した)にても愛(あい)せず、ただ行(おこなひ)と眞實(まこと)とをもて愛(あい)すべし。
これによりて我等(われら)の眞理(まこと)に属(ぞく)するを知(しり)、また我等(われら)の心(こころ)を神(かみ)の前(まへ)に安(やす)んずることを得(え)ん。
我等(われら)の心(こころ)もし我等(われら)を責(せめ)ずば、神(かみ)の前(まへ)に大胆(だいたん)あり、
また我等(われら)の求(もと)むる所(ところ)のものは、何(なに)にても神(かみ)より受(う)くることを得(え)ん。これ我等(われら)その誡命(いましめ)を守(まも)り、その目(め)の前(まへ)に喜(よろこ)ばるる事(こと)を行(おこな)ふによりてなり。
その誡命(いましめ)とは、我等(われら)その子(こ)イエス、キリストの名(な)を信(しん)じ、かつ彼(かれ)が我等(われら)に命(めい)じたるごとく、互(たがひ)に愛(あい)することなり。
神(かみ)の誡命(いましめ)を守(まも)る者(もの)は、神(かみ)その人(ひと)に在(あ)りたまひ、その人(ひと)また神(かみ)に在(あ)り。神(かみ)が我等(われら)に賜(たま)ひし聖靈(みたま)によりて、我等(われら)の彼(かれ)に在(あ)りたまふことを知(しる)なり。

やうんぞ 二 われらが心 われら試せわが神それ
らがおこなひよりもなほ大なるよりもすべてのことを
たゆたふるなり 三 愛するものよ われらがこころみづから
責ることなくわが神よりうひることのゆゑに愛
かつわれらがをる所を求ることころかのれよりうくそれ其
ゆゑは試みをへてその悦ところある証をなり 三 おか
誡はもるをもてわれら神の子ら愛をキリストの名を信じ
のわれらに命じたまひしごとくたがひに愛ることなり 四
神のいましめ証もるものはそ神にをりかれもまたかれ
にをるわれらその賜ところより靈によりてをるをもそのをれ

らと居ることをふこゝろ紙をされを

第四章 あいするものよ。まづ、てのれい靈をなんぢるなかれ。それ
れい神よりいづるや否をためしみるべし。おほくの偽よげん
じやいで、世にいれり。二 おほよそれい靈をキリストの肉體と
なりて臨りたるをこゝろ紙いひあらはせる靈をこゝろみよりのび
られよりて神のれい紙なる者。三 おほよそ耶蘇キリスト
をいひあらはさゞる靈をかみよりいでたるにあらず。これ
ちキリストを敵するものの靈なり。なんぢらのきゝたらん
とせることをなんぢらぎきたるところなれば今もでに世
にをれり。四 紙こゝろのこどもよなんぢらは神よりいでまたこれら

ま勝こと紙えくう。そんなんぢうの裏まをるものゝ世のうちまをるものより大なるまよりてなり五うれうを世よをいでゝものゝあれべそのいよところも世よをいでゝものゝふべきことまを出て世人ハ出まきけまをれうを神よまいでくれ神紙出るものゝわれうまきし神よりいでさるものゝまれうまきうた。出れまよまて真理のれいと迷謬の靈と紙出るなり七愛まるものまよわれうたゞ八まおひあいをまて一おいい神よりいづれまなりおそまよて愛おるものゝ神ゝまりてうまれまる神紙出まるなをゝおいあきるまいゝ神紙一ら紙神もまなるも愛なれまなり九神そのうみ

まへる獨子を世よ[1]に遣したまへり[2]茲にて[3]かれによりて生
命を得せしめ[4]たまへる神の愛われらに顯れたまへり[5]
十 これ[6]われら神を愛したるにあらず神われらを愛したまひ
て我らの罪[7]のために[8]その子を遣して挽回祭物[9]となしたまへり[10]
これなり 十一 愛する者よ[11]神かくのごとくわれらを
愛したまへるならばわれらもまた互に愛しあひをべし[12] 十二 いまだ
神を見しものなし[13]われらもし互に愛しあはば神われらに居たまひ
われらのうちにありてその愛われらのうちに全うせらるるなり 十三 神
その靈をわれらに賜ひしによりてわれら神に居またわれら

父さきつそれ子なるをもつて世の救主となせるを。われら
もてよまれをみるり。いまその證なるあり 五 あれよそ耶
蘇なかみの子なりと認めあらゆるものを神うけるをそ
れ神ともる 六 われらのうちある神のもてる愛とわれらもて
ともそて信じたかみをもちもち愛なそ。おほよそあんまもる
ものを神ともる神まこうれもる 七 このくのおほくもれら
のあいに全備なえて鞫日もおそ迫なるをむそ、主のごと
くわれら世もあれをなり 八 あんのうちに懼あらこととなし
まつうき愛をおそれ除そんおそれを苦をもてそ。おほよ
そおそそもも 九 愛なまつたうせぶるなり 十 われら神なる

おいそるハこれまづそれら我愛をそるによれを
い神なおいけをいそくそのきやうだい我しくむものハ
れ誡者あり。そでよみるやまたよ兄弟あいせんでいま
ご見ざる神我いうでおいせんや三神我あいしるものを亦
それきやうだい我も愛をべし。このいまめはわもらうを
より授られたを

第五章

おなよそ耶穌をキリストと信ぞるものを神よりそう
うまれふるなり。おわよそうむるの我愛をるまれハまたそ
の生れしものをおいしるなり　二　まれらもし神我あい
くそれ識をまもらむをわれるによそわれらのものの兒女をあ

いもるとしる 三 神のいまし給ひ給ふもるをこれもるかいも神
をあいもるあをそ誠をかよくしば四おほをそ神よよを
てうまるこものはよる勝われる給しそ世よかよくしむるも
のはそれらぶ信なを五うれくのよく世よかよん耶蘇給かみ
の子こもんぞるものまなるまや六神の子はみぢと血をを
て臨まるもいい出をキリストありたく水のをなるしばみぢま
まるまを兼七あるし給あをもまれは靈なを。迫いた真實なれを
ありは證をれとまれを三をるあるも靈と水と血あはみうの
をれの歸をるところく一なりかるれくをし人のあるし給
うくるるまは神のおくしもさるま大なる。神のおくし

七 此なり。もなもその子のことあなせる證なり 十 かみを
子抵ちんじるものもその裏にこれあかしなり。神抵ちんぜ
ざるものをかみ抵謊者とせり。それ神のその子のことあか
しせる證をちんせざれをなり 十一 かみい永遠いのもとをまて
われらにたまへる生にもるもその子にあることこれその
あかしなり 十二 神の子抵もつものもいまも抵もその子抵
もたざるものも生抵もつ。 十三 われかみの子抵名抵ちんを
るなんぢらにかきおくるいなんぢらにかか
きりなき生あることをしらしめんがためなり 十四 また
れら神の旨にのなにるあるを求をうれらるをうべ聽ん。これ

われらこれをむこひをおこなひ信ずるところなり 主をすべて
そのものをもむるともろもろ彼のきくことをしらばわざをもむ
るともろもろ彼これを得ることなほまたあるあり 主を名人その
きやうざいの死をいたらざるつみ彼をうけ彼見むいのりて
死をいたらざる罪彼をうけものを生彼あたふべし死をいた
らする罪ありわれこれがためを祈求といへども主をあざけその
不義をなすをざれど死をいたらざるつみあり 大をあざけ
神をよをてうまをとるをもつ罪彼をうけることなかれ
らてしこの神をよをてうまをとるものをみづうち守のおそ
しきものをもて鋼をもて彼せるをもて主をれらは神をつき。

擧世ハなしきものに服ける我われらハしる二ま
た神のみ子きたりてわれらに真理者我らるの智慧をあたへ
をるわれら真理者にあり。またその子イエスキリスト
にありこれをまことの真神また永生なり三小子ら
ぐうざうをさけよアーメン

使徒ヨハネ第二書

長老えらびをこうむれるクリアとその子どもへ我おくるのもれまことによなんぢら我おいに第われのごとくなりしおみよそ眞理我もれるとめをまきみるなんぢら我愛せり二なんぢらの我愛るもおよびわれらの裏さありてはねよもなれざる眞理さよりてなり三なんぢらへ實と愛とをもてそ神をなりち父およびちゝの子い迄をキリストより恩寵と慈悲と平康と我らく與へ四もれなんぢらの子どもものうちわづかうけしとおろし父の命のおとく眞理よあるこうひてあゆむものゝおる我見てはふをよろこべり五クリアよわ

れ今なんぢらにいむたがひにあひ愛し奉しおはあらざ
きいまひとめをのきおくるさあらば即ちそのようわれら
が有ざるものなり六われらこれの誡よきたがひて
ゆむをもれをなをも愛なりあんちこのもとめよりきた
ごとく愛よあゆむいまれをもいまひとめなり七そは惑
さそふものおほく世よいで耶蘇キリストの肉體となり
てきたらざるたまくるらしいひあるもさば。このまやひさ
そふものいまおもキリストの敵なれをみよ八なんぢら
れらがはさらきとろ労をむなくせん成全むくい
拡えんのさあらさみふうう慎奉一九おほよそキリストに教さ

をらばして人ばみちびくことめを神をそこにキリストのばーへこをるものハ父おとゝび子をもてをも十人もーさのをしへばもらばしてなんぢらさきそらもこれば家こいるべおとなかれこれをやどうれとりふことなくれ十一これを平安をりふものを共にその惡行よくみをるなを十二これおほ多端あれども紙と墨とばもてなんぢらさこうきおくるを欲ねわもらのよろこびの充滿せんこめよなんぢこいるとり口ばむうへくこうふらんおく望む十三なんぢの姉妹をるこもえらびをこうむをるものゝ兒女なんぢらを安をとくこもアーメン

使徒ヨハネ第三書

長老あいするガヨスもるふたもとつまことにて愛(あい)するやまろ
よ
しるものう書(かき)おくる 二 あいもるものよ
なんぢが靈魂(たましひ)のさ
かえるごとくなんぢまたそのことごとにきそ隆盛(さかん)にまた
康強(すこやか)ならんことを我われねがふ 三 兄弟(はらから)きたりてなんぢが眞(まこと)
理(みち)をたもてることにつきなんぢが真理(まこと)にあゆむことを
あかしたれば我われもまたよろこべり 四 わが子(こ)らもの
もことに我あゆむをきくよりおほいなる喜樂(よろこび)はなしー
五 あいもるものよなんぢい寶旅(たび)するきやうだいうまでを
べておこなふに忠信(まこと)をもておこなへり 六 うれら教會(かいくわい)のま

へさおかしてなんぢの愛とおかーせそ。なんぢもし神さうふ
ふ。くこのれらの行路なたをけでそのおおきみところ善を
まヤこの色らハ主の名けさめまいそく異邦人よりなよ
うけざれをなりハもれゆ名さまれらこくれごとき人なた
けく。そいわれらもうれることともに真理さもらくを
のとならんさめなり九わをさきさ書なけらくまいまおく
まーぐうれらの中まおいくく長たらんことをこのむデヲテレペス
まれをうけさりき十まれもーゆうそその行るところなこ
ころさ記おうん。これを惡言なもそみだりさまれらを論ト
うこおれなもて足とせをみふうう兄弟なうけばそをとう

けんとするものなればさるものを教會と名をつけたり 十一愛
するものよおくさならんなかれまことも善をおこなふものは神より
なれば惡をおこなふものいまだ神をみたてまつらず 十二デメテリヨは
ひとびとと真理とよりこれをあかしせらるまたわれらも證をそへ
たりしのあかしの眞實なるをなんぢ知れり 十三我なほおほくのことを
なんぢに書おくらんとおもへども筆と墨とをもてつきおくる
ことあらまほし 十四遠からず
なんぢに會て口をむかへこころよりこと談望なんぢが
ために平安あれかしの友なんぢの安泰をこひ請なんぢら
これこのはりて友なるものどもをやまきを問へ

使徒ヨハネ第一二三書終

ヨハネ默示録

第一章

イエスキリストの默示ゝたまひしところの耶蘇キリストの默示ゝたまふそれ神このまをしてすみやかに速ことおこるべき事をそのしもべ僕どもに示さしめんとて彼はなまひしところのヨハネ耶蘇キリストそれ使をもて僕ヨハネにこれをおくりて示しなまへり二ヨハネ神のことばと耶蘇キリストの証とそれまのあたり見しところのすべてのことをあかしをこの預言をふみを讀それとこれをきゝて其のうちに記されたるところを守ひとびとは福なり。そは時ちかければなり○四ヨハネ書をアジアにある七の教會におくる願くは今いまし昔いまし後いまさんとする者おほびそれ寶座のまへの七の靈

五 および忠信なる證者なれるのより首ようまれしものの天
下の諸王の君なる耶蘇キリストより爾儕めぐみと平安をうけ
よ願くはわれらを愛しその血をもて我儕のつみをなうひ
潔六 われらをして王となし祭司となして其ちゝの神なつ
けしめるものに榮光と權力よ、このぎりなくあらんことを
アーメン〇七 視よ、かの雲にのりて來たまふ、すべての目これを
見ん、かれを刺たるそのものも亦これを見べし、よの地の諸族こ
ぞりて爲によるびゝんアーメン八 主なる神いひたまふ我ハ
アルパとりオメガとり始とり終なる全能のものなれり〇九 われヨハネ即ちなんぢらの兄弟なん

ぢゃと患難をともにする耶蘇キリストの國および忍耐をともにする者さきに神のことばと耶蘇のあかしとのために パトモスという島にをりて十 主の日に靈に感じてラッパのごとき大なる聲のうしろにあるをきけり 十一云ふ なんぢ見ところを書に書てこれをアジアにあるエペソ スムルナ ペルガモ テアテラ サルデス ヒラデルヒアラヲデキアの七つの教會におくるべし 十二ここに身をかへりて我にかたりまる聲をみんとしてかへるに身をかへせば金の七つの燈臺またその七の星のまんなかに人の子のごとき者ありてその身に足まで衣をきし

胸よいきんの帯をつのれ 十四 首と髪とんろきこと羊の毛
のごとく雪比ごとく目ハほのほ比ごとく 十五 なりハ爐よりくる
眞鍮のごとく聲ハおほみづの響比ごとく 十六 右の手よいる
いつの星をもち兩双のとき剣それ口より いづ面ハはるを
だしくこのゞやく日のごとく 十七 我こまを見しとき死るごとく
ごとくその足下よたふれたり彼みぎの手をわれ按て
いひけるハおそるゝ勿れわれ首先なり末後なり 十八 われハ
生者なり前よしにしことなり視よわれハ世々にいきるなり
生んアーメン。われハ陰府と死との鍮をもてり 十九 爾みしと
ころおよび今あるところれこと後あるところれ事をかく

まべし　三　そもそも爾がみしところ此ところが右の手此ところつ此
星また此ところつ此きんの燈臺の奥義なり　七此ほしいところつ
の教會此使者なり　つ此とふだいいところつの教會なり
第二章　なんぢエペソ此ゆうくうこの使者よこのきわくる
べし　右の手ところつの星をとり又ところつの金此とふだい
の間をあゆむもの斯のごとくいふと　二　曰ところをなんぢの行
爲とはねをりと忍耐とをなんぢが惡人をいるこ能そぎると
爾がさきよ夫みづからの使徒なりといひく實いまとこあら
ざるものを試てそれいつわりを見なるいしこ　三　爾
かにんなしまることこそ名のために患難をおのびて倦

ざり〳〵こゝろを〳〵る四さもまど我なんぢよせむべきことあ
ま爾はじめ此愛をはなれたり五なんぢ何處よりおちし
このをおもひ悔あらためて初のつとめをおこなへ然ざり
爾もし悔あらためざれば我なんぢよいたり爾此ところだいを
其ところよりとりのぞかん六さもまどもなんぢよ一のとる
べき事あり二コライ宗の人此つとめをにくむことをわれ我も
これを惡めり七耳あるをれい靈の諸教會よいふところ
をきくべし勝をうるものにこれ神の樂園よある生命此樹
の實をくらふことをゆるさん〇八爾まさスムルナのけう
くわいの使者よこのきおくるべし首先いやはてにして死て

まれ生なるものは斯のごとくいふと九日ふるまんぢの行爲とくるしみんとまづしきとをわれ資をといへどもなんぢは富まされまれ夫みづからユダヤ人なりといひて實はかうざるサタンの會のものら褻瀆のことばをわがまり十爾まさに受んとする苦をおそるるなかれ惡魔まさになんぢらの中にものを獄にいれそなんぢらをこころみんとてなんぢら十日のあひだ患難をうくべし。なんぢ死にいたるまで忠信なるを然はふるは生命のかんむりを爾にあたへん十耳あるものは靈の諸教會にいふところをきくべし勝をうるものは第二の死にそこなはれざるべし○十一なんぢペルガモの

けうくるい此使者よりきおくるべし兩双のときつるぎを
もつ者このくのごとく言と雖もろくて是知るんぢが
ところへ卽ちサタンの座位のあるところるを爾ハうなくて
グ名をなのり嘗てなが忠信のあるしびとアンテパスるんぢ
らが中サタンの住ところまで殺されしときまでるんぢ
なが道をまもてさりき雖も我るんぢら數件のせむべ
きことあり爾儕のうちバラムの教をたもつものなり前よ
バラムバラクにさしへて礙をものをイスラエルの民はまくる
しむ卽ちバラクをしてうきもろて偶像にさげしものをく
らひ姦淫をおこなはしめなり雖又るんぢらのうちよ

ニコライ宗のをしへに従なりう者あり。これ教いとゞにくむところなり　汝なんぢ悔改よあらざれば我なんぢに急ゆきて爾なんぢいけり我くちの劍をもてこれとたゝかはん　耳ある者はれい靈の諸教會にいふところをきくべし　勝をうる者にはかくれたるマナをあたへん亦あらたなる石のうへに新しき名をしるしてこれにあたへん。これを受るものの外はこの名をしるすものなし　○十八　またテアテラのけうくわいの使者にこのきたるべし　神の子その目は火焰のごとく其あしは眞鍮のごとくなる者これのごとくいふと　我曰　汝なんぢのわざと愛と服役と忍耐とをわれ亦

ゑんぢが のちよのせ〳〵事いそぢめれよりも多くことを
ゐる 汗あくまとも我ゑんぢよ責べきことあり爾いこれ自
ら預言者ありといひて我あものべを教こまをまどひ〳〵姦淫
をおこなふ人せ偶像よさげ〳〵物をくらふ〳〵むる女イエザベル
我いまわけり三ふ迯曾てこれ女よくいあ〳〵なむべき機を
なくへ、なまど其ゑんいんを悔改むることなくせざりき三我
このまを牀よなげいまん又このまと淫まることれも若それ
こるひを悔あらなめば我こまを大なるなやみのなろよ
投いまん三また死をそて彼をんるものこどもを殺さん。こを
よりて諸教會いころ人の心腸をさぐる。ゑんぢ〳〵各人の

むこるひよ あながひて報をなさこころをもちん 二四 我これは
ろのテアテラの人しまふ此をしへをうけず所謂サタンの
奥義をしらざるなんぢらよ言ふ他ほろの荷をなんぢ
らに負せず 二五 只なんぢらところろれるものを我しかるとき
まで固くなのりてよ 二六 勝をえて終よしかろまで我め
しのせ事をまもるものに我くにぐにの民なをさめる權威
をなたへん 二七 ろまん鉄の杖をもて諸邦のたみ陶器管轄ろ
らを陶器れうろのごとくくだかん 二八 我もまた父よりうけた
る權威のごとし 二九 ろまた亦うれよ曙の明星をあたへん 二九 耳あ
るものい靈の諸教會よしふところを聽よ

なんぢサルデスにけうくわいの使者にこのきおくべし神のなゝつの靈をもち又なゝつの星をもつ我はごとくしふと曰ふ我なんぢの行爲をしる又なんぢに生る名ありてそれ實にしねるごとくを知ニなんぢ目をさまし幾どしなんとする殘れるものを堅せよ我なんぢのつとめ吾神のまへに全をみざるなり三ゆゑに故になんぢが受ることゝ聞なるところを憶ひでこれをまもりて悔ひなさなめよ。もし目をさまさゞれば我ぬすびとのごとく爾に臨らん。なんぢ我いづれ時なんぢに臨るころを知ざるなり四なほサルデスにも數人いまだその衣をけがさ

ぐるものあり彼傍にありき衣をきて我とともにゐゆきんの給ふこと然なるよなるものあり五勝をうるをれば白ころをきせらるべん我その名をいはちの書よりけしゐることばし又ことばちとその使おもちにまくよこのまぶ名をいひのべん六耳あるをれいみなき此諸教會よいふところをきくべし〇七ゐんぢヒラデルヒアの教會のおしへやよ書ねくるべし聖をれ誠ある者ダビデの鑰をそらめの彼ひらけば誰をとづることあなひぞ彼とづまば誰もひらくことあなひぞ此者このくのごとく言と八曰ころをゐんぢをれるぎをある視よころ門をゐんぢの前よひらけり。こをきを閉ことをうるを

のるし。そん爾をしくカありてそのことばをまもりて名をまそざれべるう夫みづうゝユダヤ人といひて實へあこのうぞ唯いつもりをいよリタンの會社なる者として我こゝろを爾のそゝろきたうしめるんぢ此足のまくよふきしめ我るんぢを愛せしことをあらしめんゝるんぢそのぶ忍耐のことばをまもりしよる我もまた爾をまもりて地よまもむ人をこゝろみんらためよ全世界よきたらんとする試のときよこゝをまぬうるあむべし十二生迅速よきたうん爾がもつところのそれを堅たもちて爾のこんむを人よとうばゝるの者十三勝をうる者をそのぶ神の殿此

うちの柱とるさん此よりふたゝび出ることるし我また
るが神の名とるゝこのみの京城まるゐんち天よりるゞ神のを
とよりくだる新きエルサレムの名おゝびるゞあたらしき
名をこゝにまるるさん十三耳あるものは靈の諸教會へいふ
ところをきくべし　十四るんぢラヲデキアのけうくわいの
使者へこのきおくるべしアーメンたるものは忠信ある眞實の
證者このみの造化のをしへるるもの斯ればごとくいふと十五曰
るものんぢが冷うもなく熱もなくざることを爾のを
ざるようてあれを我るんぢが冷うるるろ或ハあるうろん
ことをねがふ十六爾まだぬる溫然しそひやゝうもあらだな

つくもあらじ此ゆゑよ我ゐんぢをうば口よりもきいだ
んとをも雨みづうつるまん富このつ豊よろづ乏きところる
しといひて實ハあやめるもの憐むべきゆゑ又まづしく瞽
目はだうるうるをもちうぎまび六我ゐんぢまもむ爾をみを
るきんなめよ我より火よやきかる金をこのく又おのがはぐ
この此恥のあらじきざんなめよ向こころもを買てまたく又
みることを得んなめよ目藥をこひて目こゆる十九よろびそ
我なんちる者ハつるきことをいましめことをを懲これゆゑ
よ爾をばみくくいのちなめよ手視よろる戸のそとうたち
て叩ふしうる聲をきて戸をひらくものゆゑび我そゑ

人のものとなりしかんを而して其人と共に其ひと
へ我と共に食せん三勝をうるものは我きよ勝をえ
て我ちゝと共に其くらゐに坐せるがごとく我と共に
ともに寶座にざをるごとくをゆるさん三耳あるものは靈のお
よけうくわいにふところを聽べし

第四章

このゝち我みしに天に門ひらけなりたる我はじめ
にきけるところのラッパのごときこゑ復我と語ていふ此にのぼれ我このゝちおこなるべき事を
なんぢにしめさん二我なんぢ靈にこのんで天にひらけ
寶座まうけありて其くらゐの上にざをる者あるをみたり

三その坐るところの貌は金剛石なるき瑪瑙のごとく且そのくるまのまわりに緑の玉比ごとき虹あり四そのくるまは四圍にまた二十四のくるまあり二十四人の長老ありきよろきものを著このくるま金の冕をいただきて其くるまにざするを見なり五その中央のくるまよりは閃電いづち及なりまたこゑ出またそれ寶座のまへに燃るるつの火燈あり。これ神のるつの靈なり六くるまはまへに水晶に似たるギヤマンの海のごときものなり寶座の正面とそのまわりに四の活物あり前後にところぐく目あり七第一のいきものは獅子のごとく第二のいきものは牛のごとく第三のいきものは面のごと

ち人のごとく第四のいきものハ飛鷲のごとし八この四ハ
活物あのく六のつばさありそれ内外にこと〴〵く目あり此を
のよるひる息もせずいふ聖いかる聖いかる聖いかな昔い
ま〳〵今いま〳〵後いまゐ主なる全能の神と九これ活物くら
みな坐をるところの世々にのぎりなく生るものゝ榮を歸し
これを尊敬こゝろよ感謝せ〳〵とき十二十四人のちやうらう
寶座よりざをる者のまへに伏このよう限りなくいきるをれを
はい〳〵自己のかんむりを其くらゐのまへに投いだし〳〵いひ
けるハ主よなんぢハ榮となふとびと權威をうくべきを
のあり爾ハばんぶつをつくり萬物ハみこゝろによりてた

を与且つくらまたり

第五章

そまた又くろみよぎそる者るゝつの印ゝて封印せる
うろおりて文字ある巻をそれみぎの手よりそるをみた
りニそまた又ひとりのつよき天の使おほいなる聲をいだ
て誰ゝこの巻をひらくに封印をとくに堪るやとふるを
なふるを見なをニあるよ天よも地よも地の下よも此ま
きりれをひらき又らまを見こゝをうるものるゝ一人と
しそこれ巻をひらき又らまを見よなふる者あきがゆ
ゑよ我はるゝゞく哭り五この長老のひとり我よいひけ
るハ哭るのまユダの支派よりいでなる獅子ダビデの根を

で勝をえたまひ此まきものを開きたまふことあるべつれ封印
をとくことをうるゆゑ六 又寶座および四のいきものの
間にやうらうたちの羔ほふられたるが見たり此こひ
つじ前にこころきよくことなるがごとし。こはまたえるつの角
とえるつの目あり。この目は全世界につかはされたる神のえるつ
の靈なり七 この羔さきにみて寶座よりいでたまへる右の手よ
りまきものをとりたまふ八 巻をとりたまへるとき四の活物および
二十四人の長老おのおの琴をとり又こうをもりたる金の香
鑪をとりて羔のまへにひれふしたり此こうは聖徒たちの
祈禱なり九 かれ長老たちあたらしき歌をうたひていひけるは

ハ爾ハこれ巻をとりそれ封印をやぶるにふさわしき者あり。
そハ爾がつて殺されしそれ血をもて諸族諸音諸民諸國の
うちより我儕をあがなひ神に歸せしめ且われらの神
のためにわれらを王と祭司となしたまへればなり。
また地に王たるべし又みしるに寶座と活物および
長老たちのまわりに衆のてんし使の聲あるをきけるに其こ
の千々萬々にして大聲にいひけるハさきに殺されし
おひつじハ權威富智慧能力尊敬榮光讃美をうくべき者
なり又すべて天にをる地および地の下および海の上に
なるところの凡てつくられたるそれ又そのなかにある

の皆いへるをきけり曰わが〳〵讃美尊敬榮光權力〳〵
みな坐まると共にきゝて世々にのぎりなからんことを
十四是よわりて四の活物アーメンといへり二十四人の長老
ふして拜せり

第六章 羔その一の封印をひらきしとき我みしに活物のひ
とつ雷のごとき聲ありてきたれといふをきけり二ゐ見しに
一匹の白馬をみたり。こゝに乘るその弓をたづさふ且ついん
むりを與へられ彼つねに勝りまた勝をえんとて出ゆけ
り〇三まわれ第二のふういんを開くときわれ生物のき
たれといふをきけり四又いろびきの赤馬いできたれり之

よのまるる〻地の平和をうばひ且ひとびとをしゐて彼此よあひ殺しもる權をなたへらまたまり彼また巨なる刀をさげらる〇五また第三の封印をひらきし時だいさんの活物のきたまと言をきけり我みしよ一ぴきの黒馬をみたり。これに乘るその手に權衡をもてり六我この四の生物のなかより聲あるをきけり曰ぎん十五錢よ小麥五合ぎん十五錢よ大麥一升五合なり油と葡萄酒をそこなふ〻べからず〇七また第四のふういんをひらきしとき第四のいきものゝ來といふをきけり八また見しよ一匹のあをざめたる馬をみたり。これに乘るその名は死といふ陰府その後よりしたがへり

まろ力剣饑饉死亡および地の猛獣をそて世の人北ちぶん
の一をころもの權をあたへらもたり〇九また第五のふい
んをひらきしとき祭壇のもとよ曾て神の道北ためおよ
び其なせし證のためよころさもおるを北どの北魂なるを
みたり十このまろ大聲よよぶしていひけるハ聖まことの主
よいつまで地よまも者どもをさばき北仇せざ且こもよられら
の血北むくいをるしたまハざるや十爰よこのまろおのくよ
白ころもをなたへくこもよいひなまひけるハ彼儕のごとく
ころさもんとまる其ともよちなろけん兄第たちの數のみ
つろまでく安んじてち〻らく待べし〇十一又だいろく北封

印をひらきしに我みしに大なる地震あり日は毛布のごとくに黒くなり月は血のごとくになりぬ又天の星はいちじくの樹の大風にゆすられていまだ熟せざる其果のおつるごとく地におち又天はまきものをまくがごとくさりゆき諸山も島もみな皆その処をうごかされたり又地の諸王また貴人ところの将軍勇士またすべての奴隷またすべての自主ことごとく洞と山のいわおとに匿れ山と巌とにいひけるは願はわれらのうへに墜ちかかりて宝座にざせるものの面とこひつじの怒をさけしめよ其いかりの大なる日はきたりぬ誰かこれに抵

をえんや

第七章 こゝに後ゝを四人の天使つゝひ地の四隅よゝもて地の四方より風をひきとめ地のうへゝも海のうへゝも樹のうへゝも風をふゝせざるを見たり二また此はゝよ一人の天使いけるゝ神の印をもちゝ東より登きたるをみたり。これ使この地と海をそこなふことをゆるされたる四人の使よむゝひゝく大聲よゝでゝて三ゝゝよ此神のしもべよ額よゝを印きゝるまでゝ地をも海をも樹をもそこなふなゝといへり四ゝゝ印せゝを得たるもの此い數をきゝしよイスラエルのこゝゝ〳〵の支派のうち印せゝを得たるものあい せく

十四万四千あり五ユダのこゝまでそ一万二千ルベンのこゝまでこゝに一万二千ガドのこゝまでそ一万二千六アセルのこゝまでそ一万二千ナブタリ此支派そいちまんにせんマナセの支派こゝに一万二千シメオンのこゝまでこゝに一万二千レビのこゝまでそ一万二千イサカル此こゝまでにそ一万二千ゼブルンのこゝまでそ一万二千ヨセフ此こゝまでこゝに一万二千ベニヤミンのこゝまでこゝに一万二千人あり〇九此の内我みゝに諸國諸族諸民諸音のごとく誰もこゝにつくもの能はざるほどの大ぜい此人をこゝにもち手に椰子の葉をもち寶位と羔のまへにきたりてたゝり十

大聲よばゝりいひけるは救ひ
神と羔よりいづるなり十天のつゝひみる寶座および長老
だちと四の活物とのまへうつぶしなりて寶座よりひ俯伏し
て神をはいし十三いひけるはアーメンねがはくは讃美ゑい
くもう智慧こんしゝや尊敬けん能力よく竈あくつきまもの
神に歸せよアーメン十三ちやうらうの一人そまよいひける
い此おろき衣をきたる者いかなるや且いづくよりきたるし
や十四我こたへけるは君よなんぢこれを知べし彼そまよい
ひけるはこれらは大なる艱難をへきたるなり羔の血
にその衣をあらひ潔くこれを白くせる者なり十五これ

故ゆゑにこのまち〳〵神のくらゐのまへにあり且その殿にそよる神よつゐに寶座にざせる者いこのまちのうちに居たまふべし十六このまち〳〵このきわめて飢ゑこのきわめて渇ぎまた目も熱氣もこのまちを害はざるなり十七そは寶座のまへにある羔このまちをやしなひこのまちを活る水のみなもとに導きまた神このまち此涙をその目よりぬぐひなくしたまふべければなり

第八章

また第七の封印をひらきしときに天にがほぼ半時ばかりしことをわれみそ半時ばかりの間に神のまへにたてる七人の天使つのひをみる彼等につゐにラッパをなんらをたまへり二又ひとり

の天使つひに金の香鑪をとりきたりて祭壇のうへに
立つ彼におほくの香をあたへらるこれ聖徒みなの祈
禱なる金の祭壇の上にてそをささげんがためなり四
香の烟聖徒の祈禱とともに神の前にのぼれり五天使
香鑪を執りこれに祭壇の火をみたして地になげうつ
ときに雷と閃電おほび地震おこれり六ここに七つのラッパを
もてる七人の天使ラッパを吹く備をなせり七第一の
天使ラッパを吹けるに血のまじりたる雹と火と地とふりくだり地の三分の一やけうせまた樹の三分ふ

んれ一やけうせまべくの青草もやけうせなり〇ハだいよ
の天の使ラッパをふきけまべ火ようくる大なる山のごと
きもれ海ようげいまられうみの三分のいち血ようなりた里
九海のなろうある造らまなる活物さんぶんの一もる舟さ
んぶんのいち破壊なり〇十第三れてんの使ラッパをふき
けまべ一のおおいある星まもり火のごとくようそそて天よ
り隕もるそち河の三分の一おようび水のみなもとようおちた
まころれ星の名い茵蔯といふ水れさんぶんのいちハ茵蔯(カハラヨモギ)の
ごとくようべくあれり斯みづれにがく變るようくおおくの
人もねり十第四の天れつうひラッパを吹けまべ日れさん

ぶんれいち月の三分れいち星の三分の一なふうたをそその三分れ一をうちくらくなり晝さんぶんの一ひのうるく夜もまた光るし十三つを見しまた一の鷲そられ中央をとび大なる聲をもてよぶをきく曰のちまた三人れてんの使ラッパをふのんとするまえより地よまむ者はうぎひるるこるる禍るこのる禍なる哉

第九章

第五の天使ラッパをふきけるとき我てんより地よれちなる一のほしを見たり此ほしそこるき坑のこのぎをを與らるたりニこの坑底るき坑をひらきけまへおわいるる爐のけぶりのごとき煙あるよりのぶり日と穹蒼とふこれ坑れ

けぶりのなかより暗きより　三　おほくの蝗けぶりのごとく地より出いづるごとく地の蠍ちからのごとき權をあたへらる　また地の草みどりの青緑なんびともすべて樹をそこなふことなく唯ひたひに神の印なきひとびとを傷ふべしと命ぜられたり　五　且ころすことを許さずただ五ヶ月ばかりひどくこれらを苦むることをゆるされたり其くるしみは人さそりさすときの苦しみのごとし　六　この時に人ひとぐ死をもとめんとすれども能ず死んことをねがへどもかへつて死いのがれさるなり　七　此いなごの狀いくさに備へたる馬のごとし頭に金の冕のごときあり其

のはい人の面ㇾごとく八ㇾ女のごみれけのごとき髮
ありそのはい獅子の齒のごとく九また鉄のむねあてれご
とき胸當ありそれ翼のおとなれの馬ㇾいくさ車をひ
きて戰場ㇾはせるがごとく一且こてもてさそりの尾ㇾごと
き尾と蠆とあり此いるご五ヶ月のあひだ人をそこなふ權
をそなふ十一此いるごは王ありて底るきほるれ使者なりヘブル
の音ㇾてそれ名をアバトンとしひギリシヤの音ㇾてアポリオン
といふ十一のつぎわひ過きりてまた二のつぎわひきたりしかる
んとも十二第六の天ㇾ使ラッパをふきし時ㇾ神のまへ
なる金ㇾまつてだんの四角よりいづる聲ありて十三これラ

ツパをのぞむる第六のてんに使ふこのものどもきゝく曰このゐつるゞ
まて大河ユフラテのほとりにある四人のつのびをゆるせ
十五 乃ちかれらの使者ゆるされたり年月日時にいたりて人の
さんぶんの一をころさんためにこれまをを備へをれるり 十六 騎
兵のこの数二万万あり我その数をきけり 十七 我またろしまこ
れ馬とこれに乗るのものをみしがそれ形状このくれごとく。
このまゝろに火色むらさきいろ硫磺色のむねあそを着むものの
このまゝろハ獅子の首れごとく其口よりハ火とけぶりと硫磺
いづ 十八 この馬れ口よりいづる火と煙といぶりと三のこれ
いなめる人のさんぶんの一ころされたり 十九 この馬れもろ

らひ口と尾とあり其尾ハ蛇のごとくにして首あり。こをもて人をそこなふあり 二 これ禍ふかくこころさまざまの餘のひとびと尚それ手のわざをくいあらためず悪鬼をはらひ見ること聞ること行ることをえざる金ぎん銅しんの偶像をはらひ 三 又それ兇殺魔術姦淫盗竊をくいあらためず

第十章

そのまた又ひとりの強てんし使の雲をきて天よりくだるを見たり虹その首よりあり。それ面ハ日のごとく其あしハ火柱はしらのごとし 二 それ手のうちひらきたる小き巻をとり其みぎの足を海のうへにふみ左のあしを地にふみ

三
獅子のほゆるごとく大聲よばゝりよびたるときに
七つのいかづちありて聲をいだせり四ゝつの雷こゑを
發せしときわれかきたるさんとせしに天よりいづ
る聲ありて此ゝつの雷のいへることゝ爾こゑを封じそ
のきこゆるをかくのごとくせよといへるを聞り五ゝ見ところの
海と地とまたがりて立るてんの使みぎの手をあげて天にむ
かひ六世々永遠にいける者をさして天およびそれにあるものを
また地およびその中のその海およびその中のその物をつくりた
る者をさして誓いひけるは今ゝ時をのべざるべし
七第七のてんの使の聲をいだすときに即ラッパをふくべ

きよいたりて神それ奥義ある預言者たちに示たまひしごとく其おくき成就まぢかくハそぶ聞こゆるの天よりいでし聲また我よりいひけるを行てこれらうみと地とまたがりたてる天のつのひれ手をもちてとらの展たるちひさき巻をとれ九我それ天の使にそこへゆきて之をいひけるを請ちひさき巻をそこへまたへよ彼いひけるを此まきものをとりて食つくせ爾のはら苦からべしそれ口よりてときのごとく蜜のごとくなまろらん十これ天のつのひれ手よりちひさき巻をとりてこれをくらひつくしつ口にありてときハそれ甜こと蜜の如くありしかど我くらひつくしつときそぶ腹そぐ

くのごとし 十一 彼これよいひけるに爾ふたゝび諸民諸國諸
音諸王のごとくを預言せざる
第十一章 こゝに杖のごとき葦をあたへらまもう天の使これ
よいひけるに起て神のみやと香壇こゝろびよそこゝにて拜を
る者をはかるに二殿のそとれ庭いのこして度るなかれ。
そこゝろを異邦人にあたへなまひとまびまう。このまもう四十
二ヶ月のあひだ聖城をふみあらさん 三 こゝに我ふたりの證
者に能をあたへん。このまもう麻のこゝろもを着て千二百六十
日のあひだ預言せべし 四 このまもうの地をつかさどる主にま
つたてる二の橄欖の樹ふたつれ燈臺まう 五 のしこゝろまも

を害わんとまる者あればその口より火いでてその敵を
ほろぼしをり若しこのまうをそこなわんとまる者あれば
その者へ斯のごとくころさるべし　六彼儕よげんまるあひだ
天をとぢて雨をふらざらしむるの權をもそう亦みづを血
とかへうせ且その心ろのまゝに幾回もさまざまの災
殃をもて地をうつ權をもそう七かれらがその證をを
へをはらんとき底なき坑よりのぼる獸ありてかれらと
たゝかひ勝てかれらをころさん八その屍はおほいなる邑の
まちなり此まちを譬てソドムとよびまた亦エヂプトと名く
またそこも主の十字架にかけられまひし處なり九

諸民諸族諸音諸國のもの三日半のあひだこのまちのまちなかを見このもの屍をはうむることをゆるさず十地にもむ者どもこのまちの死しよりてよろこび樂しみ禮物をやりとりをせん。そは此二人のよげんしや地にすむものを苦しめたればなり　十三日半ののち生のいき神よりいでてこのまちのうちに入このまちのわきにそれ足をたてしかれを見ものの大におそれをなせり　十一その時天よりおほいなる聲ありて此にのぼりこれらに言をきけり。このまち雲にのりて天にのぼりぬ。それ敵これを見たり　十二その時におほいなる地震ありて邑の十分の一はたふれ此

死一を以て七千人のころまるものども大に恐れ榮をてんの神に歸せり十四第二の禍ぎさまり第三のわざわひ速くきたらんとす○十五第七のてん使ラッパを吹しときに天におゐいる聲ありて曰く此世のもろ〳〵の國はわれらの主および主のキリストのものとなるべし主キリスト世々ぎりなくこれをを管理なさるべし十六神のまへにありて座位にゐる二十四人の長老ひれふして神をはいし十七いひけるは今いまし昔いますところの全能の主なる神よなんぢ既におほいなる權をとりて政をほどこしたまふによる十八もろ〳〵の國は民いかりをいだけり爾の

このも亦いかまつり且あるべきそれを審判しあんぢれもべあるる預言者おゝび聖徒あるびに大と小との別なくそれ名をおそるゝそれに賞をなたく地をほろぼすものをはろぼしあまふ時まぐに十九ときに神のみや天にひらけ殿のうちに神此やくそくの櫃みゆ又いなづまと聲と雷おゝび地震とおゝいなる雹となりき

第十二章

爰におゝいなる異象てんにあらはる一人のをんなあり日を著つきをしたのあしのしたに首に十二の星のかんむりをいただけり二彼はらみて懐孕をりしが子をうまんとして甚くるしみなきさけべり三また一ぴきあるし天にあ

らゐる一條のおゝいなる赤龍あり、これ七のかしらと十の角あり。その首どもの上に七つの比冕をいただけり。四その尾もて天のほし三分の一をひきこきたを地へおとせり。此おろ子をうまんとまる婦のまへにたちて産をまちてその子をくらはんとせり。五をんな男子をうめり。その子てつの杖をもて万國の民をつらさどらんとせり。この男神とその寶座のもとにひきあげられたり。六婦のがれて野へゆけり。神そこにてこのかたを千二百六十日の間やしなはんために備たまへる一の所あり。七おくて天に戰さおこれりミカヘルその使者をひきゐて龍とたゝかふ龍もまたその使者をひき

みくにをとなぶらひーセハ勝ことあたはざれば且ふたゝび天
よをうることを得ざる九ことに於てこれ大なる龍まことの惡
魔とよばれサタンとよぶるこれ全世界の人をまどはす
老蛇ちよおひあるさる其つらひもまた共よおひおろされ
おり十天よおふいなる聲あるをきけり曰ふまことに神の
くにと能力とそれ國と神のキリストのけんを今まぢよい
なまり。そはつねまらの神にまへに夜晝つねまとの兄弟をう
つたふる者をそおひあろさまたおひいるり。ことまこれ
兄弟ハこれつぢの血およびあのが證せーとこころの道よよ
てまくこまをの勝り。こまをの死よりいたるまでそれ生命ねを

まぎりき 十二 これゆゑよ天とてんよをるそれいよろこべ地と海いてぎひるうる。そい惡魔おのが時のいくをるをきを知おるいるる怒をいだきてるんおらの所よくだをばるり〇 十三 龍おのがをぞよ地よおひおろさをーを見てこれ男子をうめる婦をるやまをり 十四 これ婦おほいるる鷲の二れつきをあたへらを野よとびくおのがところよいなりそこよて蛇をさけ一年と二年と半年のあひだやーるいきたり 十五 蛇それ口より水を河のごとく婦のうしろよ吐てこををなぶよろきんとをり 十六 地をんるをなをけ口をひらきて龍のくちよりをきたる水をのみつくをり 十七 龍

をんなをいろうてそれのこうに兒女まうけ神のいましめを守イエスのあかしを有てたゞうそんとそゆけり

第十三章

又我海の沙におりたちて一匹のけものの海よりいづるをみたり之によるつの首と十のつのありその角のうへに十のこうんむりをいただき其こうしろに僭妄の名をかゝせり二つゞ見しところの獣それうたちは豹のごとく其あしは熊の足のごとくその口は獅子の口のごとし龍かのまた能とくらゐと大なる權威をこれにあたへたり三つをこれけものの一のこうら傷をうけて幾どしなんとせ

る狀をみたり。それ死んとまるさまありしに傷いえけ
ればなり。全世界の人こぞりてその獸にしたがへり。四龍それ
けんをその獸にあたへしによりて人々かれらをはいし、又こ
れけものを拜しいひけるは誰かこの獸のごときそのあるら
んや誰かこれと戰をまじうるを得んや。五またけものの
奢大なることと謗讀ことばをいふ口をあたへられまた四
十二ヶ月のなかひだそれうきをなをなしつき權をあたへらる。六
この口をひらきて神をけがしそれ名とその聖所およびび
天にすまものどもをけがせり。七またこの聖徒たちとたゝかひ
これまて勝ことをゆるされ又もろ〳〵の諸民もろ〳〵の諸國

をつくさゞる權威をあたへられたり八地よりまもるまぐるくの人まるそも世のそゞめようこゝろさきなもの一羔のいのちれ冊よその名をまるさきざるそれどのいこれ獸をまいせん九耳あるそれいこゝをきくべし一おほよそ人をとまこゝまるをれいわの色赤とるまこゝせるまた刀こゝそ人をころをものい已まれこゝるまそこゝろさるべし一聖徒れ忍耐と信仰こゝまあり〇上こゝまるまる一匹れけもの地よりいづるを見たりこゝまる二れつのありて羔の角れごとし一且そのをれいふこと龍のごとし一十こゝれ獸さきのけものゝまへまそ前れけもの凡のけんみをとり地とそれ上よまもる

者をしてその死んとする狀のごとく傷れしごとくなるけものを拜せしめたり 十三 又おほいなる奇徴をなして人々のまへに火を天より地にくだし 十四 且その權をえてその獸のまへになすふしぎのわざをもて地にすむものを欺きこれらにのたまひてその刀傷をうけてなほ活るけものの像をつくらしむ 十五 彼この獸けものの像に生命をあたへてこれにものいふことを得せしめ又そのざうを拜せざるものをことごとくころさしむるの權をあたへたり 十六 また尊人をして大小貧富自主奴隷のともちろしめ或いみぎの手あるひは額にゑるしをうけしむ 十七 印誌ゑるしをもちる獸

其名なるぎるとの或いそれ名のこのぞあるぎるもれいまべて貿易まることを得ぎるためなり六此けものれ〻數目の義をもるものい智慧あり才智あることのいこれけもの〻數をこのそへよ獸のうまぐ人れうまぐるり其このぐ六百六十六のう

第十四章

我みしよ羔シオンの山ようそり十四万四千の人こまとおるもあり皆それ額ようこひつぐの名おうび羔れもうの名をあるせり二うま天より聲あるをきけり。おうくの水れこうえのごとく大なる雷れこうえのごとし我きゝしこれ聲いおうを彈ものゝごとをひく琴のおとのう三彼儕あうろ

しき歌をくゝみの前おゐび四のいきものと長老たちのまへに謳ふこれうけ贖はれて地よりきたるもの十四万四千人のほかは學ぶことあたはざりき四うまつうの婦女とまじはりてそれ身をけがさゞる潔きものなり且こひつじのゆく所いづくまでも從ふ。このもの人のあひだより贖はれて神と羔羊とにさゝげし初の果なり五その口いつはりあることなく瑕きものなり

○六また又ひとりの天の使ありそらの中央をとぶをみたり永遠のよろこびの福音をたづさへ地に住む者すべての國諸族もろ〳〵諸民にのべつたへんためなり七大なる

ることなくて いひけるは神をおそれ榮をこれまでに歸せよ。その
神の審判 きたりまふすとき既によいおきたまふる天地海および水
のみなもとをつくりたまひしものを拜せよ 八 又ひとつ
大なる使その後にしたがひゆきていひけるは大なるバビロン
はたふれたふれたり彼その淫行の激しき酒をもて萬國のたみ
のさけを萬國のたみもに飲しめたり 九 第三のてんの使
きたりその後にしたがひゆきて大聲にいひけるは獸とその
像とを拜しその印誌をひたひあるひは手にうくるものたれ
ども 十 このものもまた神のいかりの酒をのまん卽ち神のい
かりの杯にそそがれたるまじりなきものにて

天のつくひかも及こひつじのまへにて火と硫磺をもてくるしめらるくるしめ士それ苦めらるる烟うづまのぼりてつくる時もしくは獸とそれ像ををいまもる者またそれ名のしるしをうくるものいれば夜晝やすらふことなし十一神はいましめとイエスをまもりまもる信仰をたもつ聖徒のにんたいこゝにあり十三またわれ天よりこゑありて我にかくのごとくをきけり曰かきしるせ事をあらたむ今よりのち主にありてしぬる死人はさいはひなり靈もまことにしかり然らばかれらはそれ勞苦をやめてやまんその功これにしたがへばなり十四我みしに白くもありその雲のうへに人の子にごとくきその首にきんの晃をいた

ざき手ヨときに鎌を
そもそぎせり 十五 又ひとりの天
使殿より出大なるこゑまて雲のうへに坐
ませるものにいひけるハ刈時まてに
いたりぬ地の穀物まてに熟しなを爾の
こがまをいれてかりとれ 十六 雲のうへにざませる者それかまを地
にいれければ地のこくそうこりとられり 十七 又ひとりの天
使殿より出ある殿よりいで彼もまたときに鎌をそなへ 十八 又
ひとりの火をつかさどる權威をそなへる天のつかひ祭壇よ
りいで大なるこゑにて利鎌をそなへるものにいひけるハ地
のぶだうをそぎ熟しなんぢの利鎌をいれて葡萄の
球をこうあつめよ 十九 天のつかひその鎌を地にいれ地のぶ

だうをこのりなつめて神の怒ひおそいるる醡こるげいまたり羊城のそとこそこのさうぶねを踐しこ血さうぶれようにでて馬の轡ことごくるほどこのたり廣まること七十五里こおよべり

第十五章

こゝまた大こそ且こゝぎるる異象の天こあるこをみたり七人ひとんのつうひ末後ひるつひ災殃をそそり神のいかりへこゝまて盡るるり二こゝまた火のまとりなる玻璃のうみひごときそれをみたり。このり獸とそれ像およびそれ名のかずこのちなるその神ひ琴をとりて此ぎやまんの海ひほとりにたてるを見たり三このゝる神の志

えべモーセのうたと羔のうたをうたひていひけるは主ぜんせうの神なんぢの行爲はおほいなるこの奇なるうたは万民の王よなんぢは義なるうたは誠なるうたは四主よたれか爾をおそれざらんや誰かうるんぢの名をあがめざらんや唯なんぢ聖ばんこくの民なんぢはまへにきたりて拜せん。なんぢのたゞしき行爲はあらはれたり〇五このち我みしに天にて證のまくやぬ殿ひらけたり六七のつぎたひをそそる七のてんし使きよくしてて光ある布をき胸にきんの帶をつこのねく此みやより出七ようの活物の一この七人のてんしのつこひに世々にいきたるく神の怒

をのまるきん此金椀をあたふ八神のさこの下と權力より
いづるいくぶり殿よりみちなり。るつ此天のつろひ此をそ
る七のつぎつひ此をうるまぐ殿よりいることをうるもの
る〳〵

第十六章

つ又また殿より大るこゑいづ〳〵七のてん此使よ
このたるをきかり曰ゆきて神の怒をそれる七のこのるまりを
地よこのたるむけよ二第一のつろひ往てそれこのるまりを地よ
このたるむけ〳〵まぐ獸のある〳〵ある人とそれ像をはいまる人と
よあし〳〵うつ苦痛の腫物いでたり三第二のつろひそれ金
椀をうみよこのたるむけ〳〵まぐ海ハある〳〵もの〳〵血此ごとく

ありて海にある生物みなことごとく四だいさんの使それこのあまりを河および水のみなもとに傾けつくしぬべそれ水ことごとくありて血となるべし五また水をつかさどる天の使のいへるこことをきけり曰いまし在ましまし在きたまひき主よなんぢ斯のごとく審判をこのことなきふことよりてく義ありなんぢ聖徒と

よげんしやの血をながしこのまたこの血をあたへたまへるのまむ彼輩はこれをうけるにふさはしきものなりと又こゑありて祭壇よりいづるをきけり曰ありて主なるぜんのう此神よなんぢまことさばきは正しき義なりと第四のつかひそれそのあまりを大陽のうへにそのやけをもて人をやく

の權をなたくらまり九ひくぐ大熱ニやられてこゝまでの
災をつくきどりなまふ神の名をのゝしり且くゐあらためま
神ニさからえをきせざりき十第五のつゝひそれくるまり
をけものゝ座のうへこうなもけゝまべその國くらくなり
人くるくゝしみよりてそれ舌をこのみたり十又そのくる
しゝとそのうつそれ故ニよりて天のこのみを罵れのゝ行を
くゐあらためざりき十第六の使そのこのまりを大河ユフラテ
ニうなもけゝまべそれ水このまりきたり是ひがしの諸王の
路をそなへんためなり十三又龍の口と獣の口と
ち及いつはりの預言者のくちより蛙ニにたる三のけがれ

たる靈のいづるをみたり十四あまた惡魔のまいるり。ふしぎなる事をおこなひて全地のきようを就こうまうをして全能の神此おほいなる日のたゝかひにあつまるをみたり十五視よ盜のごとくしてきたらん裸裎にて歩き羞處をみらるゝことなからんために目をさまし衣をつけをるものは福なり其このみたまし諸王たちをヘブルの音にてはルマゲドンとよぶ所にあつめたり十七第七のつかひそゝぎたりを空中にこのれむけ大なるこゑ天の殿にうまる寶座よりいでゝいひけるはまことに成りたり十八これ時おゝくの聲いかづち閃電また大なる地震ありき人の地にをり

より以來このごとき大なる地震ありしことなし十九大なる邑みつに裂れ異邦のもろもろの城なみだをながし神大なるバビロンを憶ひいでてこれに已のもえたつ怒の酒をもりたる杯をあたへたまへり二十もろもろの島はにげさりもろもろの山はみえざるにいたる二一また大なる雹てんより人々のうへにふりくだる雹ごとに重さおほよそ一タラントあり人々へうの災によりて神をのゝしりまつる。そは此なやみ甚しくたればいかんとなれば

第十七章

一七つの金椀をもてる七人の天使つきひのそば一にきたりて我にこのたちていひけるは來れ多の水

のうへにざする大淫婦の刑罰をしめさん二地の王たちこれと淫をおこなひ地にすめるその其いんらんの酒に酔ひたり三ときに靈にうんじてかれをさへらまて野にゆき絳色のけものにのれる婦をみたり。これ獸あまねくこうだう僭妄の名あり又るつ七首と十のつのあり四この婦むらさきと緋色ころもをまとひ金と寶石と眞珠をもて身をこのぎり手にくむべきものと及わのが奸婬のけがれをもりたる金の杯をもち五その額に名をかきたり。いはく奥義おほいなるバビロン地の淫婦と憎むべき者どもと母六我このをんなの聖徒の血にゑひ耶穌のあかしをなす者どもの血に醉たるを

みたり我この事を見てをるに驚あやしめり七天の
使ども云ひけるいかなれば何故おどろくや我なんぢ
のをる及ここをのをる七の雷を十ヒ角あるけもの
奥義をこのがるゝ八爾がみ〳〵獣いきたりあり〳〵が今いる
〳〵後そこなき坑よりのぼりて滅ゆく世のはじめより
生命の冊にそれ名をかゝるざるべき地にすめるをの前にあ
り今あらず後またいづる獣をこゝろおどろくべし九ここに智
慧の心あるべし此をつの首はおんなのをる七の山を
り十あるつれ王ありそれ五はたをちて一はをあ
至餘の一はいまだきたらず來ればしばらくそのまゝ十前にあり

て今あらざる獣八第八あり即ちるつの王よりいぞ〳〵ものの
まて終よほろびよゆうん 十三爾がみ〳〵十此つのい十此王る
りこのまうへいまだ國をえざれどもこれ獣と云もる一時の
あひだ王のごとき權威をとるべし 十三このまうへはみな同心ま
ておのが能力と權威をこれけものま予由これろ羔とな
このうん而しそこひつとこまる勝るりそい羔いもろ〳〵の主
の主そうの王こととやりまあるものいこる召れえうまたた
る忠信よものるるまよる 十五天のつうひ又こまよいふ 淫婦
のざまるところ比爾がみ〳〵水いちよみん 群衆ちよこく
諸音るり 十六るんぢが見しとを比角とけれい夫しんぷを

憾こゝまをして荒墟のう裸裎よるきしむ又それ肉をくゝひ
火をのそこれを焚べしまそのまろよ神おのが旨よろた
ぐふの心をあゝへ彼儕をしてこゝろを同うせしめ且このみの
言れこゝぐく成までそれ國をけめれよあたへしめたまへ
べるり六まんちが見しまんるへ地のまよろうよ王たる
おろいろる城邑まり

第十八章

このゝち我まゝ一人のてんれつうひれ大まる權威
をそもて天よりくだるをろる其さくえ地をてゝし輝け
まニこの巨大まるこゑをそよぐゞ言けるへおほいまるバ
ビロン倒なりなふれしり今あくまの住處まゝ各樣のけが

れたる靈おゝび穢たるにくむべき鳥の巢となるまり 三 そは
万國の民このれが奸婬によりて干るいきのりれ酒をのみ地の
諸王このまと淫をおこなひ地の商賈このれがはるそゞしき奢
華によりて富をいたせびまり ○四 またまた天より聲ある
をきけり曰ふ我が民よなんぢらこのまた罪にともなひうる
又このまた災にともあふことを免まんがため其中をいづ
べし 五 それこのまゝ罪いつもりて天にいたり神その不義を
こゝろに記なをへり 六 このまゝがなんぢらに爲しごとく彼に
なし其おこなひをてゝ倍しそまきて報このまゝ甚なだ
しく杯にまんぢう亦ぞゝてこれに甚あふへよ 七 彼がみ

づくゝ尊大みづから省るごとく亦くる〳〵と悲哀をこれよ
あゝへよ彼こゝろのうちよ曰ふまゝ女王のごとみよ坐を
ゑれい寡婦よあらじ我このゝちゞ悲哀よあらじとハこれ故
よてゝのごとひ一日のうちよこれの身よきたらん即
ち死くる〳〵み饑饑ゑり彼まゝ火よてやきつくさるん。そ
彼をさばきたまふ主なる神ハ能力あるものるまバるり九
これと嬰をおくるひ彼とまゝよおごりくゝし〳〵地の諸王
このまゞやうるゝ烟をみくこれゞ爲よるげきこのゝ〳〵まん
十これ諸王このまゞうくる痛苦をおそれ遥よそのまたちて
いそん哀このる哀このる大なるまちバビロン堅固なる邑る

ぢごうくる刑罰ひと〳〵きの中よりと土地の商賈こ
まごなめよ哭〳〵めり。そへこのまろの貨物をこのふ人るけ
れべるり十二其あきるひものハ金銀寶石眞珠紺麻布むとうき
きうそそめ〳〵その絹緋ようそめ〳〵物さまぐの香木象牙さま
ぐの器皿あかひたくのき木なるひハ眞鍮あるひハ鐵あるひ
ハ臘石まそつくまる各様のうつハそもの十三また肉桂香料に
はひあぶろ没藥乳香ぶだう酒あぶろ麥粉むぎ牛羊馬車奴
隷おまび人の魂るり十四バビロンるんぢが心た〳〵める果穀
れみのりどき既よはぎきり凡のおぐられる華美れそものもそ
よほろぶ復らまをうぐるべ〳〵十五らまろの物をあきるひ

バビロンのために富をしゝ者どもバビロンの受るくるしみを畏れこのごとはるかに立てなきこのるしくいひけるは十六
哀こるかな哀こるかな細麻布と紫と深紅とをまとひ金そう甘き眞珠とをそのぎりなる大なる城邑
よこのごとき大なる富ひとときにかゝれりとい十七
ふべくの舟長うみを航るひとぐおよび舟子と海よ
りて生業をするものもバビロンのそゆるけぶりを見はるかのよ
はるかにたゝて喊叫しひけるは何のまちぞ此おほいなる邑
とゝぶべけんや十九また塵を首のうへにまきちらし泣こ
るしみつゝさけびいひけるは哀こるかな哀こるかな哀こ

おろいある邑それおごりよりてまべく海よ舟をそそる
そのく富をえたる此まち一時のうちよはろびしことを天
よ聖徒使徒預言者よろんぢらこれを喜ぶべく神なんぢら
のためよこれを報をなしたまへるなり三一人のつよき天
使つひ磨のごとき巨なる石をとりこれを海よなげていひ
けるはおろいある城バビロンこのくのごとくに猛然うちた
ふさるべく再あらはるることあるならん三バビロンよろんぢ
らのうちよ琴をひき樂をそうし笛をふきラッパをふるう
も聲このさわくきこえだ。さまぐの工人このさわくええだ磨
の音このさわく聞ゆ三燈はひのり重くてらだ新郎はるよ

めの聲このさわぐきこえざるべし。そんちんぢの中にはあきうどい地のたふときをもちまびるり又だんこくの民ちんぢの魔術よまどいさをたれいるり二よげんじや聖徒およびまべく地にありて殺されたるものも血いこれ邑よみえたり

第十九章

この〻ち我おほくの人ほよぶがごとき大なるこゑ此天にあるをきけり曰ハレルヤ救と榮と權力いてきたらの神のたのもちなるふところるり二其さばきい直このう義るり。そん神うれ淫亂によりて世界をけがしたる大淫婦をさばき已がしもべどもの血もむくいを求てこれを罰したまへ

べるり 三 このまろ再ハレルヤといふり 寡婦をやく火のけぶ
りのぼりて世々やむことなきる 四 二十四人の長老および四
の活物くろるゐ坐したまふところの神をふしをがみてア
ーメン。ハレルヤ。といふり 五 こゑ寶座よりいでくいふ神の
ちりべよ神をおそるゝそれよ大と小とのてろちるく皆ま
たろの神を讃美せべし 六 我おろくの人比こゑのごとく多
のみづ比音のごとく大なるいろづちのこゑのごとき聲を
きけまた曰ハレルヤそれ主なるぜんのうれ神ゐ王るり 七 ま
たろ欣喜なのしみて神をあがめんそいこひろしの婚姻の
とき既ゐいたりそれ婦まそなみづろろ備をるし をそろ

たまべるり　八婦きよくしてと光あるはそき布をきることを
ゆるさる此はそきぬのハ聖徒の義るり　九天の使とれといふ
ひけるい羔のこんいんの筵とまねうまたるをれい福るり
とこのきあるせ又とれといふこと神の眞此ことべるり　十
我その足下とひまふして拜せんとしけまべ彼とれといふ
然まべうろべ愼よ。とれまも爾とおるべしく僕るり亦いもに
の證をなりつるんぢの兄弟とおるべしくあるべるり。るん
ぢたち神をはいせよ　耶穌の證をなつる靈とよげんの靈
とこれとおることるし　○十とれまもまる天のひろくをみし
よ一匹の白馬ありこれとのまるもの忠信まる誠實とまる

へくる。このまゝ義をそなへ審判となどうひをるせり 十二 それ目
いほの名れごとくそれ首いおろくの晃をこのむまり又ある
せる名ありこれの外ニこまをあるもれるゝ 十三 このまゝ血ニ
あみなる衣をまとへり。これの名い神のことばといふ 十四 天
ニなる諸軍あろくこのぶやける そそき布をき白馬ニのりて
こまゝあとがへり 十五 このまれ口より利剣いづ。こまをそなへ列
國のなろくを撃うる鐵のつゑをもてくろくの民をつろさど
らん彼まれ全能の神れはるまれしき怒のさろぶねを踐 十六
このまゝぐろもと股ニあるせる名あり曰あよつろの王あよ
あゆの主ニこまゝまれ一人れてんのつろひれ日のまろニ立

るをこゝなり。この空中にとぶ鳥にわれをいるる聲にてよびいひけるはなんぢら神のおほいなる筵にあつまれきたれ 十八諸王のにく將軍のにく勇士のにく馬とこれに乘るものゝ肉およびすべての大と小とれてゝちるにくをくらへ 十九我これけものの地の諸王およびその軍隊のあつまりて白馬にのれる者およびその軍隊とたゝかふをみなり 二十獸といつはりの預言者とをりよ擒にせらる。これ僞のよげんしやは前にけものゝしるしをうけたるものとそのかたちをおがむものとをまどはしゝ者なり。この二

のふなうれそ生まぐろ硫磺そもゆる火の池よまなげいきうれ三それ餘のもれい白馬よのまるそれの口よりいづるところれ剣よてころさをなり。そろくの鳥このまろの肉をくらひて飽り

第二十章

そを一人の天れつろひ底なきあるの鑰とおれいる鏈を手よなづさへて天よりくだるをみたり二このを惡魔とまるへサタンとまるふる龍まるそれ老蛇をとらへてこを千年の間おぢりおろんとを三こまるをそこるき坑よるげいを閉こめてそれらへよ封をまるし千年まぐるまぐく諸國の民をまどろをことまるのろおむ。それ後こるろび暫時の

あひだ繹はるべし 四 我おろくの座位をみしまそれうへ
に坐まるそのなり。このまろさばき此權をあたへらるまた耶穌
のあろしおよび神のことばれなめに首きられたるそのも
魂をみたり。こまたけものとそれ像をそのせだ其おろしを
額あろひは手にうけざりしそれもしなましひろり皆いきて
キリストとまもりて千年のなひだ王とろまり 五 そのほろ
此死人は千年をまるまでよみがへらざるなり是だい一の
よみがへりなり 六 これ第一のよみがへりにあづかるそれ
いさいわひなるかな是きよきそのなり此とものぐらはうへる第
二の死は權をとることなくろだ。のまろは神とキリストれ

祭司とゐりキリストと共に千年此あひだ王たるべし
○七 千年をへりてサタンその囚よりときはなたるべし八
この地いでゝ地の四方此列邦ゴグとマゴグをまどはし
これをあつめてたゝかはんとす。この人の數いうみに
沙のごとし九 この人ら地にあまねくのぼりて聖徒の陣營と
あいせらるゝ城とをこのこむ此ときに火てんよりくだりて
この人らをやきつくせり十 このまどはす惑者は火と
いおうの池になげいれられ即ちけもの及いつはりの
預言者のをるところにおとされ此いよるひる惱くるしみありて
世々やむときなし ○十一 又我白おゝいなる寶座とこれに

ざるる者とをみる地と天とそれ前をのがれて再びとゞまる處きところをえず十二また我小き大と小との
ものちやくざる神のまへにたつを見たり。そこに書ありて
ひらく另にまた一のふみありて展こと生命のふみあり
死しゝものそれかゝる書にあるところのことばより其わざ
にしたがひて審判をうくるなり十三海それるの死
人をいだし死と陰間とそれうちの死人をいだせり。これ
らおのく其行にしたがひてさばきをうけたり十四死とよ
みと火の池にすてられたり是だい二の死なり十五生
べて生命のふみにあるものは火のいけに

投いまられたり

第九一章 我あたらしき天となたらしき地をみたり先此て
んときさきの地ハまぞまぎきり海もまたなることるし 二
又聖城るる あたらしきエルサレム 備とのひて神のを
とをいぞゝ天よりくだるをみる其さまた新婦その新郎を
むかへんなめて修飾たるがごとし 三 我おほいなるこゑ此
天よりいづるをきゝり。いろく神のまくや人と間まあり
神ひとともまみ人このみの民とるり神また人とも
ものと在してそれ神とるりなまへるり 四 神このまろの目此
るみだをことぐく拭とをまた死あらざ悲哀るげき痛苦

あるごとくなり、そは前事まぞくさりぬるなり　五寶座にざまるを見我よりひけるを見よ萬物を新にせん又をきよりひけるをんぢ書あるせ。そはまことしくして確實なるべきなり　六彼をきよりひけるをまぞくなれりアルパなりオメガなり始なり終なり渴者に生命のみづの源よりそのむことをゆるさん七勝をうるをものはこれらのものをえんくその業とならん我はかれの神となり彼はわが子となるべし　八されど臆病なる信ぜざるをも憎むべきをも人をころすをもの姦婬をおこなふその魔術をなすをもの偶像をはいするをも及まべて謊

をいふ〻もの〻火と硫磺のそゆる池にそれ報をうくべし
是だいにの死なり〇九いやはそれ〻つのそぎもひれ盛
るる〻つの金椀をとまる七人のてんれつひの一人きた
りて我にこのたりいひけるや來〻まるんぢに羔のつまる
る新婦をみせん十我みる〻まに感じてんの使になぐさ
らまて大なるおろき山にいたれり此にそ〻まて大なる
まち聖エルサレム神のさる〻えをゝて神のめをいぐ〻
天よりくだるを示ス十それ城のひかり輝ことしいとたふと
き玉のごとく碧きとある金剛石のごとし十一こゝまて大なる
なるき石垣ありて十二門あり其門に十二のてんれ使を

れり門のうへにるをおるせり イスラエルの十二のその支
の名あり 三ひがしに三のそんあり北に三みつの門あり南に
三みつの門あり西に三みつの門なり 十四まちのいしがき に十
二の基址あり 其うへに小羊の十二使徒の名なり 五に
まことを語る者まちと門といしがきとをはかりたるに
金の竿をもちゐたり其まちは四方にてながさと闊と
おなじ 天の使きてその城をはかりしに六百里あり長は
闊と高とひとしかり 十七又その石垣をはかりしに人の度
にしたがへば 百四十四キユビトあり 人のはかりは天の使
のつかひ 度とおなじ 十八いしがきは金剛石にて きよきこと城は

きとろうめる玻璃のごとき純金をそうくまり十九城のいこのきの基址いきまぐの玉をそこのぎまり第一のそとるいこんぐうせき第二い青玉だん三いあろきなま第四い緑の玉だん五いくまるいの瑪瑙だい六い黄色の玉だん七いうき黄色める玉だい八い水いろの玉だん九い紅のなま第十い翡翠だん十一い深くまるい北玉だい十二いむろきき北玉まり三十二のまんい十二北眞珠まり一のまんおゆうくひとろの門をつくまり。まちの衢いまきとるぎやまんのごときおゆんきんまり三つ色城のあろま殿あるをとをそ。そい主なる全能の神おまび羔それみやるまんまり三又ま

ちよ日月のてらすことを需ぜ。そ神の榮光こゝをてらし且へこひつじ城のともしびなればなり 二四 よろづの國のたみこれ光によりてあゆまん 地の諸王おのれ榮と尊貴とをこゝにこれ城にきたらん 二五 そ門いん終日とぢをこゝに夜あることなし 二六 よろづ此民おのれ榮とたふときとをのて此まちにきたらん 二七 凡てきよこのろざるものと憎べきおこなひをなすものの或いつわりをいふものいん必ずこゝにいることを得ず唯こひつじの生命ふみこゝに錄さるゝものゝみ入るなり

第九二章

てん使いのちの水れこのはを我にあめせり其みづ

きとをりて水晶のごとく神とこしへの寶座よりいづ二城のちまたの中および河の左右にいのちの樹あり十二種の果をむすび一種を月ごとにむすぶをり。その樹の葉はよろづの國民をいやすをり。三 のろひて咒詛あることなく神とこしへの寶座そこになりその僕らつかへん四 かれらは神のみかほを見その名かれらの額にあるべく五 夜あることなく燈のひかりと日のひかりとを用ることなし。その主なる神かれらをてらしなほへんとおり彼儕はよよにかぎりなく王たらん六 天のつかひ又かれにいひけるは此言はまことにして誠實なり預言

者のなまゝひ此神ある主もろやろよ成んとまることを其
ものべどもよ示をなめよそ此使をつかはせり七ま遠よ
いなるん此ふみの預言のことばを守るもの八福あり○八
我ヨハネこもろのことを見聞せり。こもをみきゝせゝときに
我よこもろの事をものめせる天のつかひ此足下よひまこゝ
て拜せんとちけまべ九彼よまもよいふ然まべこのつかひつゝ
めよ我ハなんぢと同くものべより亦なんぢの兄弟ある預
言者おうびこれ書のことばをまもる者とおなじく僕あり。
なんぢな神をはいせよ十この事又よまよいひけるよ此ふ
みの預言のことをを封まることなの事。その時ものひまべ

なり 十一 不義なるものはいよいよ不義なるべし
なきものはいよいよ義なるべし 聖なるものは
いよいよ聖なるべし 十二 汝の報賞は我の
我に行ふところにしたがひてこれをなすべし 十三 我はアル
パなりオメガなり首先なり末後なり始なり終なり 十四 それ
衣をあらひしものは福なり この門のうちに入りて生命
の樹の果をうくることを得またもんより城にいることをうべし 十五 犬および魔術をなすものと奸淫をおこなふものと人をころすものと
偶像をはいするものとまたすべて誕をこのみて虚妄をおこなふものは
城のそとにあるなり 十六 それ耶穌その使をつ

そ〳〵てこの事をなんぢら諸教會にあかし〳〵せ我はダビデの
根また其苗裔なり我はこのぶや〳〵曙の明星なり十七靈と
ともよめと曰きたるをと。こゑを聞ものもきたれといふ渇
いきたるべし願ふをれは價なくしていのちの水をのむべし
十八凡此ふみのよげんの言をきくをれに証をなす若これ
ふみの預言のことばよくそふるをれはあれば神この書にか
けるところの災をそこれによくそへん十九又これ書のよ
げんの言をけづるをれはあれば神これをしてこの書にかけ
るところの生命のきの果ときよき城とにあづからることを
のぞしむ二十これ事をなかし〳〵まる者いひけるは我すぐ

速ようなろうんアーメン主いゑすきりすとの
くわん主いゑすの恩寵をべくとの聖徒とともようなろうんことを
新約聖書約翰默示録終

PRINTED FOR THE AMERICAN BIBLE SOCIETY
米國聖書會社藏板

SCC
7409
v. 3

BS315
.J35
1877
v.3